諺の如く、主人の疾病、病歿と相關聯して來ることがあるから、コヽで今一度繰り返して其用意を御忘れなき樣警告する。

(2) 事業に對する生命價値

創立後間もない事業では、貴下又は貴下の重要な共力者を失ふことが、破滅に近い大打擊を其事業に與へるかも知れない。之も或る程度迄は生命保險に依てカバーし得るやも知れず、又社內に於て國寶的に重要な人物、ソレが支配人、技師、熟練工の何れにしても、前よりは一層容易に生命保險に依る損失塡補がきく筈。一重要技師の死が、其會社を破產に導く例さへも珍らしくない近代工業では、必ず歐米に於ける事業保險を有效に取入れて、會社の基礎を强固にすることを圖られたいものだ。此事業保險に就ては、是非斯の道の專門家と御相談を御薦めする。

(3) 社會公共に對する寄附者としての生命價値

之は學校、圖書館、慈善事業の幾割かゞ、篤志家の喜捨に依つて成立、運行せられつゝある歐米の國情では、重要な價値であるが、日本では殘念乍らまだソコ迄行つてゐない。此一項も單なる洋書直譯に了る樣な氣がして、掲げまいかとも思つたが、中央、地方に於て、一生財界名士としての大なる尊敬を享け、さなくとも小さい市町村の大御所として、王者の如く仰がれた人の終焉が、檀那寺の經料五百圓か千圓では何としても寂しい。ドーか諸君は此便利重寶な生命保險を利用し、假令五千、一萬（遞減する年々二三百圓の支出）の小額でもよいから、財的有力者は必ず生前死後に於て、社會に一つの寄與を遺すものといふ好き模範を示して頂き度い。至囑。

## 二、投資としての生命保險

近年の低金利は、生命保險配當を高位に置き去りにした儘、グングン下つて行つた爲め、敏感な資產家諸君はトツくにから生命保險が配當丈けでも好利廻りの投資物であることに氣付かれたらしく、保險の大口契約が凄まじい勢で增加して行きつゝある。併し

まだまだイー氣持に居眠りをして御座る方も少くない。利廻り計算は諸君のお手のもの、保險の配當は今の一般金利から言へば二分でも結構、三分は保險が無償になると云つてよい。況んや其れ以上の配當に至つては全く變則的好條件で、永續しなくても何等の損はない。配當の高下に論なく保險の書物(ヒュブナー教授)には、投資としての保險を次の如く稱讃してあるが、何等の誇張もない立派な觀察である。

確實なる投資の總ての要件に依つて判斷すると、生命保險投資は殆ど完璧に近いものがある。ソレは、(1)收入の點に於て安全であり、(2)價格の變動なく、(3)危險の分散が行はれ、(4)投資の個人選擇の危險なく、(5)現金に化し易く、(6)卽時の融通に適し、(7)賦拂購入の最も便宜な方法に依る事を得、(8)何等投機的でない……からである。

之と略似寄りの觀察が、ローレンス、チエンバレーン氏に依つて行はれ、一般投資との比較表が示されてゐる。



投資から見た生命保險

| 投資種類 ＼ 標準觀念 | 資本安全性 | 回收確實性 | 利廻公平性 | 現金化性 | 擔保性 | 租稅免除性 | 管理不要性 | 評價容易性 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 生命保險 | 甲 | 甲 | 乙 | 甲 | 甲 | 甲 | 甲 | 甲 |
| 債券 | 乙 | 甲 | 乙 | 乙 | 乙 | 乙 | 乙 | 丙 |
| 擔保貸付 | 乙 | 乙 | 甲 | 丁 | 丁 | 丙 | 丙 | 丁 |
| 不動產 | 丁 | 丙 | 丙 | 丁 | 丙 | 丁 | 丁 | 乙 |
| 銀行貯蓄 | 丙 | 甲 | 丙 | 乙 | 甲 | 甲 | 乙 | 丙 |
| 株式 | 丁 | 丁 | 乙 | 甲 | 丁 | 乙 | 丁 | 乙 |

ローレンス・チエンバレーン氏ノ學說

此表の採點は必ずしも日本の現狀と一致しない處もあるが、兎に角好い參考資料である。但し生命保險の甲乙採點に就ては少しく解說が要る。諸君の理解を早める爲に、約十萬圓の保險契約に對し、五萬圓の一時拂(條件と年齡により之より高いことも安いこ

ともあり）がせられたものとして逐條解說する。

(1) 資本の安全性と回收確實性で……一年目に解約すれば約四萬五千圓に減ずるが、ソレは死んだら十萬圓取れる筈であつたので、此減耗した五千圓は一年間の保險料と見れば腹も立つまい。但し、此減損額も急速に遞減して行き、六年目には解約しても五萬圓出ず入らずとなり、十年か十一年目には解約したら約一割元金の五萬圓が殖へてゐる。換言せば六年後からは保險は無償である……。無償の意味は最初の投資に對し、元金は無瑕で年々三分か四分の利子(配當)を取つた上に、何時死んでも十割の特別配當が約束されてあることだ。前の章に一時拂ひは損だから信託へ、といつたのは此特配の十割は少ないから、二十割取らうといふ慾張つた相談で、損といつても損ではない、思ひ違ひのない樣に。

(2) 利廻り公平性の乙……は生命保險唯一の短所と見られた譯だが、現に四分五厘を二十年も繼續實行してる會社もあり、現今ではソレが銀行利は勿論、公社債の利廻り



以上となつてゐる。斯樣に今迄の成績は少しも短所ではなかつたが、只先々の事は豫測出來ない。豫測出來ないからといつて、保險の價値を輕重するものでは斷じてない。

(3) 現金化性……前の例で五萬圓を一年後に解約すれば四萬五千圓で、之に九掛けの四萬圓が最惡の現金化(會社から證券擔保に借り得ること)時期、六年目は四萬五千圓の現金化、十年を超へたら、五萬圓以上(遞增)の現金化が出來、滿期に近づくに隨つて保險金の十萬圓に近づいて行く。

(4) 擔保性……右(3)の擔保に入れての現金化は會社に對する擔保力で、他へ對しては貴下の對人信用が手傳ふから、只の三千圓か、四千圓掛けた保險證券が、立派に十萬圓の擔保にもなり得る筈。之は保險證券獨歩の優越性だが、御借りになる心配のない諸君は、却て對人信用で御貸しになる時に此便利を痛切に感ぜらるゝ筈だ。

(5) 租稅免除性……無稅ではないが、他の凡ての投資に優越する筈。

**家督相續**

| 課稅價格 | 相續人ガ被相續人ノ家族タル直系卑屬ナルトキ 稅額 | 超過金額ノ稅率 |
|---|---|---|
| 五千圓 | 30圓 | 千分ノ 7 |
| 一萬圓 | 65 | 千分ノ 9 |
| 二萬圓 | 155 | 千分ノ 12 |
| 三萬圓 | 275 | 千分ノ 15 |
| 四萬圓 | 425 | 千分ノ 25 |
| 五萬圓 | 675 | 千分ノ 35 |
| 七萬圓 | 1,375 | 千分ノ 50 |
| 十萬圓 | 2,875 | 千分ノ 65 |
| 十五萬圓 | 6,125 | 千分ノ 80 |
| 二十萬圓 | 10,125 | 千分ノ 100 |
| 三十萬圓 | 20,125 | 千分ノ 120 |
| 四十萬圓 | 32,125 | 千分ノ 140 |
| 五十萬圓 | 46,125 | 千分ノ 160 |
| 七十萬圓 | 78,125 | 千分ノ 180 |
| 百萬圓 | 132,125 | 千分ノ 200 |
| 二百萬圓 | 332,125 | 千分ノ 220 |
| 三百萬圓 | 552,125 | 千分ノ 240 |
| 五百萬圓 | 1,032,125 | 千分ノ 260 |

**遺產相續**

| 課稅價格 | 相續人ガ直系卑屬ナルトキ 稅額 | 超過金額ノ稅率 |
|---|---|---|
| 一千圓 | 12圓 | 千分ノ 14 |
| 五千圓 | 68 | 千分ノ 17 |
| 一萬圓 | 153 | 千分ノ 23 |
| 二萬圓 | 383 | 千分ノ 30 |
| 三萬圓 | 683 | 千分ノ 45 |
| 四萬圓 | 1,133 | 千分ノ 60 |
| 五萬圓 | 1,733 | 千分ノ 80 |
| 七萬圓 | 3,333 | 千分ノ 100 |
| 十萬圓 | 6,333 | 千分ノ 120 |
| 十五萬圓 | 12,333 | 千分ノ 140 |
| 二十萬圓 | 19,333 | 千分ノ 160 |
| 三十萬圓 | 35,333 | 千分ノ 180 |
| 四十萬圓 | 53,333 | 千分ノ 200 |
| 五十萬圓 | 73,333 | 千分ノ 230 |
| 七十萬圓 | 119,333 | 千分ノ 260 |
| 百萬圓 | 197,333 | 千分ノ 290 |
| 二百萬圓 | 487,333 | 千分ノ 320 |
| 三百萬圓 | 807,333 | 千分ノ 350 |
| 五百萬圓 | 1,507,333 | 千分ノ 380 |





| 相續人ガ被相續人ノ指定シタル者、民法第九百八十二條ニ依リ選定セラレタル者、被相續人ノ家族タル直系尊屬又ハ入夫ナルトキ 稅額 | 超過金額ノ稅率 | | 相續人ガ民法第九百八十五條ニ依リ選定セラレタル者ナルトキ 稅額 | 超過金額ノ稅率 | |
|---|---|---|---|---|---|
| 35圓 | 千分ノ | 9 | 50圓 | 千分ノ | 12 |
| 80 | 千分ノ | 12 | 110 | 千分ノ | 15 |
| 200 | 千分ノ | 15 | 260 | 千分ノ | 25 |
| 350 | 千分ノ | 25 | 510 | 千分ノ | 40 |
| 600 | 千分ノ | 35 | 910 | 千分ノ | 60 |
| 950 | 千分ノ | 50 | 1,510 | 千分ノ | 80 |
| 1,950 | 千分ノ | 65 | 3,110 | 千分ノ | 100 |
| 3,900 | 千分ノ | 80 | 6,110 | 千分ノ | 120 |
| 7,900 | 千分ノ | 100 | 12,110 | 千分ノ | 140 |
| 12,900 | 千分ノ | 120 | 19,110 | 千分ノ | 160 |
| 24,900 | 千分ノ | 140 | 35,110 | 千分ノ | 180 |
| 38,900 | 千分ノ | 160 | 53,110 | 千分ノ | 200 |
| 54,900 | 千分ノ | 180 | 73,110 | 千分ノ | 220 |
| 90,900 | 千分ノ | 200 | 117,110 | 千分ノ | 240 |
| 150,900 | 千分ノ | 220 | 189,110 | 千分ノ | 260 |
| 370,900 | 千分ノ | 240 | 449,110 | 千分ノ | 280 |
| 610,900 | 千分ノ | 260 | 729,110 | 千分ノ | 300 |
| 1,130,900 | 千分ノ | 280 | 1,329,110 | 千分ノ | 320 |

| 相續人ガ配偶者又ハ直系尊屬ナルトキ 稅額 | 超過金額ノ稅率 | | 相續人ガ其ノ他ノ者ナルトキ 稅額 | 超過金額ノ稅率 | |
|---|---|---|---|---|---|
| 14圓 | 千分ノ | 17 | 20圓 | 千分ノ | 25 |
| 82 | 千分ノ | 23 | 120 | 千分ノ | 35 |
| 197 | 千分ノ | 30 | 295 | 千分ノ | 50 |
| 497 | 千分ノ | 45 | 795 | 千分ノ | 70 |
| 947 | 千分ノ | 60 | 1,495 | 千分ノ | 90 |
| 1,547 | 千分ノ | 80 | 2,395 | 千分ノ | 110 |
| 2,347 | 千分ノ | 100 | 3,495 | 千分ノ | 130 |
| 4,347 | 千分ノ | 120 | 6,095 | 千分ノ | 150 |
| 7,947 | 千分ノ | 140 | 10,595 | 千分ノ | 170 |
| 14,947 | 千分ノ | 160 | 19,095 | 千分ノ | 190 |
| 22,947 | 千分ノ | 180 | 28,595 | 千分ノ | 210 |
| 40,947 | 千分ノ | 200 | 49,595 | 千分ノ | 230 |
| 60,947 | 千分ノ | 220 | 72,595 | 千分ノ | 250 |
| 82,947 | 千分ノ | 250 | 97,595 | 千分ノ | 280 |
| 132,947 | 千分ノ | 280 | 153,595 | 千分ノ | 310 |
| 216,947 | 千分ノ | 310 | 246,595 | 千分ノ | 340 |
| 526,947 | 千分ノ | 340 | 586,595 | 千分ノ | 370 |
| 866,947 | 千分ノ | 370 | 956,595 | 千分ノ | 400 |
| 1,606,947 | 千分ノ | 400 | 1,756,595 | 千分ノ | 430 |

家長が亡くなれば相續稅の取立が來る。如何なる家でも相續稅の爲に不斷から用意がしてある譯のものでないから、若し現金がなくば、動產なり不動產なりを安く手放して迄納稅せねばならぬ。之れは理窟ではない極めて實例の多いことだ。

一頃前大阪某新聞の記事に、紀州の山持ち長者で資產一千萬圓と呼ばれた某家が家長の歿後、稅務署から相續稅五十萬圓と査定されたが、別に借金がホンのチョッピリ三十萬圓ほどあるので始末が付かぬ。其當時の不景氣では山などてんで買手がないから一千萬圓の山を全部稅務署へ渡すとか、渡さぬとかいふ悶着の話しがあつた。大名華族中の豪家として名高い某△爵が、之も三十萬圓の相續稅出所に困じ、お家に傳はる重寶を賣り立てゝ漸く之に充てられたといふ話もある。

之れ等は最も慘めな一例だが、假令現金があつたにしろ、納稅の爲に運轉資本を幾分奪はれる丈けでも大きな打擊になる。保險を付けて置けば適切に此の缺陷を補ふことが出來る。

## 四、家產分配

富豪といふ程でもあるまいが、十萬二十萬から五十萬止りの身代で、多くの子女を有する人には、家產分配法として極めて重要な利用法がある。主人が健全で活動出來れば宗家の財產に傷をつけぬ樣に、夫れ夫れ獨立の生業を與ふる工夫もあらうし、少し遲くはなるが養老保險を受取つた時に、纏つた金を分配してやることも出來る。

若し中途に萬一のことがあつた際は、遺產分配の爲に宗家を衰微させぬ樣に、相續者以外には保險金を分配する方法を採ればよい。保險の金額は宗家の財產狀態と兒女の數に應じて定むべきだ。此目的には信託の利用が殊に妙である。折角受取つた金を、不慣れの投資に無くしたり、又は不心得の浪費に陷らぬ用心の爲には、之程適切な賴み場所は他にはない筈……。米國では年々拂はるゝ七億弗の保險金が、七年目には消へて無くなると發表されてゐる。

此の種の方法を「生命遺言」と稱へる

## 五、親戚友人の援助

諸君に若し困窮する親戚朋友あらば、保險で救ふて御遣りになるがよい。之れは後章保險の應用の處でも說く積りだが、諸君は保險金を擔保に金を融通しておやりになるもよし、又家長が死んだ時遺族が困らぬ爲、一面からいへば一層大なる厄介が貴下の手に落ちて來ぬ爲、可なり遺族の獨立出來得る額の保險を付けさすがよい。此の場合には大抵本人の努力に依つて掛金を自分でするから、貴下は萬一保險の掛金に困る時を受合つてやる、無形の援助丈けでよい。換言せば、保險料を保險してやればよい。

## 六、使用人の生命保險

使用人に對しても保險は頗る妙である。自分の店なり、會社なりを死場所として働かせるには、賞與金の一部を短期に拂濟みとなる保險として與ふるもよし、或は最初から



の約束次第では、萬一の死亡に際して主人側は、一時に多額の見舞金支出を不要とすることも出來やう。養老保險にして置けば一定年齡の際、功勞金として與へることも出來る譯だ。事業保險として會社の重役、技師以下へ保險を契約することは前に書いた。

## 七、社會公共に對する寄附者としての利用（重ねて）

私は前の章で諸君を生存上不要の金を儲ける人といつたが、實際今有り餘る金を、更に增加せんことに熱中し、熱中とまで行かずとも、大いに希望せらるゝ樣に見受けるが、そんなに溜めてどうなさる、イヤ大きにお世話だとの御挨拶があるかも知れないが、外から冷靜に見て居ればよく判ることが一つある。それは前にも言つた樣に能率遞減の法則で、一定度以上の金はいくら殖やしても其爲に幸福を增すものでなく、之れを散じてこそ急に幸福を增すの一事である。

イヤ、それはよくわかつてゐるが、そこが凡夫で巨萬の財產を一時に割くに忍びぬと

か、第一祖先へ濟まぬとか言ふ人は、生命保險を利用なさるがよい。何か自分が此の世に生きて居つた印に、墓石以外の足跡を遺したい人は、年々其積りで三千圓乃至四五千圓づゝも保險に掛けて置けば、死後十萬圓の金を公共に寄與することが出來る。

之れは前に書いた救命艇と兼用にして、家運が隆々と行けば公共に提供し、衰微したら自分か又は遺族の使途に充てる。兩天秤の穩健な方法にも使用せられる。

併し『身後の名豈生前一杯の酒に如かんや』で、折角だから生前に名譽を享け、寄附した事業の結果を見度いといふ人には、夫れも御尤もだと贊成する。然らば貴下は先づ、五萬なり十萬なりを卽刻寄附なさい。そして其孔埋めに保險に加入せらるればよい。長命ならば貴下の御手許では痛くも痒くもない年賦で濟崩しとなるし、明日死んでも遺族に迷惑はないといふことになる。之れは私の新案でもなんでもなく、歐米では盛んに實行してゐることだ。



× × ×

其他富豪資產家諸君は、義務としても保險に加入する必要は相當にある。保險は社會的に相互扶助の重要なる機關であるから上流の諸君は自ら進んで此の仲間入りをし、中下の階級を扶掖誘導する位の殊勝な心掛けはあつても宜しい。

併し前から述べた丈けの利用法があり、又資產家だから掛金に割增しがあるわけでもないから、義務があるなんかと言はなくてよい。否、考へて見れば生命保險で比較的最も利益を得るものは矢張り資產家諸君かも知れぬ。

勿論保險の效果と必要は、上流よりも中、下の階級に多いことは爭はれないが、其代り彼等は非常に大なる代價を支拂ふて居る。卽ち、中流以下は何十年間多大の努力を以て掛け續けねばならないのに反し、諸君は殆ど意に介せざるの金、換言せば只少しの面倒を辛抱する位の思ひで掛金をなし得る。夫れさへ厄介とあらば、一時拂で一生に只一

度掛金をすればよい。而も上述の如く其效果は決して輕視すべきでない。そこで若し、努力に對する報酬の比例を以て論ずれば、最も安價に生命保險の利益を享くるものは富豪資產家諸君なりといへないこともない。

× × ×

最後に一言して置くが、保險の必要は充分に解つた。只俺がいくら金持ちでも、毎年千圓以上の支出は君が言ふ程、容易なものではないとか、出すには出すがチト困るとか、ソレ程でない迄も支出に一種の抵抗を感ずる人は、甚だ失禮な申し分だが御自分の位置を誤解、錯覺して御座るのだ。

貴下はまだ富豪でも、資產家でもなんでもない。貴下こそは私が最初から口を酸くして保險の必要を說いた中流階級の稍上部に位せらるゝ迄だ。猛然として自己の位置を自覺反省し、謙遜な態度で保險の利益を享受せらるべきである。

# 第十七章　生命保險の利用

生命保險の第一の利用は、一家の柱石たる家長の死亡に際し家族が路頭に迷はぬ爲の保障である、之れが生命保險の使命であると言つてもよい。僕が此の小著を書くに至つた動機も、屢々此の保障を失ふた憐れな家族を見て、たまり兼ねた結果に外ならぬ。

併し生命保險は此の主要の使命の外に、種々なる方面に應用の道がある。前の章に述べた樣に、今死んでも遺族生計上の心配が少しもない資產家階級、言ひかへれば保險の第一使命には少々緣遠く見へる人々にさへ、あの通り種々利用の道がある如く、生命保

險は人事百般凡ての方面に澤山の利用がある。今次に項を逐ふて記すとしやう。

## 一、信用の機關として

保險の書物には次の樣に書いてある。

『保險ハ啻ニ被保險者自身ヲ安堵セシムルニ止マラズ、之レニ對スル他人ヲモ安心セシメ、隨ツテ被保險者ヲシテ世間ニ對スル信用ヲ厚カラシメ、金錢ノ融通ヲ圓滑ナラシメ云々』

商工業の發達に信用の大切なることは、今更論ずる迄もないことだが、一寸の貸借にも一々擔保といふ譯には行かぬから、一定度迄は必ず對人信用だ。併しいくら信用の出來る人でも事業成功前に死亡することを慮ると、生命保險がなくては信用を以て資本を貸す譯に行かない。歐米でも時勢とはいへ生命保險といふ事が出來てから、始めて商工業の信用取引が今日の如く盛んになつたのである。

今資本を借りて商工業を營んで居る人が、之れを返濟し切らない內にポックリ死亡し、債主が資金を引上げるといへば事業は潰れる。此の時此の事業を繼承する人が生命保險で債務を償へば、人は死んでも事業は殘る。又二人以上の組合で事業をして居る途中で一人が死ぬ。遺族が持分の資本を持つて退きたいといふ時も、初めからの準備次第では生命保險で此の持分を補ふことが出來る。

更に又生命保險は商工業者に勇氣をつけ、其家族に安心を與ふる效が著しいものだ。例へば今一萬圓の財產の人が、お金を全部使つて冒險的事業をなさんとする時に、生命保險がなければいくら無鐵砲の手一バイといつても千や二千は家族保護の爲に殘して置かねばなるまいが、保險を利用すれば一萬圓つけても、一ヶ年三四百圓の保險料を拂ふた後の財產はソックリ事業に使ふことが出來る。

少々脫線だが、序に消極的勇氣の事をも書き添へて置く。萬一不幸にして手嚴しい大損をしたとか、借金で首が廻らぬといふ人があつたら、必ず保險といふものを考へて見

る必要がある。「敗れたる瞬間勝つべきの機會あり」と言つて勝ち通しに勝つたナポレオンも、お客さんを招待する樣に首都モスコーへ敵を導き入れ、フランス軍の餓へ凍へるのをじつと待つてたといふ隱忍持久主義のロシアには滅茶々々の敗北をした樣に、大損をした後、アセリ氣味で更に敗れた瞬間の勝ちを狙へば、此の分で大抵は根コソギ身代を潰してしまふ。それよりも今損した丈けの保險を付け、家族が責めても、友人が笑つても、此の大孔は死ぬ迄の年賦拂ひ。死んだら卽刻皆濟と腹を定め二三年冷靜に機會を待つて御覽。アヽうろたへなくてよかつたと思はるゝ節が屹度あるだらう。

## 二、擔保としての保險證券

第一は會社から金を借りることが出來る。

其融通高は保險證券に書いてある解約返還金以內(九掛位)で初めの三年五年は餘り役にも立たぬが、十年、十五年と經てば一廉の融通が受けられる。殊に養老保險の滿期前の如きは、千圓の證券で七八百圓の融通が利く樣になる。之れが一廉利用さるべき保險の貯金的方面だ。

第二は右にも增して有利な利用法である。

今甲が自己の親戚又は友人なる富裕な乙に五百圓の金を借りに行つたと假定する。乙は甲の正直律義なことも、又充分の手腕あることも信じて居るが、甲には擔保がない。そこで萬一死んだ時には全損となる。甲も此の事が心苦しく、乙も內心此の點が厭だ。

此の際若し甲が、假りに四十圓の掛金で千圓の生命保險を付け、之れを擔保としたらどうだ。勿論親戚、友人の間だから利子は成功拂とすればよい。其代りに五百圓に對する八分の利子と思つて、每年の保險掛金を怠らぬ樣にする約束。事が成功したら元利を揃へて返濟するし、萬一死亡したら利子迄差引いて取つても、四百圓以上の金は遺族に返してやられる。

此の擔保が、若しズット確實に見へる動產不動產であつて御覽、主人を喪ふた悲嘆の

場合に、親戚、友人ともあらうものが餘程心を鬼にしなければ擔保物件を取り上げることは出來ぬ。隨つて確實の樣で餘り確實でない。四十圓の金が卽時十倍以上の五百圓の擔保になり、同樣の方法で四百圓が五千圓の擔保になるとすれば、之れも生命保險の一奇蹟であらふ。

## 三、疾病保險としての應用

主人の保險は遺族保護が第一の目的であるが、奥さんや子達には疾病保險としての生命保險が付けて置き度い。之は大病の時充分に養生費を使つても、死なば保險金で卽時に支拂が付く、全快すれば人の命を一つ拾つたのだから、養生費の消へたのはゆるゆる辛抱して取返すといふ意味で心强いものだ。著者永年の町醫生活で、此邊の事情はよく心得てゐるが、餘程の大病でも千圓で始末が付かぬといふことはない。アバレて使へば際限はないが、肺病で二三年ブラブラしても、又は外科で內臟の大手術を受けても、千圓で足らぬ場合は滅多にあるまい。此外の事は前の章に幾度も種々の例を擧げたからこゝには省くことゝする。

## 四、學資、婚資、獨立資金としての應用

學資金は二重の保險を要することを忘れてはならぬ。

其一——は中等階級の人にして、資力不相應に高等の學校に子弟を送つた時、萬一其子弟が中途死亡せば家產に大孔を空けるか、或ひは借金のみが手に殘る。斯かる子弟には學資金の一部と思ひ、千、二千、三千の保險を付け置くべきだ。幸に若い人は掛金が非常に低廉だから好都合である。

其二——は勤勞所得によりて子弟を學校に送りつゝある人は、家族生計の爲の保險以外に、自己の死に依り中途廢學の不幸を見せしめぬ樣、之れ又學資に引き當てゝ千、二千、三千の保險をかけ置く必要がある。此の際は契約者の年齡が多いから、前の若い人より

もズット多額の掛金を要する不利がある。

こんな反對說が出た。君の說は机上の空論といふものだ。吾々小額の勤勞所得者が子供を學問させるといふ時は、一家總動員の努力を要することは君も知つての通りだ。其俺達に君は二重といふが、僕から言へば學資と共に三重の支出が出來ると思ふか。

然り御尤もだ。だから僕も言つた筈だ。君が千圓の年收の時に千圓の保險を付けて、之れで保險は濟んだ積りで居るから、子供に學問はさせないのですかつて問ふたらう。

元來君は作戰を間違つて居た。家族の生活保障の保險と、父親の分の學資保險（本章其二）とは、子供の遊學當時には既に五年、七年の效力延長が出來得る樣に前から心積りをして置けば、家計の餘剩は凡て學資に振り向けられるではないか。無論子供の保險（本章其一）丈けは學資の一部と見て出さねばなるまい。但し之さへ次の項にある十歲からの保險を五年も掛けて置けば、後は大學卒業迄に只の一度か二度、思ひ出した樣に掛けたらよい。



乳幼兒に契約の出來る學資保險といふのもあるにはあるが、其頃は今言つた君の保險の充電を急ぐ時期でねー。

× × ×

多くの會社は十歲から保險を契約する故、子女十歲に達したなら、男子は三十歲前後に獨立する際の資本（成長して高等の學校に入れば此の保險が前記其一の學資保險と兼用せらるべきは勿論なり）として保險を付け、……

女子ならば二十歲前後の婚資（假令保險が二十歲に滿期せざるも持參金の一種として有利な會社の未拂込株券の如き用をなす）として保險を付け置くは頗る妙である。

斯くすれば萬一中途に死亡したとき、せめて形見の父母養老金を遺して呉れることゝなり、長男、長女ならば、次男、次女へ纏りたる學資、婚資を遺して置いたことゝなる。此の點貯金より意味深し。萬一大病の場合には疾病保險と見做し、思ひ切つて療養の出

來ることは前に書いた通りだ。餘談乍ら著者は斯かる意味で、次男に一萬圓、三人の娘に各二千圓づゝの保險を付けて居る。

## 五、保險を通じての助け合ひ

之れは言葉が意味をなさないかも知れぬが、僕の積りでは親戚又は親友間の助け合ひは、必ず保險會社を中間に置き、直取引きの形とならぬが有利なりとの意味である。

誰れでも氣が付いてか又は氣が付かずにか、小さい保險を自分で作つてゐるものだ。近い例が、あの叔父は氣に喰はないが、萬一の時世話にならねばならぬから、餘り御機嫌を損じない樣にするとか、兄弟が互に力になり合ふとか、友人中の特別親しい間柄で互に後事を託し合ふなど、日常見る處であるが、之れには餘程保險の意味が籠つて居る。

併し此の「依賴」「助け合ひ」は實際に當つて甚だ故障の多いものだ。今こゝに兄弟親友間で互に遺族の扶養を託し合ふたと假定したまへ。若し一方が死んだら他の一方は一人で二家族を扶養せねばならぬことになる。此のセチ辛い世の中に、こんなことが容易に出來るものか。若し强ひて行へば兩家共倒れとなるかも知れぬ。

そこで世間で實際之れがどうなつてゐるかと見れば、殆んど凡て賴まれて賴まれ甲斐のないのが普通になつて居る。現在の兄弟、子供からいへば叔父に賴んだ保護さへも、なかなか遺憾なく行はるゝのは稀だ。赤の他人より情けないとの訴へさへ屢々聞く。

二宮尊德程の德行家の父の兄弟で、アノ萬兵衞叔父の强慾の仕打はどうだ。漱石の小說『心』の主人公が叔父に對する憤懣を始めとし、毎度キネマで涙を搾らるゝ孤兒の悲哀なんて藝題には、世の伯父叔父の非道を寫したのが隨分にある。紅葉不朽の傑作『金色夜叉』の間貫一を、一生のスネ者にしたお宮の父も、叔父ではないが貫一の父に恩義を受けた人、他人に恩義を施しても遺族の保險にはなり兼ぬるよい實例。

併し賴まるゝ側になつて考へて見れば、多少恕すべき點がないでもない。前にも言つた樣に、餘りに義理を重んずれば共倒れになる。要するに兄弟知己に、遺族の扶養を託

するのが間違ひだといふことになる。

然らばどうすればよいのか？、僕に名案がある。曰く……生きてる中に生命保險の世話を賴む……只之れ丈けだ。

元來大切な遺族の扶養なんて事は、どうあつても他に託すべき筈のものでない。託するにしても膳立てをして、ホンの世話丈けを賴むべきだ。膳立てとは無論生命保險を契約して置くことである。そして兄弟や知己の間柄での助け合ひは、保險の掛金に行詰つた時に助け合ふがよい。生きてる間に一度や二度、保險の掛金を出し澁る樣な兄弟知己があつたとしたら、之れがなんで自分の死後に妻子の面倒を見て呉れるものか。よいテストにもなる。現に僕自身も兄弟や叔姪の間柄、及び僕の宅に永く居て呉れた人々との間で、常に標題の如き「保險を通じての助け合ひ」を實行して居るが、何んとも言ひ難い妙味がある。斷じて机上の空論ではない。切に此の方法を諸君に奬める。



## 六、健康の證明

日本ではまだこんな例は餘り聞かないが、歐米あたりでは保險會社は屢々結婚前の男子から、保險證券の矢の催促を受けるといふことだ。之れは一面資產なき人の結婚には家族への義務として保險を付けるのと、一面は充分健康であるとの證明にもなるのだ。

結婚の前に見合ひはしてもなかなか裸にして健康診斷をするわけには行かぬが、保險會社は世の中で最も現金な損得の計算からやる仕事故、遺傳の關係から既往の疾病迄、充分誠實の陳述を要求し、其上に身体檢査を嚴密にして尿の檢査迄行ひ、凡そ六十歲迄の天壽は大丈夫と見定めた後、始めて保險を契約するのだから、結婚の附帶條件としては頗る面白い。どうか我國でも大いに此の風を流行させ度いものだ。

## 七、恩給價値の下落を補ふ爲に

恩給年金を持つて居る方は勿論、將來恩給を得る見込みの人も是非此の一節を精讀してもらひ度いと思ふ。さて恩給價値の下落といふ標題の意味からが不審な方もあるだらう。それは恩給年金を持つて居る方で、年金の價値は年々下落して行くものであることを御承知ない人が隨分あるから。

年金の價は次の如く計算する。先づ、本書の一七頁から自分の年齢に相當する平均壽命を探して來る。假りに貴下が五十歳としたら平均壽命は一八・四九であるが、端數は切り捨てゝ統計上今後十八年は生き延びるものとの推定が立つ。百圓の恩給を受くる人は此の十八年に百圓を乘じた千八百圓が現在の價値である筈だが、實際は之れよりも遙かに少い。

何んとなれば十八年後に受取る筈の百圓は、今日唯の五十八圓七十四錢を三分（利率を假りに斯く定む）の複利で預けて置けばそれだけに殖へるから、今日の取引となれば五八円七四の價しかない譯。同樣十七年目の百圓は六〇円五〇の原價しかない。斯樣に現在の價格に引き直して行くのを利引きといふが、今年の百圓に後十七年の利引きした現價を加へた總計一、三七五円三五が五十歳の人百圓の恩給の現價となる。勿論五百圓の人は此の額を五倍、千圓の人は十倍すればよい。

但し平均壽命は普通の加減乘除で行かないことがある。それは前の平均壽命表（一七頁）で御覽になれば解ることだが、例へば今の五十歳の人が十年生き延びて六十歳の時は殘り八年かといふに十二年餘で、更に十年生き延びた七十歳には殘り二年かといふに七年餘だ。更に七年生き延びて零になる筈の七十八歳の時にまだ四年殘つて居る。

之れが爲に多くの人は恩給を無盡藏の寶庫の樣に思ひ違ひをするのであるが、併し恩給の泉も一年毎に涸れて行く。九十歳になればもう後二年しか頂けない道理だから、一寸心細くなるけれど、之れが恩給の實際の姿である。

今一つ諸君に御氣の付かない事がある。恩給年金の價値は未だ受取らない前から現に受取つて居る人と同率で減少して行く、同額の恩給でも四十歳で頂くと、五十歳で頂く

とは大違ひ。極端な例を擧げれば最もよく判るが、只今の計算で五十歳の人の百圓の恩給は千三百七十五圓で、九十歳の人になると唯の二百圓。

之れは實際には無いことだが、了解に都合がよいから假りに或人が九十歳迄勤續して三百圓の年金を頂いたとしたら、一時金の六百圓と選ぶ處がない譯になる。之れが四十五十の人ならば、三百圓の年金には高利貸でも五年分の千五百圓は融通するものを、隨分と憐れな減り方ではないか。

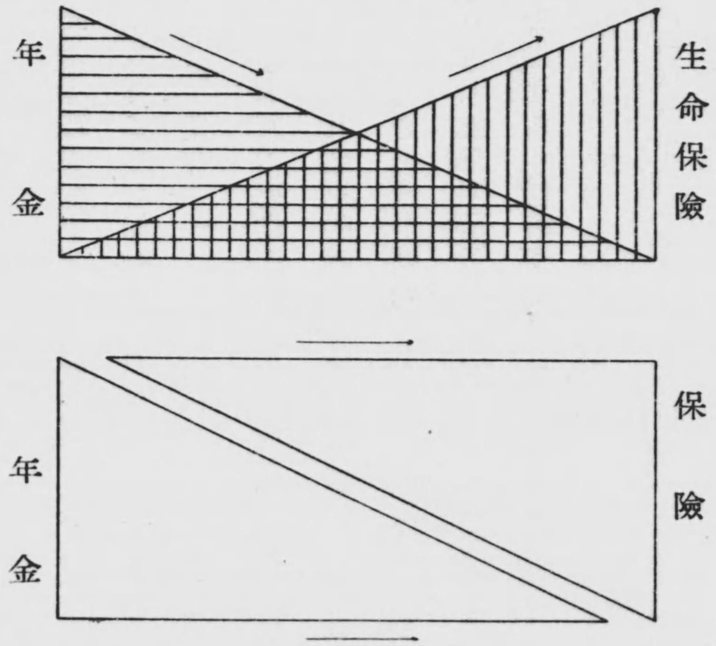
もう一度繰り返す。恩給は例へば奥樣が御使ひになる樟腦の樣なものだ。まだ衣物の間に入れないで、机の引出しにある間にもヅンヅン減つて行く。貰ひ始めてから減るのは諦めも付くが、貰はぬ前から耗りつゝあるなんかは隨分と心細い。恩給が年金がと頂かぬ前から樂しみになさる方々は猛省一番すべきである。

然らば之れを補ふ良い工夫はないか。有る大いにある——生命保險を付けることだ——之れが又バカに都合のよいことには年金の價値の減ずると丁度同率で生命保險の價値



が增加して行く。學問上から言つても年金の眞裏が保險である。其狀を圖で示すと下の樣になる。

養老保險の價値が增加する比例は勿論此の圖よりも早いが、之れは極く不利に計算して間違ひのない處だ。いかにも之れならば心配はない。只一つ大切なことを一言申添へて置く。年金の價値は頂かない前から減じて行くから、將來恩給年金を受くる筈の人は、年金を受領するのを待たずして、保險を付けるべきである。さうすれば二重の利益がある。



第一は前に述べた恩給價値の減耗を補ひ、第二は自分が職務を離れて收入の減ずる頃、即ち年金を頼りにする頃には、保險の掛金が配當でヅッパリ減じて居る。前にも一寸述べた樣に都合次第では五年や七年掛金をしなくとも保險の效力を失はない時機に達して居る。

殊に最も配合の妙を極めて居るのは、恩給は本人の死亡に依り本年にもピタリと止まるが、其時が丁度保險金を受取る時期になる。之れ迄恩給若くは俸給に衣食した人は、急に少くはなつても保險金の金利で生計が立つとか、或ひはそれ程にはゆかなくとも多少は元金へ喰ひ込みつゝ、(第二十三章の食ひ盡し表參照)概ね扶助料もあることなり、其内に小兒が大きくなるとか、なんとかして細々乍らも活路が開けることになる。

## 八、軍人と生命保險

吾人は今曠古の大戰に直面して居る。此一項は心して讀んで頂きたい。著者も十年間軍人生活をした体驗がある。想像や架空の說ではない。

軍人には老後生活の安定を恩給に託する人が少くない。隨つて恩給の關係丈けでも前項の理由で保險を付ける必要があるが、まだ外にも保險の必要な理由がある。いくら軍人は理財に無頓着だといつても、家長として遺族の立ち行くことは、一應顧慮して置かねばならぬ。餘りに豪傑氣取りで子弟にロクな教育も出來ぬ樣では、第一『七生報國』の趣意にも背く。軍人が遺族を窮乏せしむることは體面にも係はり、一般の尙武心にも惡く影響する。

又平生は大言壯語し、マサカの時に後顧の憂ひがある樣では甚だ不用意と言はなければならぬ。ソレよりも平生質素の生活をして餘裕を作り、之れで一定の保險を付けて置いて、萬一の際に恩給の不足を補ふ心掛けが肝要だ。

恩給の不足といふ意味は種々ある。後年物價漸騰、生活向上の爲に起る不足もあるし又軍人の本分として第一に考ふべきは戰死だが、同じ戰地で死んでも戰死と病死は恩給

の額が違ふ。誰しも死ぬなら死花の咲く戰死が望ましいが、之れは其人の運命で何れになるか豫め期するわけに行かぬ。最も不幸なのは戰地で病因を得るとか、又は負傷の爲に生活力が弱つて戰後に死んだ場合の如き、恩典は概ね更に減ずる。

凡て物の計畫には有り得る最惡の場合を想像せねばならぬから、右樣の不幸な場合も考慮の中に加へてこそ、始めて眞に後顧の憂ひなしと斷言出來る。斯くて邁往奮進の勇氣も一倍加はることゝなるだらう。

今一つ軍人として平生の用意が必要なことは、戰爭が大きくなれば保險會社は自衛上軍人との契約を中止せねば立ち行かぬ場合もある。少くとも非常に不利益な條件を忍ばなければ契約出來ぬことになるかも知れぬ。隨つて諸君は凡そ自己の萬一に必要だと思ふ額を平時若くは應召前に契約して置かねばならぬ。

又會社によりて戰時割增保險料を取るのと取らないのとあるが、軍人としては割增金を取らない會社を選ぶことが肝要だ。之れも必ず油斷してはならぬ。

要するに諸君の行李は充實するとも、戰用品は完備するとも、相當額の生命保險を付ける迄は、個人としての動員計畫に缺點ありと申さねばならぬ。

以上は專ら現役將校を標準として說いたが、身荷くも軍籍にある諸君は、何時一身を君國に捧げなければならぬかも知れないから、一般の人よりも特別の顧慮と準備を忘れてはならぬ。

× × ×

（附記）

以上第十七章迄を前編總論とすれば、以下の第十八章から第廿三章迄が後編各論となる。以上の前編で生命保險とは何か、其利用は如何といつた樣な問に對して略答へたことになり、それで多少諸君の了解を得たとすれば、一般の講義と異り、後編は極めて簡略でよい。以下六章は其積りで簡潔を旨とし、只無味乾燥に陷らない樣注意して專ら保險の實際問題を說明することゝする。

# 第十八章　生命保險の歴史と沿革

英國の或る貴族は海賊の子孫といふことを、家系の誇りにして居ると聞いたが、日本でも瀬戸内海の或る島には、其先祖が海賊であつたことを一般から名譽の如くもてはやすM氏といふ豪家がある。まだある、講釋師は勿體なくも某侯爵の先祖を織田・豐臣時代の山賊の御頭であつたといふ。さうなると保險も今が立派でさへあらば先祖調べなんか無用のことだが、保險計りはいくら古い先祖へ遡つても概ね救世濟民の匂ひがある。之れ丈けは豪い。

只一つ祖先の英、米は元より日本でも、有頂天の道樂息子が澤山生れて宗家を危くした歴史を皆持つて居る。それが揃ひも揃つて最近の立派な組織になつてからの事だ。保險



會社には海賊や、山賊の血はあるまいが、道樂息子が生れる血統が濃厚にあると心得、警戒の上にも警戒せねばならぬ。

さて保險の最も古い歴史をたどれば紀元前一千年「イスラエル」王「ソロモン」は輸出税の如き賦課金を課して海難に遭つた者に損害の補償を與へたといひ、又今を距る二千五百年前「アッシリア」の全盛時に、國王が住民に課した賦金で、火災、天災を救濟せしめたといふ。之れ等が海、陸の最も古い原始的保險だと稱へられる。

紀元三百年代の頃、猶太人が隊伍をなして旅商をなすに當り、自己の過失又は懈怠に因らずして馬を失つた時は、團体で其損害を償ふ代りに、豫備の出金を命じるといふ法典が殘つて居る。

希臘、羅馬の冒險貸借といふのは、海上保險に餘程よく似たもの、中世の「ギルト」はもう立派に近代的保險の母といへる。羅馬に起つて中世に盛んになつた年金賣買も、伊太利人「トンチ」の案出した「トンチ」法などといふのも、生命保險の一起原をなして居る。

十四世紀頃小亞細亞の聖跡巡禮者も旅立前、蠻人の殺害、拿捕に對し、當時の海上保險業者と保險類似の約束をしたものだ。

こんな例を擧ぐれば際限もないが、前に列記した樣な萠芽が段々發達して、一七〇六年倫敦に「アミケーブル・ソサイチー」といふ寡婦孤兒保險會社が出來、同六十二年愈々近代的要素を具備した「イクキテーブル」生命保險會社が創立せられた。而も此の會社は今日も尙連綿として立派に繼續し、世界最古の生命保險會社たる名譽を擅にして居る。

其次に出來たのが一七九七年の「ベリカン」生命、一八〇六年の「ロンドンライフ」外二社、次は連年一二會社の新設を見ざるなく、皆相當の成績を收めて、一八三〇年代の半ば迄黃金時代が續いたが、一八三六年「ウエスト・ミドルセックス」といふ會社が起り、前に言つた道樂息子流の經營で先づ數十萬磅の保險料を倒し、其後簇出する泡沫會社の放漫なる營業は、會社の破產事業の轉賣を續出し、一八四四年より一八六七年に至るまでに三百三十の生命保險會社が潰れたり、合併して消へるといふ大混亂に陷つた。此の勢で一八六九年有名なる「アルバート」會社の破產から、政府も同國傳統の放任主義を拋ち、一八七〇年生命保險會社條例でギュッと締め付けた。之れで漸く目が醒めて再び英國人の國民性なる堅實の方向に進み、今では內容の鞏固な點に於て世界第一と稱せられて居る。

獨逸で世界的に有名な「ゴータ」會社の出來たのは一八二七年で、此の國には珍らしく道樂息子を出さなんだのが不思議。

米國では一八四二年に「ミューチュアル」、同四三年に「ニューヨーク・ライフ」、一八五九年に「イクキテーブル」生命といふ順序に同國の三大會社が出來たが、同國の經濟的發展と共に生命保險も異常に發展し、それがつい浮足となつて、一九〇四年「ワシントン・ライフ」の責任準備金不足事件が發見せられ、翌五年「イクキテーブル」に於ては其副社長にして大株主なる「ハイド」氏が一味の役員と共に、同社四億弗の資產を自由に處置して投機に利用し、之れを以て他の企業會社を買收して其社長取締役を兼攝すること七十

の多きに及び、亂行を擅にした爲、社長「アレキサンダー」其他要部の職員が、之れを彈劾したことから端なくも社會の耳目を驚かし、會社に屬する數千の代理者は檄を飛ばして四方より集り、數十萬の保險契約者は危惧と憤恨の爲、騒擾鼎の沸くが如く、萬口一齊株主役員の專制を排して相互組織とせよ、契約者の會社とせよと絶叫し、之れが他の會社へも飛火して、一時生命保險會社は社會上下の憎まれものになつた。

此の時大統領「ルーズヴエルト」前大統領「クリーブランド」氏等の調停で、海軍卿「ポール・モルトン」氏を社長に推して社内を刷新し、檢査を嚴にし、法令を密にし、漸く民心を鎮撫したけれど、一時は生命保險の聲譽全く地に落ちた。

併し米國人の宣傳上手と、萬事公開的なるとは間もなく一般の安心と信賴を回復し、次いで世界大戰當時政府の軍人軍屬に用ひた恩典的、社會政策的保險が一層國民の保險に對する信用と好感とを高め、經濟的實力と相俟つて今や名實共に世界最大の生命保險國となるに至つた。

× × ×

我が國に於ける生命保險の開祖は、明治十四年七月創立せられた明治生命保險株式會社である。之に先立つ一年、共濟五百名社なる香典組合と言ふ型の相互組合が出來て居たが、之れは現今の生命保險たる條件を具備して居なかつたから開祖とは言へない。此の組合は後に共濟生命へ引繼ぐことになつた。明治生命が出來てから七年目の明治二十一年三月帝國生命、翌二十二年に日本生命が出來たが、此の三社は其後幾多の風雪を凌いで今日も尚依然五大會社の列に在り、角力で言へば幕内といふ格で榮えて居る。

處が其後が大變だ。此の三社が處女地の開墾を始めて漸く事業が緒に就くと、明治二十六年から二十八年にかけて雜草の様に、三府は元より其他の都市に凡そ三十の會社が設立せられ、次の兩三年間に又十數の會社が出來た。此の濫設會社は明治三十三年三月保險業法の發布で大淘汰に遇つた。保險界は大掃除を行つてキレイになつたが、之れ等

のボロ會社から受けた民衆の保險に對する不安、不信は近年迄保險の發達を妨げた。

此の大掃除の末期に一大事件が起つた。或る野心家が先づ大阪生命を買收し其資産を利用して之れ等瀕死の數會社の株式を買收し、併呑又併呑相當の大きさになつたが、勿論事業經營が目的でなく、各社に積立つてある多額の責任準備金へ目を付けた惡黨の仕事で、遂に明治三十八年二月司法權を以て解散を命ぜられ、被保人五萬の有する一千萬圓の契約は煙りになつてしまつた。之れが有名な大阪生命事件である。

私が比較的不急に見へる保險の歴史を稍長々と書いたのは實に此の英、米、日本共に生命保險が道樂息子に累された苦い苦い歴史のあることを示し、更に今では眞面目に經營して居る如く見へても、基礎の弱い會社などは株主の變動に依つて、いつ又同樣の憂目を見せらるゝやも計り難いことを諸君に警告したい爲であつた。大阪生命の大嵐の後は生命保險界は至つて平穩の日が續いたが、それでも明治四十二年に日宗、大正三年に內國生命の破産あり、茲十年前には八千代が殪れかけて、被保人は實に進退兩難の苦しい立場に陷つたことは前の章に書いた通りである。其後も緩慢に再整理が行はれ解散、整理、讓渡、合併など十餘年前の四十餘社が昭和十三年末の現在は二十九社（徵兵保險を加へて三十三社）に迄減少整理された譯だが、まだまだ今でも監督官廳の目の光つてる會社が若干あるとの噂。それで會社の選擇を如何に愼重にせねばならないかゞ略ぼ御解りになるだらう。それから次は話しを前に戻し、相互會社のことを述べて此の章の結末を付けることにする。

保險業法の發布で大掃除が出來た後の明治三十五年九月、非射利主義生命保險を標榜して第一生命保險相互會社が生れた。之れが日本に出來た相互會社の開祖である。超へて二年の明治三十七年に第二番目の相互會社たる千代田生命が生れた。此の二つが又實に目覺しい發育を遂げ、現今前に言つた株式の三大會社と相並んで生命保險界の五大會社と謳はれて居る。

以上は我國の民業會社のみに就て述べたが、外國生命保險會社の活動も全然無視する

わけに行かない。明治廿五六年頃から三井物産などを代理店として段々と侵入し始め、我國の會社がまだ基礎の薄弱と信用の不十分であつたのに乘じ漸次其地歩を固め、斬新奇拔の保險種類と、有利な條件で相當の成績を收めてゐたが、明治三十三年末の勅令に依つて、之れ等の外國會社は多額の供託金を納入せねばならなくなつたのと、我が國の會社が漸く發展して來たのとで、今では一部の富豪、紳商などの間に餘喘を保つといふ姿。或る保險通が、生命保險計りは完全に國產品で滿足出來ると言つたのもナカナカに味がある。僕も全然同意だ。

以上の如く濫立會社の整理が付き、外國の會社が屏息した後は、實に日本の生命保險の興隆時代とも言ふべく、日露戰後、世界大戰後に於ける財界の好況と國民所得の激增、關東大震災の與へた保險思想の覺醒等で、目醒しい發展增大を示した。日露戰後の契約高二億三千萬圓は、大正二年末に約十億となり、同七年末には二十億、同十二年四十億、昭和八年百億を突破し昭和十三年末には徵兵保險を加へて三十三社契約高實に百九十六



億に達した。

× × ×

簡易生命保險は民業壓迫の聲を排して大正五年十月一日から政府に於て開始せられ、當時は保險金額最高二百五十圓であつたものが、其後の改正で三百五十圓となり、更に四百五十圓となり昨昭和十三年十月遂に七百圓迄上されることになつた。此の保險の普及發達の目覺しかつたことは、實に一般の驚異であつた。卽ち創立十年を經過した昭和元年末には、件數約一千萬件、保險金額十三億八千六百五十萬圓餘に達し、更に昨年末の統計では件數三一、八〇四、三一一件、保險金額五十一億四千〇十五萬八千百四十七圓に上つた。此の保險が如何に國民最下層の福利に貢獻したかは諸君の想像以上であり、又此の階級の人々が如何に深刻に保險を要望して居つたかも吾人の豫想以外であつた。

簡易保險は無診査である爲に死亡率も頗る高く、又小口保險で其上集金の手數を要す

る爲に經費も多額にかゝり、隨つて相當割高な掛金をせねばならぬに拘らず、此の通り猛烈な需要がある。諸君は意志さへあらばこれよりもヅッと割安の卸賣りに當る保險を、千圓(民營保險には千圓以下の契約をなさざる會社もあり、强いて千圓以下を歡迎する會社を拾はゞ會社選擇を誤る惧れなしとせず、充分なる注意を要す)以上隨意に買ふことが出來るのに、知識生活程度共に諸君よりヅッット低い筈の簡易保險契約者に笑はるゝ樣な油斷をしては居ないか?……と反省して見る必要があるだらふ。

## 第十九章　保險料は斯くして計算する

保險料の計算法など諸君は御承知なくとも差支へない。多くの會社が少しでも安く安くと競爭的に引下げるから、決して不當の保險料は取り得ない筈。又確實といふことを主眼とする會社では、多少割高に見へても其會社の營業費と死亡率が少くさへあらば、相互會社は勿論のこと、株式會社でも相互的經營の會社なら過拂の金は配當として大部分返つて來る筈で、要するに保險料の高低は優良の會社ならば會社へ御任せ申しても殆んど不都合はないと安心せられてよい。

たゞ併し乍ら眞に保險を理解する上からは、保險料算出の知識も一通りは持つてほしい。依つて以下極めて大要を述べることゝする。前の平均壽命表を一見せらるれば解る

様に、老年になるに隨つて死亡率は段々増して來る。保險料も此の危險の負擔に堪へ得る爲には、年一年と其額を増加せねばならぬ。之れを自然保險料といふのであるが、年を取るに從つて漸次多くの保險料を拂ふことは、一般の人に取つては困難のことであり又會社に於ても毎年異つた保險料を取り立つることは取扱上不便であるから、凡ての會社は自然保險料を平均したもの、即ち平準保險料を採用して居る。此の平準保險料ならば、如何に年を取つても、契約當時に定めた保險料と同一額を毎年拂へばよいのである。

然らば保險料はどうして割出すかといふに、今二十年滿期三十歳の人の保險料算出の例を述ぶれば——

茲に三十歳の人が一萬人あると假定する。此の一萬人の人が年々幾人死亡するかは統計に基いて作製した死亡表に依つて分つて居る。ソコで此の年々死亡する人及び二十年後の生殘者に對して一千圓宛の保險金を支拂ふとすれば、結局合計一千萬圓になる。それでは此の一萬人の人が只今どれ丈けの金を出して置いたならば、利息（豫定利率といふ）が加はつて一千萬圓の金を凡ての人へ拂ふことが出來るか、言葉を換へて云へば年支拂ふところの保險金總額の現價（現在利子を引去つた價額の意）は何程になるか。之れを算出したものが二十年滿期三十歳の人一萬人の一時拂保險料の合計である。此の一時拂保險料から年拂保險料を算出するものである。

一萬人の人は二十年の間には年々幾人か死亡するに依つて、此の死んだ人を年々除外し、年々の生殘者の各員から毎年何程の一定額を取立てたならば、一萬人の人から一時拂保險料を取立てたのと同じになるか、換言すれば一萬人の人の一時拂保險料を、生殘者が濟し崩しに年々支拂ふことにしたならば、何程づゝでよいかと計算したものが年拂保險料である。他の計算の言葉を借りて云へば、前記一時拂保險料は有限生命年金（二十年）の現價で年拂保險料は年金に相當するのである。

斯樣にして算出した保險料は、保險金を支拂ふに厘毛の過不足のないものであるから、之れを純保險料といふのである。然るに會社が營業をなすには營業費が要る。そこで我

國の會社では大抵純保險料の二割乃至四割を純保險料に加算する。之れを附加保險料といふて居る。卽ち純保險料と附加保險料の合計が營業保險料といふて各社の保險料表に載つて居るものである。（卷末保險料表參照）

# 第二十章　株式會社と相互會社

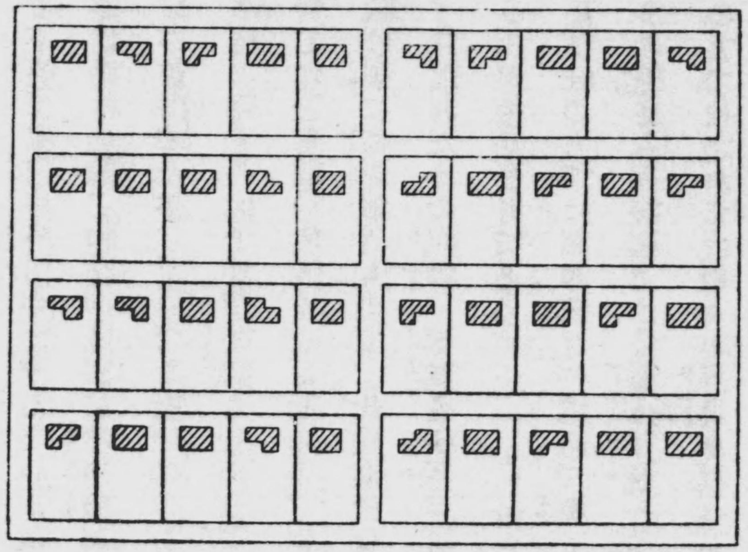
生命保險會社に、株式と相互の二種類がある。株式會社とは株主が資本を出して生命の保險を營業するもの。相互會社とは會員組織で相互扶助を行ふ共濟會ともいふべきものだ。併しソレ程建て前が違つて居り乍ら、保險其物が元來多數集つて相互扶助を行ふ共濟機關であるから、一見した處では殆んど同一の仕事をして居る樣に見へる。

殊に相互會社が會社營業上の利益を會員に分配するから、株式會社も負けては居られず、株主の利益を後廻しにして同じく剩餘金を契約者に分配する樣になつたから、名は株式會社でも相互會社の長所を取り入れて居る。隨つて株式會社といふも、相互會社といふも結局同じことだといふ觀がある。ソコで僕は諸君の理解を助くる爲に左の如き譬

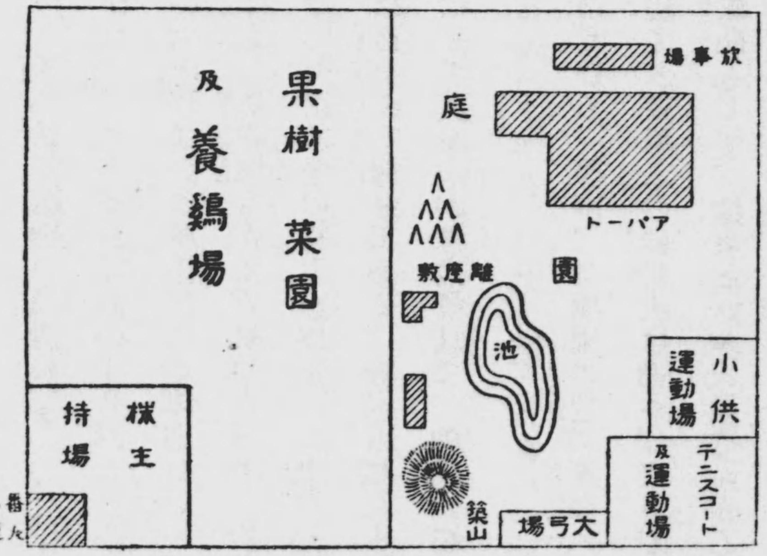
喩を以て圖解を試みることにした。此の圖は一面保險といふものゝ成立を說明するにも妙だと思ふ。

今圖の甲に於ては都市隣接の一地區一萬二千坪の中へ四十戶の家を建て、一戶當り約二百五六十坪の地を占めて、其中に家屋、庭園、子供運動場、物干場、果樹園、菜園を作つたと假定する。約三百坪の屋敷は決して狹いとは云へないが、併し子供が「ボール」を投げれば直ぐ隣りの牆內に落ちる。干物をするには隣りの庭木が影をする。何れの家にも運動場はあるが、帶に短かし、襷に長しで「テニス」など思ひもよらぬ。

ソコで次ぎの一萬二千坪へ又四十戶を建てる時には、智慧のある人が說き廻つて乙圖の如く、三階造りの一大アパート式に四十戶を集め、住居は一二階で和洋折衷の文化生活に適する樣にし、三階は專ら倶樂部、講堂、圖書室、客室等々に充てることにした。炊事丈けは各戶で行ふことも出來るが、御飯は蒸氣炊爨で各戶に分配し、冬は其蒸氣で各戶にスチームが通る。御客は倶樂部へ案內すれば先方も大喜び、女中が省けて其上に



甲圖




乙圖

留守番不要で家内中外出が出來るといふ便利重寶、更に建物の周圍に「テニスコート」や子供運動場は勿論、和洋の庭園に離座敷迄作つて、さながら私設の小公園といふ廣々としたものが出來たが、ソレでも敷地の半分の六千坪で之れ等全部の始末が付いた。

サテ此の殘りの六千坪で養鷄も營めば菜園も、果樹園も作る。喰つた殘りの野菜、果物の賣上げと養鷄の收入を合はせると、倶樂部や炊事場の費用を支拂ふて未だ餘る。

保險は正に斯の如きもので、此處迄は保險通有の有難味である。株式も相互も變りはない。只之れだけの組織、運轉を大屋さんにして貰ふのが株式會社で、御互の協議づくで遣るのが相互會社である。

相互會社の方では萬事御互の協議で捌くのだから、菜園、果樹園の端に養鷄人夫や野菜作りの爺さんが寢起きする番人小舍一つ建てゝ使用人の給料丈け拂へばよいが、株式會社の方では之れだけ數々の恩典を與へる報酬として、株主といふ大屋さんが乙圖株主持場の一角だけ果樹、菜園の收入を所得にするのだ。

之れで株式會社と相互會社の區別に對する概念丈けは略ぼ得られたことゝ思ふが、此の例へ丈けでは相互計りがよい樣に早合點せらるゝから、株式會社に有利な辯護を二三付け加へる。

私は株式會社の契約者を借家住居、相互會社の契約者(社員と稱す)は自分の持ち家に居るものに例へたが、或る人は反對に株式の契約者は旅館棲居、相互會社の契約者は自炊生活に例へて居る。如何にも此の例への方が自尊心を傷けなくて妙かも知れぬ。

相互會社の社員(契約者)は社員總代を選擧し、之れに權利を持たせて更に會社の理事者を選任させる。萬一會社に損が出來たら社員が自分達で始末を付けねばならぬ。自治の誇りはあるかも知れぬが、思ひ樣では自炊式の厄介とも言へる。

之れに反し株式會社では、契約者は保險を會社に受負はせたのだから、請負人の家政に迄立入る必要はないと腹を定め、萬一會社に損が出來たら、平生儲けた代りだ、勝手になさいと株金で始末を付けさせる。之れ程安心なことはないといふ理窟も通る。如何

にも之れならば三井旅館、三菱屋事明治旅館、住友旅館、帝國ホテル、日本ホテルの上等客氣取りで威張つて居られる。其考へにも格別の無理はない。

之れで雙方五分五分となるか、元來生命保險は相互會社が其本質であり、事實先づ相互組織で發達し然る後に保險請負業たる株式が此の發達を繼承して起り、忽ちに相互會社を拔かんとする迄に進歩し、勢に乘じて漸く利益を壟斷せんとする形勢になると再び相互會社の非營利的營業に牽制せられて反省を餘儀なくせられ、大いに相互會社の長所を取入れねばならぬことになる。或ひは全然相互會社に變つてしまうのもある。此の現象を株式の相互化といひ、世界の大勢となつて居る。

只日本に於ては先づ株式會社が起り、約二十年も後れて相互會社が出來、ソレが忽ち長足の進歩をなして保險界をリードするといふ成り行き、一寸歐米の逆に見へるけれどソレは單に株式の方が先きに、相互組織が後に輸入せられた迄で歐米と同じく持ちつ持たれつ、又適度に競爭して磨きあひ磨きあひ進歩發達するといふのが眞相である。



ソコで諸君が、若し株式會社と相互會社の優劣を定めやうと思へば、株式會社中の最良のものと、相互會社中の最良のものとを比較對照して、ドチラがよいかを判斷することを忘れてはならぬ。現に株式會社の方でも可なり自分持ちの果樹、菜園を狹くして借家人の便宜を計る感心な營業振りをして、御客さんを喜ばせてるのが數々あり。又相互會社の番人小屋にも立ち後れでイッ迄も配當らしい配當も出來ず「アパート」の連中に氣を揉ませるのがある。

立ち後れといへば保險會社の立ち後れが、如何に恢復し難いかは外國でもサウらしいが、日本でも不思議な樣に創立順に株式の三大會社、明治、帝國、日本、相互の二大會社、第一、千代田が依然としてトップを切つて居る。併し株式會社の立ち後れにはまだ後に立つ金權の力で三井、住友、安田の樣に社名丈けで契約高の大小など超越してるかの感じを與へるのもあるが、反對に相互會社の立ち後れた方は、一歩先きに發達した優秀な相互會社が相互といふ同じ武器を持つてる點で、一層殘酷な競爭者になり、容易に頭

が上らない。株式會社の樣に經營者が三井、住友に變つて三流會社が急に一流扱ひを受けるといふ突飛な夢も見られず、競爭は年々劇しく四面楚歌で兄弟に迄イヂめられてはたまらない。相互會社の悲哀は何といつても立ち後れである。此の本の讀者は相互でさへあればよいといふ樣な初心な選擇はなさるまいが一言注意して置く。

注意するなら一層重要のことが株式會社の方にもある。株式會社の最大不安は野心家に會社を乘取られることである。前の章の歷史と沿革で述べた樣に、一九〇五年の「イクキテーブル」騷動、明治三十八年の大阪生命事件の如き、又最近では八千代生命の亂脈の如き、株の移動で野心家が大株主になると、永年かゝりて折角積んだ責任準備金がスツカリ喰ひ荒されて、會社を危地に陷れることがある。

ソコになると三井、住友、安田の樣なズバ拔けた大富豪の經營に係る會社は、野心家の窺ふ隙がない。第一浮動株がないからイクラ亂暴者でも齒が立たず、又萬に一つ之れ等の生命保險に彼れ是の噂が立てば、天下の三井、住友、安田の御顏にかゝるから力瘤の入れ方も違ふ。私は此の點で富豪が堂々と名乘りを擧げて生命保險を經營することは、無形の信用を有形に使用する頗る賢明な仕打ちと思ふ。

更に又株式會社でも超弩級の大會社になると、大きいといふことが自然の防禦陣となり、被保險者の眼が銃眼となり、ナカナカに野心家などの乘ずる隙のないもので、ビクビクする必要は更にないが、但し心得として株式會社の短所は株式の移動に依る野心家の横領にあること丈けは、シカと覺へて置かねばならぬ。

最後に生命保險の株式はバカに高いもので、例へば日本生命が二十五圓拂込二割三分配當で一五五圓。明治が百圓拂込二割二分配當で七〇〇圓。帝國が五十圓拂込四割八分配當(內、二割五分は特別配當)で三三八圓。(昭和一四、三、二四時價一四、四、一、ダイヤモンド誌)といふ法外な値段、ソコで屢々株主の暴利が云々せられるが、之れも考へ方に依る。生命保險の株價には將來の樂みやら、莫大な資產の支配權迄織込まれてある譯だから、之れ丈けの株價が相互なら全部頒けて取られる筈だといふのは酷だ。

又前の例に引いた株主の利益になる株主持ち場の果樹、菜園にした處で、契約高が漸膨脹すると、同一設備の「アパート」が段々隣接の地面へ殖えて第二、第三、第四が出來るやうなもので、其結果最初の一萬二千坪から五萬坪の大屋さんになつても依然株主持ち場は初め第一「アパート」の分に作つた丈けで辛抱して居るといふ現狀だから、比例の上では株主持ち場が段々三分ノ一、四分ノ一と狹くなつて行く道理（株式會社の拂込增資は會社自身が遠慮する上に監督官廳が深刻な干渉をする。例へば普通の會社ならば株主總會にも詢らないでよい未拂込株金の徵集でも、並大抵の理由では商工省がウンと言はない、被保險者としては之も心强いことの一つだ）で、格別慨氣するにも當るまい。

只斯く迄に株式會社を自制させる力は、監督官廳の力よりも常に競爭の位置に立つ相互會社の無意識の指導牽制と見ねばなるまい。株式、相互、兩會社組織の相違はざつと以上の如きものである。

ソレなら結局君は株式と相互とドチラへ味方するかとの問に答は簡單だ、株式、相互は長短五分五分、只諸君は最良の株式會社、最良の相互會社を擇べばよい。否更に切り詰めて言へば最良の生命保險會社を擇べばよいのだ。之れ以上を答へれば却て諸君を迷はせる。

# 第二十一章　生命保險會社の良否は何を標準として定むべきか

諸君にして若し生命保險に加入すると決心が付いたとしたら、一等大切なことは會社の選擇である。海上保險は航海毎に、火災保險は一年間で契約を結び更へることが出來るから、會社の良否は第二段として條件の有利なこと、就中保險料の安價なことを主眼とする樣だが、生命保險の方は假りにも十年、十五年、永きは三十年も五十年も先き迄契約が續くのだから、若し會社の選擇を誤つたら、泣くにも泣かれぬ悲慘な羽目に陷る。私は前に保險程安心して信賴の出來るものはないと言つたが、それは最良の保險會社と契約した時の話だ。

十年も二十年も經つて、自分も昔の元氣はなく、之から保險に賴らうと思ふ時に會社がぐら付く樣なことでもあらば、それこそ「賴む木蔭に雨が漏る」といふもの。どうか呉々も最初の選擇を誤らぬ樣、甘言に乘せられぬ樣、愼重の上にも愼重でなければならぬ。

それなら何を標準にして會社の良否を鑑定するか、目の付け處丈けを申上げて置く。併し次の條々が直ぐ御判りになる樣な記事のある材料(保險に關する新聞雜誌の如き)は一寸諸君の手近で見付からないかも知れないが、大切なことだから、せめて基礎知識としての目錄丈けでも左に連ねて置く。但し讀み辛くて辛氣臭いと思召す方々は七、と十七、丈けを讀んで置かれてもよい。

一、會社の幹部

會社の中樞になる人物の人格、識見、手腕、何れが一つ缺げても寂しい。或る人は會社所在地の契約が多いのは會社主腦部の人に一般の信用がある證據だといふ。それは

よい着眼であらう。併しいくら豪い人でも人間には壽命がある。先きの先きを考へれば會社主腦部に在る人の信用丈けでは安心出來ない。只家風と言つた樣な會社の經營振りは中心人物の歿後も稍々永く後々迄續くと見てよいだらう。

二、資本金

之れの多少は餘り標準にはならない。時には之れが爲に利益を餘分に食はるゝ材料になる。寧ろ責任準備金や、其他の準備金積立金が充分にあれば其方が眞のたよりになる筈だ。

三、加入者の顏觸れ

之れも參考になる、信用すべき人、賢明なる人々の多く這入つて居る會社は信用するに足るといつてよいだらうが、良い顏がちらほら見える位で直ぐに信用し過ぎては相成らぬ。又小額契約を嫌はない會社と成るべく高額契約を集める方針の會社との相違はあるが、統計的に一萬圓以上の契約の多い會社は、經濟的に思慮ある階級に信用が厚いと見ることも出來る。

四、會社の新古

古い方がよいと思ふ。併し三十年前後も經つた會社になると最早新古で信用の順位を定めることは無意味だ。

五、契約高

多い方がよい。殊に創立以來頓挫なく年を逐ふてメキメキと成長して居るなんかは頼母しい。それに反し進歩の止つてるか又は甚だしく遲々たる分は大いに注意を要する。

生命保險を語る者は皆五大會社と呼びならはして居るが、契約高の多い順から數へると、日本、第一、千代田、明治、帝國(昭和十三年末現在)となつて居る。此の標準は素人に解りよいのも一つの長所だ。只一つ八億と十億と比べて直ぐに十億が良いと早や合點すべきものではない。否八億と十億と二十億の三つを比べても、會社の業績さへ氣に入つたら、會社の大小は最早問題にならないと言つてよい。

六、契約の條件

競爭の結果か、一流會社の契約條件は近來著しく改良せられたから、何れの會社に入るも、今から十年前の樣な不安はないけれど、只次項の利益配當を始めとし利害損得が今後幾十年も續くから、入念の比較研究を要することは勿論だ。

七、利益配當

利益分配の仕方は大別左の三種となる。

(1) 毎年配當するもの

(2) 毎何年目かに配當するもの

(3) 契約の終期まで貯め置き終期に達した人に丈け配當するもの

以上三種の中で(1)毎年配當するものが、私は一等好きだ。殊に之れは保險の短所と見らるゝ「多年後の貨幣價値下落」に對し最も有效な救濟になる筈だ。(2)、(3)は會社にはたしかに有利だが、契約者には不利らしい。



それから配當の標準は、拂込んだ保險料の總額を標準とする累加式が最も有利と思ふ。但し累加配當は會社が古くて契約の總額が多くなると、段々高率の配當が苦しくなるものだ。此の點に於て基礎が鞏固で、一般から今後急速の發展增大を見越さるゝ會社は、此の後幾年かの間樂々と高率配當が出來る筈だ。

八、利益配當の豫告

單に利益があつたら配當するといつても解りが惡いから、各社共に豫想の表などを作つて見せるのがあるが、之れは約束と思つてはならぬ。今では豫想表で勸誘することは其筋から止められて居るが、何れにしても當てにならないものと思つて居なければならぬ。將來のことを聞くよりも從來の配當を調べるがよい。配當は何時から始めたか、現今の配當は何年以來續けて居るか、それに會社の現在の營業振りは如何。此の三つを調べたらこちらで凡その見込が付くものだ。

確定配當附保險といふのがあるが、其配當に當る丈けの金を豫め保險料と一緒に取

つて置いて、之れが配當ですと返してもらうのではないかと、意地惡く考へて見ねばならぬ。若し普通の保險より保險料が割高であつたら、さう思つて略ぼ間違ひない。之れと同樣に利益配當が多いといつても、始めから保險料を高く取られて居るのでは、何も有難くはない。第八章の第一、第二、第三から生れて來る分の配當でなくては無意味である。

九、保險料の高低

他の條件が同一なら、保險料の低い會社に這入る方が利益である筈だ。併し保險料が餘り低い會社は、前の第八章に說いた豫定利率が高過ぎたり、豫定死亡率が低過ぎたりして、會社の基礎がぐらつくことがあるから、假令現在相當の利益は出して居ても內容の研究を要する。

特に相互會社の契約者なら、保險料の高低など餘り重く見なくてもよい筈だ。會社の營業振りが堅實でさへあれば、どうせ餘つた金は返して呉れるし、苟くも會社の手に入つた程の金は、最善の方法を以て利殖されつゝあるから、過拂ひの金は必ず他日自分の手へ利子が付いて返つて來る筈だ。但し明日死んだら返らないが、それは問題ではない。さんざん他樣へ御迷惑をかけて保險金といふ大きな御馳走を頂いて、折箱の空いたのまで持つて歸らなくともよい。又株式會社でも實際に相互的經營をして居るならば、此の理窟は相互と同樣に通る。

十、營業費

毎年會社で使ふ營業費は少い方が概して善い會社と言へる。而して經費の多少を見るのは經費の總額を保險契約高で割つて見ると、千圓の契約につき幾何の經費を使つて居るかゞ判る。又收入保險料に割當てゝ見る方法もあるが、此の場合には其會社の平均保險料を考へて見ねばならぬ。平均保險料の高い會社で二割といへば、低い會社の二割五分以上に當ることもある。兎に角營業費の多少は會社の良否を判斷する有力な材料である。

十一、利益の多少

毎年利益の多い會社は先づよい會社と言つてよい。勿論事業の大きさと按分比例してのことだ。又各社共まことに美事な損益計算表を發表するのが普通だから、全く獨立の立場にある專門の保險雜誌どもが、一旦之れをばらばらに捌いて、更に組立てた比較表でも見なければ、一寸素人に解り兼ねる。

十二、財産

財産の高の多少に拘泥してはならぬ。會社の責任が多くて所謂責任準備金や、支拂備金の樣なのが多いのは、丁度借金が多い樣なものである。故に總財産の內責任ある金額と、責任を負はざる金額とを區別して見て、比較上餘裕の多い會社が確實である。併し計算上では同じ程餘裕があつても財産の種類にもよるし、又總ての財産を時價一杯に計算してあるのと、大いに低く評價してあるのは大違ひである。又財産がある一二の株券とか一二の銀行とかに偏して居るのは、種々の點から注意を要するし、財産の種類中其眞價を評價し難いものゝ多いのも大いに判定に苦しむ。こんな時に玄人は會社の評價に頓着なく自分で値踏みをして勘定して見ることもある。

十三、責任準備金

專門家でない人が生命保險を鑑定する時に一番困るのは此の責任準備金である。責任準備金を一口に說明すれば、從來收入した保險料の內、保險金受取人又は保險契約者に拂ふために會社に殘して置くべき責任ある金である。法律上からは性質が違ふけれども、計算上から云へば銀行の預金見た樣なもので、千萬圓の預金があつても財産が千萬圓しかなければ餘りよい銀行ではない。之れに反して五百萬圓の預金で八百萬圓の財産があれば、三百萬圓の餘裕ある銀行である。だから責任準備金の多いのは餘り自慢にはならぬ。

殊に責任準備金の計算上にも、學理上許された方法が數種あつて、日本で行はれて居るのを大別すると純保險料式と、チルメル式との二つがある。此のチルメル式の方

で計算すれば純保險料式で計算するよりも、保險金一千圓に付最初は二十圓位少く積んで、年と共に漸々純保險料式と一致する樣にするのである。だから假りに十億圓の契約を持つて居る會社がチルメル式計算をすれば、純保險料式で計算するよりも千四五百萬圓少くて濟む樣な事になる。

會社の責任準備金が十分なりや否やは玄人でも外部からは一寸判らないさうだ。それは各個の契約に就て、其保險の種類、金額、經過年數を調査して之れを統計せねば分らぬからだ。丁度銀行が、此の銀行には幾許の預金があつて、之れに對し之々の財産があると云つても果して其預金額に虚言はないかといふことは、各預金者の勘定を計算して之れを總計して見ねば分らぬと同じことである。

唯茲に便利なことは責任準備金の計算のことは、商工省が監督して居て、何時檢査するかも知れないから、兼ねて許可されて居る其社の計算方法によつて出る數と、廣告した數と甚だしい相違はないと信じてもよからう。又何れの會社が純保險料式で、何れの會社がチルメル式かといふことは判らぬが、純保險料式の會社は比較的少く、隨つて堂々と報告書に我社は純保險料式で計算して居ると記載して居るから、何んとも書いてない會社はチルメル式だと思つて間違ひあるまい。

十四、報告書

生命保險會社の報告書には、これこれの統計を載せ、收支はかくかくの科目に分ち、財産はかようかように分類して記載すべしといふ省令がある。然るに總會へ提出し、又は商工省へ差出す分だけ成規通りのものを作つて置いて、世間の請求に應じて配布する分には總てを省略して、外部からは會社の眞相が判らぬ樣なものを印刷して居る會社がある。こんな會社は玄人でも法律に依り相當の代價を拂ひ、總會に出した報告書の謄本又は抄本を請求して研究せねば眞相は分らぬものである。

十五、體格の選拔と死亡率

あの會社は體格選拔が嚴重だから申込まぬといふ人があるが、體格選拔が嚴重でない

會社は危險である。嚴重な會社の選拔をパスしたら一層愉快なわけだ。

會社の報告書を見ても、注意して死亡の少い會社を選擇せねばならぬ。但し體格檢査をして契約した五年間は、著しく死亡の少いもの故、會社の新古を斟酌すること丈けは忘れてならぬ。特に新しい會社で古い會社以上に死亡の多いのは用心せねばならぬ。

十六、解約

解約は會社の利益だと思ふ人が多い。然らば毎年契約の大部分が解約になつて、毎年それ丈け新募集をする會社は幸福であらうか。終には病人計りの契約が殘ることになるから、決して幸福ではない。解約は少い程利益であるし、又二つの會社に入つて居る契約者が、一方を止めねばならぬ時に殘す方は、必ず其社に滿足して居る證據であるから、解約者の少いのは會社の好評を意味して居る。

日本程解約の多い國はない。比率の上では年々減少して行きつゝあるとはいふものの、ソレでまだ昨十三年度の如き凡四十億の新契約に對し解約消滅が約十二億圓といふ狀況である、併し其多くは掛金に困つて止めるのではなく、最初奬めらるゝまゝに無選擇で或る會社に入り、漸く保險思想が醒めて來ればマズかつたと心付く。再び優良の會社に這入り換へる。といつた樣なのが餘程多いとの事。解約の損は前の章にも言つた通りでお話しにならない。最初加入の時念の上にも念を入れて、會社の選擇を嚴重にせねばならぬ。筆の序に特に御注意申上げて置く。

十七、支拂の苦情

保險金支拂に就て訴訟が起るのを見て、一概に其の會社が惡いとはいへぬ。保險思想の普及と共に、隨分惡辣な詐僞的申込者も多くなる。けれども餘りに苦情の多い會社へ這入るのは考へものだ。多くの保險會社の中には特に支拂ひの苦情が多いといふ惡評が立つて迷惑してるのがあるが、假令噂だと思つてもそんな會社は氣持ちが惡い。自分の死後賴る方ない妻子が、唯一の賴りにして居た保險會社から苦情を持ち出され、訴訟になつたとしたらどうだ。考へても慄つとする。

之れに反し現在詐僞に引掛つたと承知し乍ら、換言せば訴訟さへしたなら斷然支拂ひの義務を免れる證據を持ち乍ら、成るべく苦情を言ひたくない許りに、文句なしに保險金を支拂つて居る會社もある。

私が右の如き推察をするのは、次の様な實際の經驗からである。たしか昭和三年の春であつたと思ふ。私の住む町の一鑄物工が肺結核で死亡した。此の男は一年前に或る大會社へ一千圓の契約をしたが、其時は既に私の醫院で肺結核第一期の治療を開始した後で、其治療報告書が當時新設された健康保險署へ立派に證據として殘つて居た。それにも拘らず會社は右の事情を承知の上で、綺麗に保險金の全額を支拂つた。遺族の嬉し泣きに私迄貰ひ泣きしたことがある。

若し善良なる被保人は毫も訴訟など恐れぬから、不安は暗い側の一小部分に止まるといふ人あらば、それは全く被保險者心理を解せない愚論である。不況時代に最も强く失業を苦にするは、寧ろ會社で最後の一人になる迄居殘つてもらひ度い部類の人々



で、又痩せる程入學試驗を心配する學生は、事實二つも三つもの學校を一度にパスして、何れへ這入らんかと迷ふ側の秀才である。自分に暗い處はなくとも、萬一契約半年以内に死んだなら、外傷と傳染病でない限り、どんな縺れが付かぬとも限らないと、氣遣へば氣遣へるものだ。契約者に取つては矢張り死後の訴訟沙汰は恐ろしい。

# 第二十二章　何れの會社を擇ばんか

前の章で會社選擇の標準を說いて、此の章では結論たる愈々何れの會社を擇ばんかの問題にぶつかつた譯になる。さて此の章を書かんとするに當り、僕は多少の躊躇なき能はずである。約三十年も前から保險に加入し始め、二十年前からは生命保險に關する著述さへ思ひ立ち、今現に此の一冊を諸君の前に提供した僕が、日本にある僅か三十內外の生命保險會社の中で、どの會社が最も有利確實であるか位判らない筈はない。只一つ困るのは、此處で會社は之れが最良だと言はゞ、其會社丈けは惡い氣持ちもしないだらうが、其他の會社からは、いらざるオセツカヒの物識り顏と恨まるゝかも知れぬ。それよりもまだイヤなことが一つある。一部の讀者諸君から、アー大へん面白いと思つてこゝまで讀んだが、ヤツパリ會社の提灯持ちかと爪彈きさるゝだらう。そう考へると手も足も出なくなる。

わかつては居れど、言はうか言ふまいか
紅葉のやうなお手で、目かくし

前の頃新聞の廣告によくこんなのがあつた。△△座△月狂言、俳優△△△△△談……大喜利壇浦兜軍記の一幕は有名な阿古屋琴責めの場で、秩父の庄司重忠(△△△)が、五條の遊君阿古屋(△△)を召出して、惡七兵衞景淸の行方を三曲を以て責め問ふの場。△△の阿古屋は、琴、胡弓、三味線を各其師に就て多年鍛錬したもので、一技たりとも堂奧に入らざるはなしといふ凝り方。尙ほ△△△の重忠はサスガに此の優のもので、御ヒーキ方呼物の一つ。時候が段々冷へますので五體の冷へが元となり、輕からぬ感冒を召されまする。之れには平素より××人參錠を持藥に遊ばすと藥效を以て五體を溫め、自然風邪の入り樣がない譯となります。……少々話しがコンガラがつて來た。重忠が冷え

て感冒を召されるのか、又は阿古屋に人參を服ませろといふのか、血の廻りの悪い男には受取り兼ねる。ヨク氣分を落ち付けて讀んで見ればナーンだ、新聞の讀者に人參錠を召上れといふ極く親切な廣告。僕は今二十年も前から考へに考へて、相當心血を注いだ此の小著を、重忠が感冒をヒクのか、阿古屋が人參を服むのか判然しない樣なものにはしたくない。現在輕き煩悶を感ずるのは之れが爲だ。

然らば前の章で打ち切つて、之れ以上僕は公平無私で沈默を守る。諸君は此の標準を以て自由に選擇せられよ。と書き放したら僕の心事を疑はるゝ心配は全くない。只恐れるのはソンなことをしたならば、僕自ら屑くするに急にして、讀者に對する親切に缺くる處がありはしないか。現に僕にコンな失敗がある。父の死んだ時妹夫婦と二三日起居を共にしたから、例によつて保險を奬め、充分に納得して歸した處直ぐに妹から手紙が來た。御奬めに依り主人が生命保險に這入りました。金額は△千圓、會社は△△△△…

…僕は覺へず膝を打つた。此の會社は信用と營業の成績に申分ないが、契約の條件がサ



ラリーに適せない。只會社が良いからといふので遂に泣き寢入りとなり、其のまゝ十幾年を經過して今日に及んで居る。自分が二日も三日も膝突き合はせて話しをした兄妹でも、不覺に總論丈けに止めて、一寸會社の名を告げることを油斷すれば此の通りだ。矢張り諸君に對する親切から云へば、僕の誤解せらるゝ位は辛抱して、具體的に會社の名を告げた方がよいかも知れぬ。サーどうしやう?。

こんな場合に僕はイツでも故福澤諭吉先生を思ひ出す。先生も外から持つて來られたのか知らないが、屢々「伯夷其心、柳下惠其行」といふ句を用ひて居られる。句の意味は伯夷の樣な潔白の心でさへあらば、柳下惠の通りにサッサと行つて宜しい。誤解なんか心配して居て世の中に何が出來るか、といふ戒めらしい。福澤先生迄擔ぎ出して漸く決心が付いた。今少し話しを具體的にしやう。

話しを具體的にするといつた處で、若し僕が甲乙丙丁の四會社を信用しますと言つたら、殘りの戊巳庚申……の諸會社には消極的不信任を表することになる。ソンな失禮な

ことが出來るものでない。多くの會社には皆夫れ夫れ存在の理由があるだらうから、夫れ夫れ結構だと敬意を拂つて置かねばならぬ。

ソコで話方としては甚だ不完全かも知れないが、僕自身に現在關係のある會社の名を列擧するとしやう。僕は今五大會社の悉くと更に三井、住友兩會社に契約者としての關係がある。契約高の順序は第一、三井、住友、帝國、明治、千代田、日本となつて居るし、加入の年次から言へば帝國、日本、第一、千代田、住友、三井、明治となる。之れは勿論信任の序列を示すものでも何んでもない。凡てを信用すればこそ今日迄契約を續けて居る次第だ。保險金額の大小も概ね僕の其時々の都合と、保險賣る人々との緣の厚薄が關係してゐる。

又僕は永年前からの方針として、僕の被保險關係のない會社の診査醫は一切斷つて居た。ソレは地方で、町醫をして居れば多くの會社から診査を依賴せられるが、萬一其會社が倒れると被保人は斯く言ふ。先生に診てもらつて這入つた會社が倒れました、と。

此の時僕は何んだか、會社と無形の連帶責任を感じて甚だしく惱まされる。ソコで一切被保關係以外の會社に關係せぬことゝした。之れが被保關係のある會社ならば、斯かる場合——無論倒れたことは無いが——俺も一緒に損をしたよで濟まされる。少しも疚ましい處がない。其上に凡ての保險は相互的のものだから、僕の被保關係のある會社の新契約は、セメて僕の周圍二里の地區丈けでも僕が診査して、詐僞に罹らない樣にしたい。之れは間接に僕自身の利益擁護でもある。

只一つ僕の讓步してるのは、今現に被保關係のない會社でも、此の會社には將來自分又は家族の者が加入する積りの會社丈けは、先づ診査醫たることを承諾して置く例になつて居る。換言せば將來加入の候補會社である。斯かる意味に於て僕は、本書第一版當時には明治、三井、住友の三社とは診査醫としての關係であり、現今は契約者としての關係をもつに至つた。若し諸君が僕の關係を緣として以上七社に案內書でも請求せらるゝ際の用意として、御セツカヒの序に各本社の所在地を列記し、此の章を終ることゝする。

| 會社名（創立順） | 所在地 |
|---|---|
| 明治生命保險株式會社 | 東京市麴町區丸ノ內二ノ一六 |
| 帝國生命保險株式會社 | 東京市麴町區丸ノ內一ノ一 |
| 日本生命保險株式會社 | 大阪市東區今橋四 |
| 第一生命保險相互會社 | 東京市麴町區有樂町一 |
| 千代田生命保險相互會社 | 東京市京橋區京橋二 |
| 住友生命保險株式會社 | 大阪市東區北濱五ノ二二 |
| 三井生命保險株式會社 | 東京市日本橋區室町二ノ一 |

# 第二十三章　保險の契約

書きに書いて漸く最後の章となつた。未だ言ひたい事、書きたい事は澤山あるが、言ひ殘しは次の雜篇に讓り、本章で打ち切ることにする。ソレで契約に關する二三の御注意を記すとしやう。

## 一、決心

由來保險に入るべくして入らない人にはコンなのが多い。先づ會社の社員とか地方代理店の人が來訪すれば、此の人等は今商賣柄で保險を賣りに來て居るのだと思ふから、其說く處は凡て割引して聽く。多少心が動いて這入らうかと思ふが、愈々となると恐ろしい氣もする。先方の押しが强いとナーニ落ちるものかといふ淡い反抗心も出る。

之れが加入の延び延びになる原因の様だ。

泳ぎを知らない始めての男女を海水浴へ連れて行くと、容易に海へ這入らないのがある。汗を流し乍ら、冷いだらうと首をチヾめる。浅いよといつても信じない、藥だよといつても笑つてる。此の時先づ自分が飛び込んで、此の通りよい氣持だと（實際にソウ感じて）言ふと恐る恐る續いて這入る。私が嘗て親戚、友人に保險を勸めて見るに、一番最初の質問は定まつて「おまへは」と言ふ。僕か？僕は△十年前から入り始めて段々に增し今△萬△千圓の契約、之れに要する年々の掛金が△△△圓、掛金は大儀だが安心だよと言へば、一寸考へて……私も這入りましよう、實は前からの宿題なんですがね、と笑ひ乍ら會社の人に勸められた話しをする。惟ふに此の人等は少くとも私の馬鹿正直と、自分等が保險へ加入したからとて私に利害關係のないこと丈けはよく知つて居るから、話しが早く、決心も付き易いわけ。私は序文の始めから此の章に至るまで、隨分僕が、私がと御恥かしい迄に自己紹介をしたが、省みて讀者諸君とどの程度迄御友達になり得たか知ら。イヤ小さな僕なんかはドーでもよい。保險の海水浴でイー氣持ちだと言つてる貴下の未知已知の友人が約一千三百萬人（假りに一人一件として）で、其契約高ザット二百億圓、此の人達が本年中に掛ける掛金が概算八億圓。盛んなものでせう。人間といふもの、之れ丈けの澤山な人數を、五十餘年（日本に保險が始まつて以來）の長い年月に亘つて瞞しおはせるものでは毛頭ない。エマーソンが言つたことがある。

一部の時、凡ての人を欺き得べし
凡ての時、一部の人を欺き得べし
凡ての時、凡ての人を欺くべからず

此の保險始まつて五十餘年、一千三百萬人、二百億圓の數字を見た丈けで、貴下は眼をつぶつて保險の海へ飛び込んでも、斷じて後悔はない。

×　×　×

サテ決心がついたら契約だが、其前に約款の條項をよく御調べなさい。年々の掛金にさへ甚だしく重荷を感ずる人と、相續税の用意に保險にでも這入つて置かうといふ人とは、自ら條件の要求が違ふ。甲に適するから乙にも必ずよいとはいへない。其人々の境遇によるから、案内書で合點行かずば會社へ問合はせ、それで充分に合點が行つた處で契約せられるがよい。

二、契約の手續

米國の或る雜誌の寫眞機械の廣告に、「あなたは只押釦をお押し下さい。あとは凡てコチラで致します」といふのがあつたといふが、保險の契約も矢張り其通りだ。諸君が契約の意志を通じ、何れの會社へなりとも葉書で其由を申し入れらるれば、後は會社員が出張して萬事を取扱ふ。之れ程造作のないものはない。

年收千圓の人が五千圓を付けて置くと、十年目に相當する保險金の五千圓は骨折り損の生命價値の理容易な第三者の解約價値は、第四年目に收入の三分の一に下る。第十章を出來た。

三、多くの人の保險契約は概ね少きに過ぐ

僕は醫師として屢々保險金受領の診斷書を書くが、遺族の人達から一樣に聞くのは、コンナことになるとすれば、今少し餘計に這入つて置いて貰へば私共も助かるのでしたが、の嘆聲である。無論人間の慾には際限がないから、保險金を受取るにこれで澤山といふことはあるまいが、只年收千圓の家庭で千圓の保險を受取つたのでは、何んとしても之れで助つたとは云へまい。セメテ年收の五倍から七八倍位迄は付けて置きたいものだ。前の章で書いた千鳥を應用し、或は之で勇氣を付けたら大抵のお宅に此位の可能はあるものだ。ソレでは貯金が少しも出來ないと仰せになるかも知れないが、本書第一章を今一度讀み返して、『貯金は危し先づ保險』の方針を取り、境遇が進んで收入の增すに隨つて徐々に貯金せらるゝがよいと思ふ。保險の掛金は利益又は剩餘金の配當で、年を經ると共に減じて行くのが普通だから、後年にならば一層樂に貯金が出來る譯だ。「生命價値の資本化」の章にも述べたが、左の一表を見て今一度保險額を

年利三分で預けた一定金額の毎月受取喰ひ盡し年月表

| 毎月末受取金額 ／ 現在預ヶ高 ／ 受取後月數 | 五〇圓 | | 七五圓 | | 一〇〇圓 | | 一二五圓 | | 一五〇圓 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 年 | 月 | 年 | 月 | 年 | 月 | 年 | 月 | 年 | 月 |
| 三、〇〇〇円 | 五 | 五 | 三 | 六 | 一五 | 七 | 二 | 一 | 一 | 八 |
| 四、〇〇〇 | 七 | 五 | 四 | 九 | 一四 | 一〇 | 二 | 一〇 | 一 | 八 |
| 五、〇〇〇 | 九 | 七 | 六 | 一 | 一三 | 八 | 二 | 一 | 二 | 七 |
| 六、〇〇〇 | 一一 | 一〇 | 七 | 五 | 一二 | 六 | 二 | 一〇 | 二 | 六 |
| 七、〇〇〇 | 一四 | 四 | 八 | 四 | 一一 | 五 | 二 | 一 | 二 | 五 |
| 八、〇〇〇 | 一七 | 〇 | 九 | 三 | 一〇 | 四 | 二 | 一〇 | 二 | 四 |
| 九、〇〇〇 | 一九 | 一〇 | 一〇 | 二 | 九 | 三 | 二 | 一 | 二 | 三 |
| 一〇、〇〇〇 | 二三 | 一〇 | 一一 | 一〇 | 八 | 二 | 二 | 一〇 | 二 | 二 |
| 一一、〇〇〇 | 二六 | 三 | 一五 | 一七 | 七 | 一 | 二 | 一 | 二 | 一 |
| 一二、〇〇〇 | 三〇 | 四 | 一八 | 一八 | 六 | 一〇 | 二 | 一〇 | 二 | 一〇 |
| 一三、〇〇〇 | 三四 | 八 | 二三 | 二四 | 五 | 一一 | 二 | 一 | 二 | 九 |
| 一四、〇〇〇 | 三九 | 八 | 二〇 | 二五 | 四 | 一二 | 二 | 一〇 | 二 | 八 |
| 一五、〇〇〇 | 四四 | 一 | 二三 | 三〇 | 三 | 一三 | 二 | 一 | 二 | 七 |
| 一六、〇〇〇 | 四九 | 一 | 二五 | 三五 | 二 | 一四 | 二 | 一〇 | 二 | 六 |
| 一七、〇〇〇 | 五四 | 一 | 二八 | 三八 | 一 | 一五 | 二 | 一 | 二 | 五 |
| 一八、〇〇〇 | 五九 | 一 | 二一 | 三九 | 一〇 | 一六 | 二 | 一〇 | 二 | 四 |
| 一九、〇〇〇 | 六四 | 一 | 二四 | 四四 | 九 | 一七 | 二 | 一 | 二 | 三 |
| 二〇、〇〇〇 | 六九 | 一 | 二七 | 四九 | 八 | 一八 | 二 | 一〇 | 二 | 二 |
| 二一、〇〇〇 | 七四 | 一 | 二九 | 五四 | 七 | 一九 | 二 | 一 | 二 | 一 |
| 二二、〇〇〇 | 七九 | 一 | 三〇 | 五九 | 六 | 二〇 | 二 | 一〇 | 二 | 一〇 |
| 二三、〇〇〇 | 八四 | 一 | 三三 | 六四 | 五 | 二一 | 二 | 一 | 二 | 九 |
| 二四、〇〇〇 | 八九 | 一 | 三六 | 六九 | 四 | 二二 | 二 | 一〇 | 二 | 八 |
| 二五、〇〇〇 | 九四 | 一 | 三九 | 七四 | 三 | 二三 | 二 | 一 | 二 | 七 |
| 二六、〇〇〇 | 九九 | 一 | 四二 | 七九 | 二 | 二四 | 二 | 一〇 | 二 | 六 |
| 二七、〇〇〇 | 一〇四 | 一〇 | 四五 | 八四 | 一 | 二五 | 二 | 一 | 二 | 五 |
| 二八、〇〇〇 | 一〇九 | 一 | 四八 | 八九 | 一〇 | 二六 | 二 | 一〇 | 二 | 四 |
| 二九、〇〇〇 | 一一四 | 一 | 五一 | 九四 | 九 | 二七 | 二 | 一 | 二 | 三 |
| 三〇、〇〇〇 | 一一九 | 一 | 五四 | 九九 | 八 | 二八 | 二 | 一〇 | 二 | 二 |

定める參考になさるがよい。

此表は外國雜誌の「ナショナル・アンダーライター」にヒントを得たもので、保險金額

や利率は私の勝手に組み換へたものだ。三千圓から三萬圓迄の保險金額を、年三分に利殖しつゝ費ひ盡すに何年何ケ月かゝるかを見るに頗る便利だ。例へば今長男が十五歳で、幸ひ自宅から大學へ通へる土地に居るから、月額百二十五圓づゝ生活費に兼ねての學費が欲しいといふ人は、「毎月一二五圓宛」の欄を横に見て行き、一〇年〇ケ月の處迄行けば其上が一萬三千圓とある。此一萬三千圓が貴下の最小限度所要保險額、換言せば家族の爲に要する貴下の生命價値とも言へる。其他は御自分の要求する年數と月額に應じて、縱横に答を求めらるれば、大した六ケしい表ではない。但し費ひ盡すに四十年以上もかゝる分は、此表の性質上年數を省略する。

四、保險は今直ぐに加入すべし。

若し保險の必要が充分に御解りになつたら、よい折りがあらばなんて延ばされぬがよい。

菊を見て、菊作らうと思ひけり

毎年秋になつてから近所隣りの菊の美しく咲くのを見て、菊を作ればよかつたと思ふのが人情だ。併し菊は六月の梅雨に挿さねば駄目である。六十歳になつて養老保險があつたらと思つても遲い。又保險は屢々病氣になつて急に這入り度くなるものだ。

僕は醫者であるから殊にコンな例を澤山に知つて居る。多くの保險會社は頗る頻繁に肺結核初期患者の申込みを受けるが、併し病氣になつてからは駄目だ。會社は健康の間にしか契約しない。

僕の識る官吏で、或る會社から勸められて保險を申込み、僕が體格檢査迄したが掛金をする段になつて止めたのがある。其後一年經つか經たぬに重症の肺患に罹り、役所を退いて保養することになつた。喰ふに困る境遇でもなかつたが、此の際千圓の保險があれば、轉地、入院思ひの儘だのに殘念なことをしたと、僕に對しシミジミ後悔話しをしたことがある。

僕が此の小著を書く動機となつた同僚のS某も、僕が勸めた時素直に五千圓加入し

て置いて呉れたら、遺族は今日どれ丈け安樂であつたか知れないものを、只二ヶ月延ばして永久に好機を逸した。

之れと反對に面白い例もある。或る小學校の先生が此の物語りの舊稿を讀んで、加入の決心はついたけれど、今日こそ申込むといふ日が定まらず、ノビノビになつて居た處、突然矢の催促で申込みの手續を聞きに來た。妙に感じて其理由を聞くとコーだ。

此の間から二日程感冒で床に就いたが、爲すこともなく仰臥してる内に君の保險物語を思ひ出し、いま死んだらと考へたらタマラなくなつた。今日床拂ひと同時に卽刻保險を申込むのだと大變な權幕、餘り熱心なので覺へず吹き出したことがある。此の人は數年後に腸チフスで病歿、奥さんから悲しい通知に兼ねて、私の保險をすゝめた親切に對する感謝の手紙をもらつた。

ソレは兎に角實際病氣すれば急に氣が弱くなる。輕い感冒なら未だ差支へないが、少し名の付く病氣なら會社は斷然受け付けない。必ず一年後に改めて御相談します位



の挨拶をする。此の時イクラ後悔しても及ばない。

僕は屢々言ふ、保險は熟考して這入るよりも、先づ這入つて後に熟考すべきだ。ボロ會社の警戒さへ忘れなければ、假令半年分位の保險料を損してもまだ其方が賢い。船は港を出る前に海上保險を付けるが、吾々は生れた時にモー出帆してるのだ。今夜の中に暴風がないと誰も保證するものはない。船は永年の航海に難破を免れて港に老朽するのが寧ろ普通だが、人間の航海は必ず一度難破する運命を持つて居る。船の航海よりも更に保險の必要が多い。

千兩の富籤を誰かゝ取りは取り

といふ瓢輕な川柳もあるが、生命保險のは少し違ふ。「千兩の富籤を何時かは取りは取り」だ。必ず取る時機がある。何時迄も此の富籤を取り得ないのは、何んたる幸福なことだらう。更に此の富籤を取るの曉は、遺る妻子に不幸中の幸ひがある。之程旨く出來た幸福の兩天秤は他に滅多ない筈だ。

英國ヨークシャイヤーの牧師が旅行先から不快で歸り、四五日の患ひで突然死んだ。清貧の人と見へ妻子は忽ち明日のパンに事欠ぐ次第で悲嘆にくれた。フト旅行カバンを開けばコハ如何に、中から五百磅(五千圓)の保險證券が出た。牧師は旅行中何かの動機で保險を付けたのであつた。諸君、若し之れが明日主義で旅行を了へてからに加入を延ばしてあつたら、救ひは遂に妻子の上に來なかつた譯である。

遠い外國の例なんか引かなくとも、日本の生命保險會社の死亡者月報を見ても、毎月此の牧師に似た不幸中の幸運者が只一つの會社丈けでも百名以上もある樣子だ。若し全國各會社の分を合計したら遙に一千名を超へる。即ち昭和十三年度の一年未滿早期死亡保險金支拂の各社總計が一萬四千九百六十六件二千五百十二萬五千二百四千四圓とある。(雜篇に某會社の昭和十三年五月分の死亡者月報を掲げる)之等の契約者こそは實に「善は急げ」の諺に從つた報酬として、遺族に不幸中の幸ひを遺したものだ。決心のついた限り、保險の加入は斷じて遷延すべきでない。



# 雜篇


保險繪ばなし
1. わしの名は
2. 燒豚の由來
某會社の保險金(死亡)支拂月報を見る
雜談
◇保險は先づ家長から
◇恩給
◇月收
◇殘念 其一、其二、其三
◇有難い 其一、其二、其三
◇信託
◇保險料表
◇肉彈の浪費を防ぐ爲に此の本の利用

## 植へは植へたが

植林者（貯金する人）の歎き

金のなる木は世にないけれど
植へりや其木が金になる
と聲高らかに歌ひつゝ今日の仕事が
二百本

植へは植へたが
アー併し
坊木で家が作れるのは
早くも今から二十年
オットまだ〳〵三十年



## 明日までも

森の奥に聲あり
山持ち長者
「君ソンなに歎くより
僕に其苗木を任せたまへ
其代り君が「遺族の爲の安全の家」
を作る必要が起つたら
明日までも坊澤山の大木を
「君の入用なだけ伐つて差上げる
無論三十年後に
養老の家を作る時でも——

## 慈善？奇蹟？

植林者　ソレは貴下の慈善か？奇蹟か？

長　者　慈善でもない、奇蹟でもない、也大木は今から三十年前ゴ君と同様の嘆息で木を植へる人々から、君と同一な條件で私の預つた木だ

植林者　其預けた人々はドーなされたか？

長　者　今日苗木を預けて明日直ぐゴ澤山の木を伐らせる来た人も数々あるが、幸ゴ長命で三十年振りゴ目出度美衣走の家を作つた人、又は作らんと・してある人も尠くない……見たまへ

此何萬町歩の木を何万の人々が必要な丈けづゝ伐つて行くのだ、山の禿げる恐れも木の足らぬ心配も無用、君達が今現ゴソコゴ苗木を植へてくれるからね



## はなのいち

（参照）昭和十三年度　民衆生命保険金支拂高
件数　繰越し重複等あつて　二四八、三〇七件
金額　二四六、七五六、〇三二円

植林者　何といふ不思議な事よ、さてソレは「現實の話」ですか

長　者　現實とも現實ともソレ此通り、昭和十三年度一ヶ年ゴ此山から伐り出した木の價格が、驚く勿れ二億四千六百万円人数がザット二十四万人

植林者　聽けば聽く程驚いた話、さて貴下様の貴名は？

長　者　わしの名か？わしの名は「生命保険」

昔々の大昔、或る所に凡助と鈍太郎の親子が住んで居た。父の凡助が留守中に、餓鬼大將の鈍太郎は悪戯の數々をし盡した揚句、トウ〳〵父が最愛の仔豚を家の中に逐込んで、其の儘火を放け家ぐるみ焼いてしまつた。凡助が歸つて泣く〳〵焼跡を探すと、黒焦げの仔豚が出た。可哀そうにと肩を撫でると皮がツルリめくれて、今焼けた計りの肉で指を焼く。「熱い」と叫ぶハヅミに覺へず其の指を嘗めた。すると之は又生來嘗て味はざるの珍味、餘りの旨さに二度三度繰り返す内、神の掟の火食の禁ものかは、親に見習ふ鈍太郎と二人で、仔豚一匹キレイに喰つてしまつた。其後幾年か豚が仔を生む頃になると、凡助の家は定まつた樣に火事がいつた。後には火事見舞から仔豚の味を覺へて、我家に火を放つ不心得者が次々と殖へる。お終ひには豚が仔を生む頃ともなれば、一部落全焼といふ大騒動が更に幾年か繰り返へされた。其内に或利巧者が一大發見をした。仔豚を焼くには家を焼かないでも、焚火で充分間に合ふといふ一新法を。

——世には「生活安定」といふ仔豚一匹焼く爲に、戀も藝術も、さては義理人情までも皆焼いてしまつて、アタラ青春を、人世を、焼野原の如くうら寂しく暮らす人の如何に多きことよ。かゝる處へ「生活安定」には生命保險といふ焚火で結構だとは、何といふ嬉しい有難い發明だらう。諸君は生命保險こそ吾人に、火難から青春を取り返し、且つ新しき人世を惠むものとは思はないか！。

# 昭和三年 某會社の保險金（死亡）支拂月報を見る

私は此本の讀者から或時意外の感想を耳にした。君の本を讀み終つて、最後に見ても見なくてもよい積りで保險金支拂月報を讀んで行く内に、僕の保險加入の最後的決心が定まつた。僕と同職業（此版には差支があつて殘念乍ら職業を掲げることが出來なかつた）又は同年輩の人の死に注意を惹かれたのと、君も一寸注意してゐた樣だが、契約後一年以内、甚だしいのは一、二ヶ月といふ樣な早期の死亡がザラにあるので、見て行く内に之は「他人ごと」ではないと大なる衝撃を受けた、云々。

ソノ話を案外に思つたので、其後此本の話が出る毎に、死亡者の月報は？……と聞いて見るに、相當注意して見てるのが多い。私の一寸の思ひ付きで掲げた此月報に、コンな魅力があらふとは意外の收獲。百千萬言、遂に事實の雄辯なるに如かず、現實の迫力の大なるに感心した。ソコで此版には大なる犧牲を忍んで十六頁といふ澤山の紙數を割愛することにした。

併し最初はまだ〳〵多くの紙數を費やす積りであつたけれど、考へて見れば讀まれない數字の行列には、ウンと省略の斧を振ふ必要がある。標題通り某社の或る一ヶ月の保險金支拂月報を全部轉載すれば、此行列の約三倍以上となり、書物の中央に讀まない文字の大沙漠が出來る。ソレは堪へ難い倦怠である故に、省いた上にまだ欄外短評のオアシスで補ふて置く。

櫻の木を二三本と霞の線を一二本書いて、吉野山霞の奥は知らねども、見ゆる限りは櫻なりけりで全紙へ櫻を書き埋めた以上の數を感ぜしめ、雁一羽の下へ「初雁や又後からも後からも」の一句を添へて眼前にない雁の飛行分列式を想像させてこそ表現の妙だ。

之は中つのの間のの
會の而一約の
社唯會も一ケ支三で
の一社其月拂分あ
數は
あるる

私も止むなく此大きな數の行列を切りつめて、諸君に「霞の奥」と「又後から」の想像を

御願することにした。只イクラ切りつめても矢張り此通りの大行列、此澤山の行列を見て行く諸君は、恐らく保險の共同墓地を歩む感じがするかも知れない。

墓地といへば私は屢々上野公園散歩の歩みを日暮里の墓地迄延長する。銀ブラとちがひコ、を歩くとシンミリした氣分になる、幾千、萬と林立する墓石を眺める内に、アー人間泣いても笑つてもコ、へ來る迄、といふ無常感を覺へるのは、無意識に數の壓迫を受けるものらしい、最も強く數の壓迫を感ずるのは、一糸亂れぬ整列をした陸軍墓地の參拜で、此澤山の護國の英靈に對し、襟を正さないものは非國民だ、只陸軍墓地を例に取ることは遠慮したいから、同じく忠魂義膽に燃へた泉岳寺の義士の墓へ私が案内するものと假定し、此月報の個々の特徴を申上げる。

君の前がソレ高田の馬場で十八人斬りの豪傑堀部安兵衛武庸……酒の好きな……酒の好きなは同じくソコの赤垣源藏……といつた風に表の欄外へ僕の短評を加へることにした。欄外の短評斗りでなく、今少し案内の手を延ばし、個々の保險金額、契約年數、死亡年齢、死因等に就て、特に注意して頂きたい分は**ゴシック**で字形を變へて置いた。之は作爲を加へたのではなく、香華を手向けたものと思召せ。

案内の序でに同一雜誌に掲げられた、本年一月より六月末に至る前半年間の統計的數字を左に表示する。

| 區別＼月別 | 一月 | 二月 | 三月 | 四月 | 五月 | 六月 | 計 | 此期間總人員ニ對スル百分比 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 保險金千圓以下人員 | 七 | 三 | 四 | 五 | 三 | 二 | 二四 | 0.7% |
| 千圓以上人員 | 二七三 | 二九二 | 二八三 | 二九五 | 二五三 | 三四五 | 一、七四〇 | 五三%. |
| 二千圓以上人員 | 一二三 | 一五六 | 二一一 | 一八二 | 一〇二 | 一七八 | 九五二 | 二九% |
| 五千圓以上人員 | 五〇 | 五九 | 七〇 | 四七 | 四六 | 四九 | 三二一 | 一〇% |
| 一萬圓以上人員 | 三九 | 三一 | 四〇 | 三四 | 二七 | 四四 | 二一五 | 七% |

| | 早期死亡 | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 五萬圓以上人員 | 十萬圓以上人員 | 人員總計 | 一人二口以上ノ保險者人員 | 一年以下人員 | 二年以下人員 | 三年以下人員 | 小計 | | |
| 〇 | 一 | 四九二 | 五五 | 七一 | 七〇 | 五二 | 一九三 | | |
| 〇 | 一 | 五四二 | 六三 | 八三 | 六一 | 五四 | 一九八 | | |
| 四 | 〇 | 六一二 | 七五 | 七一 | 八二 | 七二 | 二二五 | | |
| 一 | 〇 | 五六四 | 六九 | 七四 | 七六 | 五八 | 二〇八 | | |
| 〇 | 二 | 四三三 | 四九 | 五四 | 六六 | 五二 | 一七二 | | |
| 三 | 一 | 六二二 | 七九 | 六五 | 八二 | 六八 | 二一五 | | |
| 八 | 五 | 三、二六五 | 三九〇 | 四一七 | 四三六 | 三五六 | 一、二〇九 | | |
| 0.2% | 0.1% | 一〇〇% | 一二% | 一三% | 一三% | 一一% | 三七% | | |

一、此表で契約後間のない早期死亡は幾口あつても一人一口より計上しない。例へば同一人で三年以内一口、二年以内一口、一年以内一口の死亡者があつても、一年以内一人として計上し、又同一人で一年以内の三口もある死亡者でも、一年以内一人として計上してある。ソレにも拘はらず此早期死亡の多いことはドーだ。總死亡數の三割七分が三年以内の早期死亡となる。無論會社は充分嚴選して健康者斗りと契約した筈だが事實は正に此通り―。自分は健康だから保險の必要はないなどの愚論は此表を一見した丈けでケシ飛んでしまふ。

一、本表の外に此會社の被保人で此一月から六月末迄の半年間に目出度く滿期で保險金支拂を受けたのが四三五件六九三、二〇六圓ある。之は勿論此期間の保險金支拂總額四、五二八件一一、一四三、六二八圓の中に含まれて居るのだが、此會社の滿期は少ない方で、會社が古くなるに連れて滿期支拂の比率は上つて行く。

一、序に御知らせし度い數字がある。ソレは昨昭和十三年度全國民營保險全部の保險金支拂總額二四四、〇一六件二四五、三六六、三五九圓である。但し之は支拂事由發生(徵兵保險を除く)の數字であるけれど、略ぼ支拂の數字と一致するものと見てよい。

大体昨今の保險常識としては、一ヶ年二十萬件、二億圓の保險金が支拂はるゝものと言はれてゐるが、本年末あたりには三十萬件三億圓に近くなるだらふ。驚くべき尨大の數だ。

× × ×

一、表の説明は前項で打切り次の月報から二三注意ノ件を拾つて見れば、先づ死因の中で若い人に肺結核の多いのが特に目に付く、御覽の通り結核性疾患は此外にまだまだ肋膜炎、腹膜炎など相當にある。次が腦溢血で特に四十以上のまだ働き盛りの人を奪つて行く。結核と腦溢血、此二つが暴れるので老若共に安全地帶はない。

一、數の上で驚く程でもないが、腸チフスが日本人全体を脅かしてゐる。脅かすといへば眞に此病氣だ。健康を誇る人を突然冒す。死亡數が之丈けあらば病人は此十倍。扨て此病氣で絶對安靜を命ぜられ、仰臥で天井斗り見詰める時、保險の有難味がシミジ



ミ感ぜられる。這入らなんだ悔恨も同樣にシミジミと。

一、自殺が九人あるが一年か二年以上經過したのは多くの會社で無條件に支拂ふ。精神病の爲なら契約の翌月でも支拂ふ。自殺の外に「不慮の死」が相當にある。此中には自殺も交つてるかも知れぬが、さなくとも水死、外傷死など相當にあるものだ。

一、金額では二十一萬五千圓が筆頭、十五萬圓が第二位だ。三千、五千、一萬、二萬も相當にあるが、どうも境遇の如何に拘はらず千圓丈け入つて、之で保險は濟んだ積り、卒業の積りになつてる人が多く、地位、境遇の進むに連れて、油斷なく增額して行くといふ心がけの人が、甚だ少ない樣に思はれる。殘念なことだ。此報告を見ると好い參考になる。

# 保險金支拂

（某生命保險會社昭和十三年五月分）

①

| 府縣 | 保險金額 | 死亡年齡 | 經過年數 | 死因 |
|---|---|---|---|---|
| 兵庫 | 一〇、〇〇〇円 | 五六年 | 二年一ヶ月 | 大動脈中層炎及尿毒症 |
| 臺灣 | 一、〇〇〇 | 七〇 | 〇、八 | 慢性氣管支炎 |
| 群馬 | 二、〇〇〇 | 五五 | 九、一一 | 腦溢血 |
| 福岡 | 一、〇〇〇 | 四三 | 七、一 | 腦充血 |
| 大阪 | 二、〇〇〇 | 四〇 | 九、一〇 | 肺結核 |
| 香川 | 一、〇〇〇 | 四〇 | 三、三 | 胃癌 |
| 東京 | 二、〇〇〇 | 五六 | 〇、五 | 結核性腦膜炎 |
| 同 | 一、〇〇〇 | 四三 | 一、九 | 眞性肺炎 |
| 同 | 五、〇〇〇 | 四五 | 一〇、四 | 急性クルップ性肺炎 |
| 大阪 | 二、〇〇〇 | 五五 | 一〇、三 | 痙攣性食道狹窄症 |
| 東京 | 一、〇〇〇 | 三三 | 二、〇 | カルモチン自殺 |
| 朝鮮 | 三、〇〇〇円 | 三三年 | 八年二ヶ月 | 肋膜出血症並肺炎 |
| 秋田 | 一、〇〇〇 | 四四 | 五、三 | 肺結核 |
| 岡山 | 一、〇〇〇 | 四三 | 一、一〇 | 腦挫傷 |
| 大阪 | 五、〇〇〇 | 六六 | 〇、九 | 腦溢血 |
| 同 | 一、〇〇〇 | 三三 | 〇、一一 | 溺死 |
| 朝鮮 | 一、〇〇〇 | 三三 | 一、八 | 慢性腎臟炎尿毒症 |
| 滿洲 | 一、〇〇〇 | 三三 | 七、三 | 敗血症 |
| 和歌山 | 二、〇〇〇 | 六一 | 一九、六 | 腦出血 |
| 大阪 | 三、〇〇〇 | 三〇 | 四、七 | 肺及喉頭結核 |
| 北海道 | 三、〇〇〇 | 五六 | 八、三 | 尿毒症 |
| 三重 | 一、〇〇〇 | 三七 | 五、九 | 腦腫瘍 |

【欄外短評】

① 前にも書いた樣に本月の支拂ひには自殺が九人、外に溺死、轢死、不慮の死、海難、災害死、切創、刺創が十三名ある。失踪も一名あるが之は裁判所の失踪宣告で保險金が渡される。自殺とはよく〳〵の思ひ詰めた事情のあることならん。變死、失踪、悲しいことだ。之程世渡りの海は時化てゐるが、君の船体へ保險の用意はよいか。

②

| 府縣 | 保險金額 | 死亡年齡 | 經過年數 | 死因 |
|---|---|---|---|---|
| 臺灣 | 一、〇〇〇円 | 五六年 | 一〇年四ヶ月 | 急性カタル性肺炎及肋膜炎 |
| 和歌山 | 五、〇〇〇 | 五三 | 一六、六 | 胃癌 |
| 同 | 三、〇〇〇 | 五三 | 〇、九 | 胃筋萎縮性側索硬化症 |
| 大阪 | 一〇、〇〇〇 | 四七 | 九、二 | 腸チブス |
| 兵庫 | 五、〇〇〇 | 五三 | 二、一 | クルップ性肺炎 |
| 福岡 | 一、〇〇〇 | 二六 | 二、〇 | 膀胱カタル |
| 愛知 | 三、五〇〇 | 二九 | 三、五 | 肺結核 |
| 大阪 | 一、〇〇〇 | 四一 | 一六、八 | |
| 同 | 一、〇〇〇 | 四一 | 一五、二 | |
| 同 | 二、〇〇〇 | 四一 | 一〇、二 | |
| 同 | 一、〇〇〇 | 四一 | 一〇、二 | |
| 東京 | 五、〇〇〇 | 三五 | 五、四 | 肺結核 |
| 廣島 | 一、〇〇〇 | 一五 | 〇、二 | 急性肺炎 |
| 愛知 | 一、〇〇〇 | 六三 | 六、八 | 腦溢血 |
| 京都 | 一、〇〇〇 | 四九 | 八、一一 | 溺死 |
| 同 | 一、〇〇〇 | 五六 | 一八、一一 | 溺死 |
| 三重 | 一、〇〇〇 | 五一 | 七、八 | 肺炎 |
| 神奈川 | 三、〇〇〇円 | 六四年 | 〇、八年一ヶ月 | 肺結核 |
| 新潟 | 一、〇〇〇 | 四三 | 二、二 | 急性肺炎 |
| 愛知 | 一、〇〇〇 | 五九 | 六、一 | 肺結核 |
| 岐阜 | 二、〇〇〇 | 四〇 | 五、八 | 急性腎臟炎尿毒症 |
| 島根 | 一、〇〇〇 | 三三 | 一、三 | 肺及左右頸線結核 |
| 茨城 | 一、〇〇〇 | 三三 | 七、七 | 腦振盪 |
| 京都 | 二、〇〇〇 | 二三 | 三、八 | 尿毒症 |
| 同 | 三、〇〇〇 | 二三 | 〇、一〇 | |
| 靜岡 | 二、〇〇〇 | 三七 | 二、五 | 尿毒症 |
| 東京 | 一、〇〇〇 | 五一 | 七、一 | 肺結核 |
| 同 | 三、〇〇〇 | 四八 | 一三、一〇 | 喘息 |
| 同 | 一、〇〇〇 | 四三 | 六、六 | 肺結核 |
| 同 | 一、〇〇〇 | 四三 | 六、八 | 肺結核 |
| 北海道 | 一、〇〇〇 | 六六 | 二、四 | 腸結核及腹膜炎 |
| 石川 | 一、〇〇〇 | 二二 | 〇、一〇 | 肺結核 |
| 福井 | 一、〇〇〇 | 六六 | 一、四 | 胃潰瘍 |

（以下四〇行略）

② 健康で保險を契約された此方は、マサカ直ぐ二ヶ月の後に、黑い死の手が自分を待つてるとは考へ及ばれなかつたろふ。之を見ても人世の事凡て、「明日は雨天」と思つての計畫がよい。

③

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 廣島 | 一、〇〇〇円 | 六年 | 三年八月 | 急性胃擴張 |
| 同 | 二、〇〇〇 | 八 | 一、一一 | |
| 京都 | 二、〇〇〇 | 五年 | 九、七 | 肺浸潤 |
| 同 | 一、〇〇〇 | 九 | 七、二 | 肺結核 |
| 大阪 | 一、〇〇〇 | 六年 | 〇、八 | クルップ性肺炎 |
| 同 | 五、〇〇〇 | 四 | 二、三 | 急性肺炎 |
| 熊本 | 一、〇〇〇 | 一〇 | 二、六 | 氣管支炎 |
| 愛知 | 一、〇〇〇 | 四年 | 三、五 | 急性肺炎 |
| 同 | 一、〇〇〇 | 四年 | 九、四 | |
| 同 | 一、〇〇〇 | 四年 | 五、一 | |
| 同 | 二、〇〇〇 | 四年 | 三、二 | |
| 富山 | 二、〇〇〇 | 八年 | 四、二 | 腦卒中、肺尖カタル |
| 佐賀 | 一、〇〇〇 | 三年 | 五、四 | 直腸癌 |

（以下二十九行略）

③此立派な増額ぶりは眞に模範的だ。三十前後に入り初め、約三年毎に増して行かれた御手並は感じ入る。只一事此上の慾を言へば、今年はモー増額の年廻りであつたのに。

④奔馬性結核といふ早い經過の結核がないではないが、三ヶ月目の肺結核死亡はチト早過ぎる。ホジれば芥が出たかも知れぬが、良い會社は文句を言はず拂ふのを自慢にしてゐる。此の好意に甘へてはイケないが心地のよい話だ。

④

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 山形 | 一、〇〇〇円 | 六年 | 五、一〇 | 自殺 |
| 廣島 | 一、〇〇〇 | 五年 | 一、五 | 肺炎 |
| 熊本 | 一、〇〇〇 | 一九 | 三、二 | 溺死 |
| 香川 | 一、〇〇〇 | 一七 | 〇、三 | 肺結核 |
| 茨城 | 三、〇〇〇 | 六年 | 一、九 | 肺浸潤及クルップ症肺炎 |
| 兵庫 | 二、〇〇〇 | 三年 | 〇、四 | 肝臟癌 |
| 同 | 二、〇〇〇 | 三年 | 〇、四 | 肝臟癌 |
| 秋田 | 一、〇〇〇 | 三年 | 〇、三 | 顏面火傷 |
| 大阪 | 一、〇〇〇 | 二四 | 二、七 | 肺及腸結核 |
| 鹿兒島 | 一、〇〇〇 | 四年 | 三、七 | 結核性腦膜炎 |
| 同 | 一、〇〇〇 | 四年 | 三、七 | |
| 同 | 一、〇〇〇 | 四年 | 三、七 | 出血黃疸スピロヘータ症 |
| 東京 | 五、〇〇〇 | 四年 | 五、四 | |

（以下六十五行略）



⑤

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 熊本 | 一、〇〇〇円 | 三年 | 三、一一 | 肺結核並パールキンソン氏病 |
| 大阪 | 一、〇〇〇 | 三年 | 〇、一一 | 海難 |
| 千葉 | 一、〇〇〇 | 元年 | 〇、四 | クループ性肺炎 |
| 臺灣 | 一、〇〇〇 | 四年 | 一三、一 | マラリヤ兼肋膜炎 |
| 同 | 一、〇〇〇 | 四年 | 一〇、二 | |
| 同 | 一、〇〇〇 | 四年 | 八、一 | |
| 同 | 一、〇〇〇 | 四年 | 六、〇 | |
| 栃木 | 一、〇〇〇 | 四年 | 四、一〇 | 肝臟硬變 |
| 神奈川 | 二〇、〇〇〇 | 五年 | 二、三 | 急性腹膜炎 |
| 東京 | 二、〇〇〇 | 四年 | 一一、一〇 | 萎縮腎 |
| 同 | 三、〇〇〇 | 五年 | 六、一一 | 肺結核 |
| 和歌山 | 一、〇〇〇 | 七年 | 六、二 | 肺結核 |
| 埼玉 | 一、〇〇〇 | 三年 | 四、四 | 急性肺炎 |

（以下二十三行略）

⑤前の②と同様に立派な増額の好き見本。但し時計の様に二年毎の増額が六年前でピタと止つたのは、若しや人世航路の難船どもでなければよかつたが。

⑥此の同年同月同日に一萬圓づゝが三口。三萬圓の契約が、ドンな風に分配されたかを會社にも知るまいが、察するに之れは令息、令孃三人に。慈愛に充ちた父さんが、旨い實のなる保險の苗木を、心をこめて御手植への、コンな稚木にモー實がのつたのだらふ。桃栗三年柿八年、泣く泣く頂く保險の實！。子供のある方は此好き父さんをお手本に。

⑥

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 東京 | 一〇、〇〇〇円 | 五年 | 五、四 | 腦血栓兼肺炎 |
| 同 | 一〇、〇〇〇 | 五年 | 五、四 | |
| 同 | 一〇、〇〇〇 | 五年 | 五、四 | |
| 宮城 | 三、〇〇〇 | 八年 | 一、六 | 濕性肋膜炎 |
| 新潟 | 一、〇〇〇 | 一九 | 二、〇 | 心臟衰弱 |
| 滿洲 | 一、〇〇〇 | 三年 | 一、一一 | 肺結核 |
| 福井 | 一、〇〇〇 | 一四 | 〇、三 | 肺尖カタル及腸カタル |
| 新潟 | 一、〇〇〇 | 一六 | 一、九 | 急性肋膜炎兼胃瘍カタル |
| 石川 | 五、〇〇〇 | 三年 | 四、四 | 肺結核結核性腦膜炎 |
| 愛知 | 三、〇〇〇 | 二年 | 一、七 | 肋膜炎 |
| 京都 | 五、〇〇〇 | 三年 | 〇、一一 | 腦溢血 |
| 朝鮮 | 二、〇〇〇 | 四年 | 二、八 | 腸チブス |
| 福岡 | 一、〇〇〇 | 三年 | 四、八 | 敗血症 |

（以下九行略）

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 神奈川 | 一、五〇〇円 | 四四年 | 一〇、九月 | 狭心症 |
| 同 | 一、〇〇〇 | 四四 | 三、六 | |
| 東京 | 一、〇〇〇 | 五九 | 八、七 | 老衰併左下肢神經痛 |
| ⑦ 同 | 一、〇〇〇 | 五七 | 二四、五 | 肺虚脱 |
| 同 | 三、〇〇〇 | 一七 | 一、六 | 急性肺炎 |
| 福井 | 五、〇〇〇 | 三三 | 二、四 | 喉頭結核 |
| 臺灣 | 一〇、〇〇〇 | 五一 | 一一、二 | |
| 同 | 八、〇〇〇 | 五一 | 五、五 | 悪性甲状腺腫 |
| ⑦ 東京 | 一、〇〇〇 | 六一 | 二五、九 | 胃癌 |
| 愛媛 | 一、〇〇〇 | 二九 | 二、二 | 肺結核 |
| 秋田 | 一、〇〇〇 | 三三 | 一、二 | 肺結核 |
| ⑦ 東京 | 一、〇〇〇 | 六〇 | 三、七 | 腹水 |
| 岩手 | 二、〇〇〇 | 三〇 | 一、一〇 | 急性骨髄母細胞性白血病 |

（以下三十九行略）

⑦ 偶然に二十年以上の古い契約が三つ。コンなに長く掛金したら損だらう……の御心配は無用。著者の廿五年前此會社へ二千圓の契約は、掛金七十圓十二錢の筈が、今年はタッタ三圓八十六錢しか要らぬといふ生きた事實あり。

⑧ 又しても肺結核の早期死亡。殊に後の分は六百二十圓を一度掛けて一萬圓、勿体ないことだ。

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 石川 | 一、〇〇〇円 | 五六年 | 三、五月 | 氣管支肺炎 |
| 東京 | 一、〇〇〇 | 四六 | 三、七 | |
| 同 | 一、〇〇〇 | 四六 | 三、五 | 腦溢血 |
| ⑧ 樺太 | 一、〇〇〇 | 一七 | 〇、四 | 肺結核 |
| 長崎 | 一、〇〇〇 | 三五 | 九、二 | 肺結核 |
| 香川 | 一、五〇〇 | 一九 | 三、二 | 尿毒症 |
| 三重 | 一、〇〇〇 | 三三 | 一三、五 | 肺及喉頭結核 |
| 朝鮮 | 三、〇〇〇 | 五一 | 一〇、四 | 腦溢血 |
| 大阪 | 五、〇〇〇 | 三六 | 七、六 | 肺浸潤 |
| 同 | 一、〇〇〇 | 三五 | 〇、二 | 結核性腹膜炎 |
| 愛知 | 二、〇〇〇 | 三三 | 〇、九 | 急性肺炎 |
| 朝鮮 | 一、〇〇〇 | 四六 | 一〇、二 | 腦溢血 |
| 臺灣 | 一、〇〇〇 | 四七 | 三、三 | 肺結核及肋膜炎 |

（以下六行略）



| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 福岡 | 一、五〇〇円 | 五三年 | 九、七月 | 腸チブス |
| 滋賀 | 一、〇〇〇 | 三七 | 二、六 | カタル性肺炎及慢性氣管支炎 |
| 奈良 | 五、〇〇〇 | 三三 | 二、九 | |
| 同 | 五、〇〇〇 | 三三 | 二、九 | 化膿性腹膜炎 |
| 山口 | 一、〇〇〇 | 四六 | 四、一 | 腦溢血、腎臓炎 |
| 滿洲 | 五、〇〇〇 | 五五 | 二三、〇 | |
| ⑧ 同 | 一〇、〇〇〇 | 五五 | 〇、五 | 肺浸潤 |
| 東京 | 五、〇〇〇 | 六四 | 八、六 | 慢性心臓機能不全症 |
| 廣島 | 一、〇〇〇 | 四三 | 六、九 | |
| 京都 | 一、〇〇〇 | 四三 | 一三、四 | 肺炎（インフルエンザ） |
| 同 | 三、〇〇〇 | 四三 | 七、三 | 肺結核 |
| 愛知 | 二、〇〇〇 | 五三 | 一八、一〇 | |
| 同 | 一、五〇〇 | 五三 | 一七、六 | 腦溢血 |

（以下四十三行略）

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 福岡 | 一、〇〇〇円 | 五五円 | 三、七月 | 汎發性腹膜炎 |
| 廣島 | 一、〇〇〇 | 三八 | 一、一 | 慢性氣管支カタル兼慢性胃腸カタル |
| 朝鮮 | 三、〇〇〇 | 五六 | 一、二 | 急性脚炎 |
| 東京 | 二、〇〇〇 | 一八 | 九、三 | 藥物中毒 |
| 愛知 | 一、〇〇〇 | 四五 | 六、八 | 急性肺炎 |
| 京都 | 一、〇〇〇 | 三三 | 一、一〇 | 耳性腦膜炎 |
| 愛媛 | 一〇、〇〇〇 | 五三 | 六、〇 | 肺壞疽、膿胸 |
| 廣島 | 一、〇〇〇 | 二九 | 三、七 | クループ性肺炎 |
| 長野 | 一、〇〇〇 | 四一 | 五、九 | 腦溢血 |
| 朝鮮 | 一、〇〇〇 | 五三 | 一六、四 | |
| ⑨ 同 | 一、五〇〇 | 五三 | 一四、四 | 縱隔膜腫瘍 |
| ⑨ 京都 | 一、〇〇〇 | 二三 | 一、二 | 姙娠性腎臓炎 |
| 支那 | 一、〇〇〇 | 四三 | 六、二 | 貫通銃創 |

（以下三十八行略）

⑨ 御婦人には姙娠、分娩といふ大きな災厄がある。此爲若い間の死亡率は女子が男子より高く、男女同一の保險料では保險會社の損と言はれてゐる。殊に姙娠中は各社共契約を避けるから、婦人の方は姙娠以外の時期に、豫め此危險を保險して置かれる必要がある。本報告終りから三行目にも産褥熱といふ同種の災厄がある。

⑩

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 岡山 | 二、〇〇円 | 毛年 | 七、一二年月 | 胃潰瘍 |
| 朝鮮 | 一、〇〇〇 | 三八 | 四、五 | 肺結核 |
| 愛媛 | 五〇、〇〇〇 | 四四 | 四、一 | 〃 |
| 同 | 五〇、〇〇〇 | 四四 | 四、一 | 〃 |
| 同 | 一五、〇〇〇 | 四四 | 二、八 | 〃 |
| 同 | 二〇、〇〇〇 | 四四 | 一、八 | 〃 |
| 同 | 五〇、〇〇〇 | 四四 | 二、一 | 〃 |
| 同 | 五〇、〇〇〇 | 四四 | 一、九 | 〃 |
| 東京 | 二、〇〇〇 | 三九 | 〇、七 | 肺急性結核 |
| 同 | 一、〇〇〇 | 四七 | 六、七 | 格魯布性肺炎 |
| 同 | 一、五〇〇 | 三九 | 八、二 | 頸動脈切斷ニヨル出血死 |
| 同 | 一〇、〇〇〇 | 四四 | 五、〇 | 腎炎 |
| 三重 | 一、〇〇〇 | 四四 | 三、二 | 腸癌 |

（以下二十五行略）

⑪

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 大阪 | 一、〇〇〇円 | 二八年 | 三、四年月 | 肺浸潤 |
| 神奈川 | 一、〇〇〇 | 五五 | 二六、八 | 腦溢血 |
| 兵庫 | 一、〇〇〇 | 三六 | 五、四 | 胃潰瘍 |
| 岐阜 | 一、〇〇〇 | 三四 | 三、一〇 | 心臓性喘息 |
| 臺灣 | 一、〇〇〇 | 四一 | 一四、六 | マラリヤ兼肋膜炎 |
| 青森 | 一、〇〇〇 | 二六 | 二、五 | 肺結核 |
| 北海道 | 三、〇〇〇 | 三〇 | 三、四 | 肺結核 |
| 朝鮮 | 二、〇〇〇 | 五〇 | 二、七 | 喉頭結核 |
| 靜岡 | 一五〇、〇〇〇 | 三九 | 九、五 | 腸結核 |
| 愛知 | 二、〇〇〇 | 三五 | 二、九 | 乾性肋膜炎、腹膜炎 |
| 朝鮮 | 一、〇〇〇 | 四二 | 八、四 | 萎縮腎 |
| 千葉 | 五、〇〇〇 | 三六 | 〇、六 | 不慮ノ死 |
| 朝鮮 | 一、〇〇〇 | 六 | 二、九 | 肺臓癌 |

（以下二十二行略）

⑩ 一人で二十一萬五千圓、之が此月の筆頭である。豪勢なものだ。試に三十年滿期と見て掛金の總額を拾つて見るにザッと二萬九千圓しかない。差引き十八萬六千圓の拾ひ物。併し之丈けの大きな保險を付ける程の長者には、貧乏人の想像も及ばぬ相續税といふ、死亡に伴ふ二重の災厄負擔があつて、其爲大家の礎がぐらつくことさへある。若し富豪とも言はるゝ人が、相續税を保險金で支拂ひ得なんだら、祖先に對し、子孫に對し、相濟まぬ油斷である。借問す相續の御方……之で相續税が足りますか？

⑪ コヽにも一擧に十五萬圓。此の方は三十才から十年掛けて御座るから、契約の種類にもよるが恐らく四萬九千七百十圓以下で、十五萬圓を得られたことになる。細かい計算を別として、十年間の利廻り當に△△割（最初の年は五千圓しか掛けてない故）……天下の富豪諸君、此不幸のあつたお家の、金庫の中の堆き公社債、株券を皆コヽへ狩り出して、此保險證券と一本でも太刀打ちの出來る者が居たかどうかを詮議して御覽。無論無い筈。無ければ、本書第十三、十四章の「生命價値の資本化（證券化）」の一章を今一度再讀熟考せられては如何。

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 朝鮮 | 一、〇〇〇円 | 二四年 | 八、一二年月 | 失踪 |
| 山形 | 一、〇〇〇 | 二一 | 六、一 | 腦膜炎 |
| 大阪 | 三、〇〇〇 | 四五 | 二、三 | 不慮ノ死 |
| 同 | 一、〇〇〇 | 四八 | 六、二 | 肺結核 |
| 同 | 三、〇〇〇 | 五一 | 一、八 | 急性肺炎 |

⑨

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 滿洲 | 一、九八五円 | 二四年 | 〇、五年月 | 流産後ノ産褥熱 |
| 岡山 | 二、〇〇〇 | 三七 | 一、五 | 急性腎臓炎 |
| 鹿兒島 | 一、〇〇〇 | 二九 | 三、七 | 肺結核 |

（以下五行略）

⑫ **（本表ハ戰死ニヨル支拂ヲ掲載セズ）**

⑩⑪を一括して今一言申上げる。コンな良い利廻りで幾萬の大金を次々と持つて行かれては、會社の基礎を危くする樣なことはないか……、との御心配は無用だ。若し百萬圓の會社が之れ丈け引き拔かれるとグラつくかも知れぬが、此會社の財産はザッと百萬圓の三、四百倍もある。三十萬。取られても、百萬圓の會社が七八百圓か、高々千圓出したと變りはない。尙此點は諸君の御心配迄もなく、政府が干涉して危險のない程度に、契約の最大額を定めてゐる。此會社は限度二十五萬圓であつたかと思ふ。

⑫ 戰死に依る支拂は本報告の外とあるが、之丈け戰爭が大きくなれば相當な數に上るだらふ。ソンな譯で應召の將兵には將校△△圓下士兵△△圓と政府了解の下に各社共保險額が限定されてある筈だから、苟くも自分の好む會社へ五千、一萬の大きな契約を望む人は、應召の前に手續きを完了して置かれる必要がある。ソレも餘り差しかかつてはまづい。元來日本帝國の男子たらんもの、豫後備、補充、國民兵役、未丁年者を問はず、凡て第一線に立つの覺悟に變りはない筈だから、保險もチヤンと自分の經濟狀態に適合する丈けの額を、平素から付けて待つべき筈のものと思ふ。

書き度いと思ひ乍らも之迄に書き餘した事どもを、順序不同に書き並べる。「保險は先づ家長から」とか「恩給」、「月收」の樣なものも書き、更に手を延ばして「殘念」「有難い」の樣な記事も紙數さへ許せば版を重ねる毎に增して行き度い積りである。好い材料があつたら知らせて頂き度い、人助けになる。文章などドンナでも差支へないが、事實は少しも粉飾しない樣に願ひ度い。



## ▼保險は先づ家長から

本文にも書いたが僕が今から二十餘年前同僚のSに保險を勸めた時、S本人が五千圓這入る樣に決心したのだけれど、年齡が四十八歲で一寸掛金が多いのに躊躇し、十歲年下の奧さんへ二千圓付けた。僕は甚だしく失望し、直ぐに二千圓を取消して五千圓を家長たる本人に付ける樣勸めんと考へて居る內、僅か二ヶ月後にSは重病に罹り死亡した。此の時奧さんの二千圓は何んの役にも立たず、只一回で掛け捨てになつた。考へて見れば悲しい貴重な敎訓であつた。父親が死んで折角の徵兵保險を流したといふのも此順序を誤るからだ。父の保險金の一部で徵兵保險の殘り掛金はイツでも殘額拂切りの出來る用意さへあれば、コンな悲慘な血のニジむ樣なお金を流す不覺はない筈だ。

## ▼恩給

一、小學校時代の學友〇〇氏が小學校教員として三十年勤續、勇退して其夏に急病で突然歿した。病中には僕も見舞つたが、他で聞けば恩給は自分の手へは一度も受取らなんだとか。氣の毒なことに親一人、子一人の令息は今某高等學校在學で、既に丁年を超へてるから扶助料もない。ツク〳〵保險に入れて置きたかつたと思つた。後で聞けば保險はあるにはあつたが、私の毎度言ふ「オモチヤ」であつた。

一、醫者の門を閉ぢて此の稿の一部を江田島の親戚の一室に書く。此の行、船を下つて自動車に乘れば、陸軍時代の舊友O君に遇つた。O君曰く、今葬式の歸りだが死んだ人は海軍兵學校の老軍屬で、約四十年も勤續し表彰されて退職したのだよ。恩給は恐らく一年しか頂かなんだらうね。御互の様に十年勤めて二十年もまだ其上も頂戴する者と比べて幸不幸があるね。保險はあるといふ話しを聞かなんだよ。……保險で補はない恩給の賴み難いことは以上二つの例でもよく解る。

一、まだ悲慘なのがある。僕の町の或る家の娘が東京勤務の巡査某に嫁して男の子が一人あつたが、主人は或る事件で徹宵風雨の中に勤務し、ソレが元で感冒、肋膜炎、肺癆?で半年以内に死んだ。死んだ時に恩給年限に達せざること僅かに三ヶ月。保險はなかつた。泣くにも泣かれない。恩給は受くる前から保險で補つて置かないと、コンな悲慘な不幸を生むことがある。

## ▼月收

始めて此本を出した昭和六年の二月三月には、僕が受持の患者で三十五六から四十二三迄の働き盛りの男を三人死なせた。其二人は中等級の判任官で、何れも月收は八十圓

を超へたらうと思ふが、兩人共保險はなかつた。第三人目は月收四十圓の鑄物工で子供が五人、餘りに悲慘だから、病中內儀に簡易保險でもあるかと恐る〳〵尋ねたら、六年前に千圓の保險へ入り、外に簡易保險が二百圓あるとのこと。聞く內に嬉し涙が出た。四十圓で千二百圓の保險が掛けて行けるものなら、五十圓以上の月收の人で千圓の保險さへ持たないのは、家族に對する無責任だと思つた。保險の救ひは五六十圓以下の收入の人を忘れては居ないかと思ふ。

月收の事で一口附け加へて置く。今例に擧げた月收四十圓の人は、如何に儉約しても衣食住に三十五圓は要る。五圓しか殘らない。他の二人の八十圓の人は、極度に儉約しても社會的地位が相違するから六十圓は要るだらう。然し二十圓は殘る。ソコで八十圓は、四十圓の二倍に非ずして四倍だと言ひ得る。同じ理由で百圓は、四十圓の二倍半に非ずして八倍だと言ひ得るかも知れぬ。保險の掛金はドウにかして出せる筈ではないか。

## ▼殘念

**其の一**、隨分骨を折つて斷りましたよ

私が此の本の第一版を發表した後に、前記判任官の未亡人と遇つたら、(未)「先生は私の宅の事を書きましたね」(津)「濟みませんが人助けになると思つて書かして頂きました。」(未)「まだ話が殘つてるのですよ。實は主人が三千圓の保險に這入る約束をして後急に氣が變つてイヤになり、男としては斷り兼ねるから『わたし』に斷つてこいとの命令で、隨分骨を折つて斷りましたよ。ソレから三年目にあの病氣です。殘念の事でした……」と。此の主人は長男で不動產があつた爲、却つて此の油斷が出來たのだが、さて死なれてみれば主人の父や弟さんもあり、財產は未亡人の思ふ樣にはならず、遺兒を連れて苦勞されることになつた。實に殘念の事、財產のある人は却つて特別に注

意なさるがよい。

**其の二、保険を賣る人S氏の話**

私とF君とは竹馬の友で、小學校時代の同級生、成人してからも懇親を續けてゐました。或る時Fが高い〳〵庭木の松の手入れをする時、ソッと麻縄で自分の軀を幹へシバつてるのを見て、君ソレが保険だよと話し始めた。イッ小枝が折れても麻縄が君を保護してる様に、君は妻子七人を保険金の麻縄でドン底生活から保護せねばならぬ。イクラ君が頑健でも君の職業が自動車運轉手といふ危険な仕事だからね。といつたら心が動き、其後商賣氣を離れた數回の訪問で話しが全く具体化し、昭和十三年十月五日には、愈來月十日に第一回の半年分掛金十七圓九十四錢を取りに來てくれと迄、言はれて訣れた其十月二十六日に、彼は自動車事故で即死した。若しやFがイヤな顔でもしはせぬかと遠慮して、折角懐にあつたお金で十月五日に立替拂ひをしてやる勇



氣と親切が私に出なかつたのが彼が運の盡き、友達甲斐がなかつたと殘念に思ひます云々。

**其の三、保険を賣る人F氏の話**

昭和十年も暮れに近き十月始め、此人こそはと思つて某地の雜貨店主、四十一才の男盛りで五人の父なる無保険のY氏を訪ねること前後五回。明年春は是非加入するからソレ迄は待つてくれの一點張りで頑强に斷はられた。翌十一年一月末彼は流感肺炎前後七日の患ひで、あへなく此世を去つた。電擊の如く此の報を耳にした私は、早速お悔みの挨拶に立ち寄つた。

細君は私の顔を見るや、先づ無言のまゝ泣き伏した。やつと顔をあげるや狂氣の様に私の袖にしがみついて、「惜しいことをしました、……惜しいことをしました、……どうかして下さい。保険金が貰へる様にしてください。……何故あの時にもつともつ

とよくすゝめてくれませんでしたか。……わたしもなぜ主人をすゝめなんだのでしよふ。諦めがつきません。五人の子供は誰れが養育して行くのですか。」言ひ終つて又泣き崩れた。

其後一ケ月。未亡人は自分の保險一千圓を申込んで曰く、掛金の自信は全くありませんが、此の上わたしが死んだら五人の子が路頭に迷ひます。……聞けば主人は昨秋「株の失敗」で家運頗る傾いた處へあの不幸が重なつたとの事。

× × ×

津田曰く。其の一は不動産があるとの自信が祟り、其の二、其の三は共に明日主義が祟つたのだ。保險は思ひ立つた時、緣のあつた時に這入らねばならぬといふよい戒めである。Y氏歿後に未亡人が自信なき千圓の保險とは何たる悲慘の事だ。思ひ詰めたる母性愛、狂亂、悲痛の狀が眼の前に迫つて來る。アー遲かりし〳〵、なぜ主人死後の場面が、株失敗の日に想像出來なんだか……此の恨み綿々として盡くるの期なし。嗚呼。

## ▼有難い

保險の有難かつた話しは、書く丈けが野暮だ。靜かに心の耳を澄ませて御覽なさい。本篇前節の保險支拂月報△百人連名からでも、タマ〳〵少くな過ぎたの愚痴や後悔もあるか知らないが、大部分はアー助かつた〳〵の聲が活字の中から聞こへて來る筈。千、二千、五千、一萬、二萬、三萬、十五萬、二十萬。ソレ〳〵の境遇に應じて如何に此の金が有意義に働いたかは想像に餘りありだ。モー此の上に「助つた」、「有難い」の話しなど要らない筈だが、是非聞いて頂き度い心地がするので、私の手元にある「生保百億達成記念募集保險實話」から、一二等當選の實話を三つ丈け拾はせてもらふ。

（以下三篇津田抄錄）

## 其の一、忘れられない保險の惠み（一等）

東京　平山よし子

敎養のある晩婚の女性、京都で律義の金箔職工に嫁ぎ、極めて平和の家庭を作つたが、子寶に惠まれなんだ。此職工さん良い心掛けで、無財產の自分に唯一の賴りと、三千圓の保險に古くから掛金を怠らなんだことを、結婚の半年後妻に打明けた。併し三才で貰つて二人の間に吾子の如く育てた養子の留吉には最後迄打明けなんだ。留吉は東京の叔父の店で商業見習の修業をする內、惡友に誘はれて墮落のドン底へ落ちて行き、ソコへ主人が中風に罹つた。療養費にも差支へる處を、百圓づゝ二度も證券擔保借りをして、恥もかゝず氣强い療養も出來、主人も安心して此世をたたせることが出來た。更に此多額の保險金が留吉の「ヤケ」と絕望の現狀に改心復活の資源を與へ、母子相携へて上京、留吉は菓子店から喫茶店食堂と骨身を惜まず生れ變つた樣に稼ぎ出し、嫁を迎へて親子三人一家の春を取り返したといふうれしい實話。

## 其の二、K氏の復興（二等一席）

東京　船津丸次作

身長五尺六寸、体重十六貫。此軀へ保險なんか要るものかと、勸誘者を笑殺したK氏。が明治四十三年大阪港區へ「パン」製造の店を開業し、賣上の一分（百分の一）を保險の掛金にする約束で、冗談半分二千圓加入した保險が……二十四年後の昭和九年九月二十一日にあの恐ろしい颱風で、海岸一帶は潮水に洗はれ、家も家財も貯金代りに買ひ溜めた公債入りの「トランク」迄キレイに流され、自分は近年漸く衰へ始めた健康の處へ入院加療の要る大怪我をし、雇人H某は負傷して間もなく死んだ程の大難に遇つた時も時……其時來年滿期になる前の二千圓から、證券擔保で會社から簡易無造作に千五百圓を借り得た時は、實に有難かつた。更に其上へ來年一月入營と定まつた長男の徵兵保險千圓を

も引當てに、目出度二千五百圓で復興建築のトップを切つたのは、全く以て保險の御蔭。其上K氏の保險好きを見習つた東北岩手出身の雇人Hの遺族も、千圓の保險金を頂くことになり、ソレの一部でモー身賣りと定まつて居た妹M子の命の貞操を購ひ得たといふ涙の出る樣な保險功德の物語。

宮城縣　伊藤兵吉

**其の三、不況の中にみのる**（二等二席）

仙臺の南七里槻木町小學校の使丁を奉職する自分は、大正四年六月二日Y生命から來て先生方へ保險をスヽめられる處を横合ひから立聞きして心が動き、自ら代理店O氏を訪ねて遂に五十五歳の晩年に、千圓に付六十四圓二十錢といふ身分不相應に重い掛金で契約、途中解雇失業やら家内の死亡やらの打續く不幸の中を、苦心慘憺で掛け續け、七十五才で目出度く滿期、割增金共千八百五十八圓三十錢を受取つて、隣近所は近年不作不況に生色もない中に、勿体なや金、金、金の渦卷き。先づ千圓は据置貯金として手を付けず、殘り八百餘圓で人手に渡つた家屋敷を買戻し、亡妻の石碑も建て、子や孫に三百四十圓の大金を貯金として分配し、最後に大枚一百圓也を奮發して鐵道局主催の團体旅行に加はり、此八月には北海道から樺太迄行きて來ますといふ兵吉君得意絶頂の述懷を、孫の龍治君が記錄した景氣のよい實說。

×　×　×

津田曰く、三つが三つとも胸のスク樣な有難い實說だ。此本にはまだ三等當選として此三つに劣らぬ有益な話しが十以上もあるが、紙面の都合で之丈けに割愛する。

## ▼信託

保險は或る場合、信託と結び付けて始めて意義を生ずることがある。富豪諸君の遺産分配及び萬一の破産、失脚に供ふる保險丈けは、必ず信託に結び付ける必要のあることは前にも書いた通りだ。

ソレでなくとも三千圓以上の契約者は一應確實な信託會社から生命保險の信託案內といふ案內書を取り寄せて見て置く必要がある。ソレは折角受取つた金を遺族が早急に消費し盡さない爲の用心に——。

## ▼保險料表

諸君が保險へ加入せんと思ひ立たれた時、凡その豫算を立てられるに必要と思ひ、某會社の保險料表を左に掲げる。此會社の保險料は低廉を主眼として居るから、恐らく第一流の各會社を通じて最低廉であらふ。安くて確實といふ丈けの條件ならば此表の價格で立派に足りる。只諸君が今少し砂糖と味淋と醬油の味が付いてる方がよいなと思召すならば、之よりも約一割近く迄高い保險料を拂はねばならぬかも知れぬ。

此の會社は五大會社の一つで、ドンナ人でも此の會社の確實を疑ふ人はあるまいと思はるゝ程確い會社である。而も保險料は今言つた如く最も低廉だ。ソレで他の會社が之よりも高い保險料で幾年でも相拮抗する成績を擧げ得るのは、夫れ〳〵高いのにも相當の理由があるだらふ。恐らく著者の言ふ、砂糖と味淋と醬油の代が加はつてるのだらふ位の常識判斷を以て、他會社の保險料表を見られないと、初心の人にはナゼ高いかの合點が行くまい。又保險料が高いとか安いとか言つても、既往十年も二十年も前に遡つて堅實多額の配當をなし得た會社の保險料は、現在既に年々三割引き、五割引き、或は尙以上の割引きを受けつゝある人も多いことを考慮に入れる必要がある。

## 普通養老

| 年齢 | 四十年滿期 | 卅五年滿期 | 三十年滿期 | 廿五年滿期 | 二十年滿期 | 十五年滿期 | 十年滿期 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 円 | 円 | 円 | 円 | 円 | 円 | 円 |
| 15 | 206 | 236 | 280 | 345 | 447 | 612 | 962 |
| 16 | 207 | 237 | 281 | 346 | 448 | 613 | 964 |
| 17 | 209 | 238 | 282 | 347 | 450 | 614 | 966 |
| 18 | 211 | 240 | 283 | 348 | 452 | 616 | 967 |
| 19 | 213 | 242 | 284 | 349 | 453 | 617 | 968 |
| 20 | 215 | 244 | 285 | 350 | 454 | 619 | 970 |
| 21 | 217 | 246 | 286 | 351 | 455 | 620 | 971 |
| 22 | 220 | 247 | 288 | 352 | 456 | 621 | 972 |
| 23 | 223 | 249 | 289 | 353 | 458 | 623 | 973 |
| 24 | 225 | 251 | 291 | 354 | 459 | 624 | 974 |
| 25 | 228 | 253 | 293 | 356 | 461 | 625 | 975 |
| 26 | 231 | 255 | 295 | 358 | 462 | 626 | 976 |
| 27 | 235 | 258 | 298 | 360 | 463 | 627 | 977 |
| 28 | 238 | 262 | 301 | 362 | 464 | 628 | 978 |
| 29 | 242 | 263 | 303 | 364 | 465 | 629 | 979 |
| 30 | 247 | 266 | 307 | 366 | 467 | 631 | 981 |
| 31 | 252 | 271 | 312 | 369 | 470 | 635 | 982 |
| 32 | 259 | 277 | 316 | 373 | 473 | 639 | 983 |
| 33 | 266 | 282 | 319 | 377 | 476 | 643 | 984 |
| 34 | 274 | 289 | 232 | 381 | 479 | 648 | 986 |
| 35 | 282 | 296 | 327 | 385 | 482 | 652 | 988 |
| 36 | 293 | 306 | 335 | 387 | 486 | 655 | 997 |
| 37 | 303 | 315 | 343 | 391 | 490 | 658 | 1.006 |
| 38 | 314 | 325 | 350 | 396 | 494 | 661 | 1.015 |
| 39 | 325 | 336 | 357 | 401 | 498 | 665 | 1.024 |
| 40 | 337 | 346 | 364 | 407 | 503 | 669 | 1.033 |
| 41 | | | | 416 | 508 | 675 | 1.037 |
| 42 | | | | 426 | 512 | 681 | 1.041 |
| 43 | | | | 438 | 518 | 687 | 1.045 |
| 44 | | | | 449 | 525 | 693 | 1.049 |
| 45 | | | | 460 | 534 | 699 | 1.053 |
| 46 | | | | | 546 | 708 | 1.060 |
| 47 | | | | | 559 | 717 | 1.067 |
| 48 | | | | | 573 | 726 | 1.074 |
| 49 | | | | | 587 | 735 | 1.081 |
| 50 | | | | | 600 | 745 | 1.089 |
| 51 | | | | | | 760 | 1.100 |
| 52 | | | | | | 775 | 1.111 |
| 53 | | | | | | 790 | 1.124 |
| 54 | | | | | | 805 | 1.138 |
| 55 | | | | | | 820 | 1.148 |
| 56 | | | | | | | 1.167 |
| 57 | | | | | | | 1.185 |
| 58 | | | | | | | 1.204 |
| 59 | | | | | | | 1.226 |
| 60 | | | | | | | 1.247 |



## 利益分配附 終身保險 (保險金壹萬圓の保險料)

| 年齢 | 尋常終身保險 | 有限終身保險 三十年 | 廿五年 | 二十年 | 十五年 | 十年 | 五年 | 一時拂終身 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 円 | 円 | 円 | 円 | 円 | 円 | 円 | 円 |
| 15 | 158 | 194 | 208 | 230 | 272 | 363 | 634 | 2.800 |
| 16 | 161 | 198 | 211 | 234 | 277 | 369 | 644 | 2.850 |
| 17 | 164 | 202 | 214 | 238 | 282 | 375 | 654 | 2.897 |
| 18 | 168 | 205 | 218 | 242 | 287 | 381 | 665 | 2.943 |
| 19 | 172 | 209 | 222 | 246 | 292 | 387 | 676 | 2.986 |
| 20 | 175 | 212 | 227 | 250 | 298 | 393 | 687 | 3.028 |
| 21 | 179 | 215 | 230 | 254 | 303 | 399 | 698 | 3.070 |
| 22 | 182 | 218 | 233 | 258 | 308 | 405 | 709 | 3.113 |
| 23 | 186 | 221 | 235 | 262 | 313 | 412 | 721 | 3.159 |
| 24 | 190 | 223 | 238 | 267 | 318 | 419 | 733 | 3.210 |
| 25 | 195 | 225 | 242 | 272 | 323 | 427 | 745 | 3.266 |
| 26 | 200 | 229 | 246 | 278 | 329 | 434 | 759 | 3.327 |
| 27 | 205 | 233 | 250 | 284 | 335 | 443 | 773 | 3.393 |
| 28 | 211 | 238 | 255 | 289 | 341 | 451 | 787 | 3.464 |
| 29 | 218 | 243 | 262 | 295 | 347 | 459 | 802 | 3.540 |
| 30 | 224 | 250 | 269 | 301 | 353 | 468 | 816 | 3.619 |
| 31 | 232 | 257 | 276 | 308 | 360 | 478 | 833 | 3.702 |
| 32 | 239 | 264 | 283 | 315 | 368 | 488 | 850 | 3.790 |
| 33 | 246 | 272 | 290 | 323 | 376 | 499 | 868 | 3.881 |
| 34 | 255 | 280 | 298 | 331 | 385 | 510 | 886 | 3.975 |
| 35 | 264 | 288 | 307 | 338 | 395 | 521 | 904 | 4.073 |
| 36 | 274 | 298 | 317 | 346 | 403 | 531 | 923 | 4.176 |
| 37 | 283 | 309 | 327 | 354 | 412 | 542 | 942 | 4.281 |
| 38 | 292 | 320 | 338 | 362 | 421 | 553 | 961 | 4.389 |
| 39 | 302 | 333 | 350 | 370 | 430 | 563 | 980 | 4.501 |
| 40 | 312 | 346 | 362 | 379 | 440 | 574 | 1.000 | 4.616 |
| 41 | 325 | 359 | 375 | 390 | 452 | 589 | 1.024 | 4.734 |
| 42 | 337 | 372 | 388 | 401 | 463 | 604 | 1.046 | 4.853 |
| 43 | 350 | 386 | 402 | 413 | 476 | 620 | 1.070 | 4.975 |
| 44 | 363 | 401 | 416 | 425 | 490 | 636 | 1.096 | 5.097 |
| 45 | 379 | 417 | 430 | 439 | 501 | 653 | 1.120 | 5.220 |
| 46 | 396 | | | 454 | 518 | 673 | 1.152 | 5.344 |
| 47 | 413 | | | 469 | 536 | 693 | 1.184 | 5.468 |
| 48 | 430 | | | 485 | 553 | 714 | 1.216 | 5.592 |
| 49 | 450 | | | 502 | 571 | 734 | 1.248 | 5.716 |
| 50 | 472 | | | 520 | 590 | 755 | 1.283 | 5.840 |
| 51 | 497 | | | 543 | 611 | 778 | 1.317 | 5.966 |
| 52 | 521 | | | 566 | 632 | 801 | 1.351 | 6.092 |
| 53 | 548 | | | 590 | 654 | 824 | 1.385 | 6.219 |
| 54 | 576 | | | 614 | 676 | 847 | 1.419 | 6.346 |
| 55 | 602 | | | 638 | 699 | 871 | 1.454 | 6.475 |
| 56 | 637 | | | 670 | 728 | 901 | 1.493 | 6.604 |
| 57 | 671 | | | 702 | 757 | 931 | 1.532 | 6.732 |
| 58 | 706 | | | 734 | 786 | 962 | 1.572 | 6.859 |
| 59 | 742 | | | 766 | 817 | 992 | 1.612 | 6.984 |
| 60 | 777 | | | 798 | 848 | 1.025 | 1.653 | 7.105 |

## ▼肉彈の浪費を防ぐ爲に此の本の利用

生命保險を人に勸める事、言ひ換へれば保險を賣る事を職業とする人が全國に約十八萬人、此の人々の無益の手數を省く爲に此の本を利用して見度いと私は思ふ。

ソレなら自分達に關係のないことゝ一般讀者は此の項を讀まれないかも知れないが、保險を勸める人々へ會社の支拂ふ費用は全部現在及び未來の保險契約者の懷から出る筈。若し此の費用が少くて濟めば會社にはソレ丈けの金が剩り、利益配當又は返還金として諸君の手に返へる筈。決して諸君に無關係のことではない。殊に之れから保險に入らうとする人には一層御參考になると思ふ。

津田が保險好きといふことを知つてか、保險會社の人から頻々訪問を受ける。

保「先生ドコかへ御紹介を願へませんか」

津「此の間紹介したAさんは如何でした」

保「ズベリコベリ要領を得ない人ですね」

津「Bさんは」

保「頭から此の不景氣にどうなるものかと相手にして呉れません」

津「CさんとDさんは」

保「Cさんはブルらしく大きな契約でも頂けるかと思ひ、其後も度々伺ひましたが何度行きても留守です。此の間も奥さんが遠い道を何度御出で下さつても、宅は今都合が惡くて保險に入り兼ねますからモーどうか……と言はれた處を見ると居留守ではないかと邪推しますね。

ソレからDさんへ廻つたら、今日の樣な忙しい日に役所へ來る法があるかと怒鳴りましたよ。癇癪持ちですね」

津「骨が折れますね。併し僕は此の間是非保險を勸めたいと思ふ四人を選んで紹介し

たのだが揃ひも揃つて駄目か知ら」

保「此の間の歸り途は雨は降る、風は吹く、日は暮れる、ック〳〵悲觀しましたよ。實際私等の仕事は肉彈の浪費ですからね」

津「同情します。併し肉彈の浪費と言はれるが、貴下は肉彈の持主で、浪費は御互の浪費ですからね。貴下の能率が擧らなければ會社の營業費が澤山要る。ソレは皆被保險者の利益を消耗するのですもの」

保「先生の樣に理解した方計りなら文句はないのだがねー。濟みませんが今度Cさんに一つ話して置いて頂けますまいか」

津「一人一人に僕が話しても知れたものだから、今少し有効に話し度いね」

保「演說會でも保險の話しでは聽きに來ますまいし、矢張り先生の肉彈を浪費して、Cさん、Aさんに御遇ひの時に話して置いて頂き度いですが――」

津「僕は肉彈の代りに紙を浪費して見度いのだがね」



保「刷り物は駄目です。てんで見て呉れませんから」

津「僕のは刷り物には相違ないが二三百頁斗りの本だ」

保「ドコから發行します」

津「僕が書くのですよ」

保「御冗談を……カッイでは困ります。本が出來たら拜見するとして急ぎますから之れで失禮を」。

冗談と思つて會社の人も之れ迄は相手にしなかつたが、併し僕が此の本を書くには最初から肉彈の浪費を省く材料になりはしないかといふ希望があつた。

× × ×

以上は實際に度々あることを問答體に書いた迄だが、今度は保險物語を愈々出版したから、之れを如何に肉彈の浪費を省くことに利用せんかを想像を以て矢張り問答體に書

【注意】
此の本は保險募集法及取締規則第三十八條の規定により適用を受けるものと解釋せられたい。
下記の如き利用法は第一項の受け樣に見せかけ、研究會社員の私意を外れ、使用者の手數料を要する樣な兩方面に渡つて濟ばせられたい。



いて見る。

保「此の間は失禮しました。何か變つたこともありませんか」

津「變つたこともないが、トウ〳〵冗談から駒が出ましたよ。ソレ見て下さい。私が『保險物語』といふ本を書いてアソコに二三百部重ねてあるでせう」

保「御熱心には驚いた。一部拜見します。ドレ……『弓と鐵砲、貯金と保險』……最初からチト猛烈ですね。之れは面白さうだ。之れなら人が讀みますよ。一部頂けますか」

津「一部ではない。若し君がやつて見るお積りでしたら十部ばかり持つて歸つて、此の肉彈節約機の試運轉を試みては？」

保「ドウ試みるのです」

津「君は來る度毎に『手の付け樣がない』、とか『取り付く島がない』とコボして居ましたね。其本は君の爲に『手の付け處』を作り『取り付く島』を發見してくれる



筈です」

保「ドウした使用法です？」

津「チト重いか知らぬが、今日御歸りに十部餘りも持つて先づ此の間のAさん、Bさん、Cさんの處へ立ち寄つて行くのですよ。來週の此の日に伺ひますから之れを見て置いて下さいつて、試して見たまへ、Cさんの奥さんでもロハの雜誌位に思つて直ぐに見て呉れるから。御主人も旅行でない限り一週間留守が續く心配もなしさ」

保「Dさんはドウしませう」

津「無論大いに行くのです。イクラDさん癇癪持ちでも執務中は本を受取らないとはいひますまいよ。ソレからDさんに御願ひしなさい。アー見へてアノ役所では評判の親切な人だから。今五部程置き度いが誰々にしましやうかと相談するのです。貸した人の名丈けは書き留めて置かないと後で整理が付きませんよ」

保「解りました。モー先生の說明を聞く迄もない。永年此の道で苦勞したのですもの。

妙案々々。今日はエーッと甲聯隊の將校集會所、乙中學の事務室。部數が餘れば丙工場へ……」

津「流石は其道の人で感取りも早い。名刺を添へて若し一週間以内に御用が出來たら此の名刺へ宛て御葉書をと賴んで置くのですな」

保「ソレなことにヌカリはありません。來週の今日本を返して頂く時でも先生の机上論などより、有効に結末を付けて行きます。先づ之れで今月は責任額の心配はなしと」

津「急に樂天家になりましたね。結果に就ては神様より外に知る人はないでしやう。併し只一つ僕はズット以前に此の物語りの舊稿を親戚知己友人に回覽させ、一冊の稿本が擦り切れない中に二十萬圓餘りの契約が出來た經驗を持つて居ます。兎に角僕の想像では之れ迄より諸君の御仕事が能率的、事務的になりはしないかと思はれますがね」。



× × ×

讀者諸君の中には此の方法で保險物語りを持ち込んだ人の本を御讀みになることがないとも限らない。其時は津田の空想が實現したなと思つて頂き度い。若し持ち込んだ人が此の本で得られた知識で信用ある會社の人ならば、安心して條件の良し惡しを研究して御覽なさい。但し條件の良し惡しといつた處で、概ね郵便貯金にする筈の金でウカと國債を買つた程にも違ひはしない。半年定期で銀行へ預ける筈の金を二年据置の信託會社へ預け込んだ位の間違ひに止り、本文で屢々警告したボロ會社に引かゝつた樣な大損は決してない筈。此の程度迄は申上げて置かないと始めての方は危かしくて手も足も出ないか知れない。

尙條件の惡い甲會社の人は、自分の持ち辨當で條件の良い乙會社の御使ひをする如き結果になるかも知れないが、それが却つて此の方法の面白い處で、最も條件の良い會社

の人々が最も有効に僕の此の提案を利用さるゝことになるだらうと思ふ。

附

錄

# 著者の身の上ばなし

若し私が有名な人物であるならば、此一章は無用である。併し全く無名の町醫者が、畑違ひの保險物語りを書くのだから、津田侃二とは何者であるかを先決問題にする人もあらふ。そこで成るべく簡單卒直に自らを語る。

明治時代の作家長谷川二葉亭に「平凡」といふ非凡の傑作があつた。平凡人の平凡な身の上話しを書いたものだが、妙なことには讀んで行く内に共鳴とでもいふものか、息詰る程にヒシ〳〵と胸にこたへる。それと違つて偉い人は自分で自叙傳を書かれる。

外國人では「フランクリン」「ルソー」などの自叙傳が私の青年時代よく讀まれたものだ。吾々が「フランクリン」の兄弟喧嘩、「ルソー」の小さい盜癖に却つて親しみを覺へ

るのも妙である。偉人の中に平凡を見出すのが嬉しいのかも知れない。併し私は日本の三大教育家と呼ばれる故福澤諭吉先生の自叙傳にひどく惱まされたことがある。先生は酒と煙草が大好きで、其内酒は自制に依つて禁酒し得たが、煙草丈けは遂に止め得なんだと書いてあつた。

私は丁度其頃煙草の中毒を自覺し、禁煙を思ひ立つて居た處、サー大變だ。當時吾々青年が神の如く崇拜した福澤先生でも禁煙は出來ないのに、平凡人の自分にこんな大業が出來るかと妙な暗示になり、折角止めかゝると「福澤先生でさへ」で挫ける。之には三年間ほと〳〵困り拔いたが、漸く私は私自身の努力と工夫で禁煙に成功し、爾後二十七年間どうにか禁煙を成し遂げて居る。不遜な言ひ分だが、考へ樣では禁煙といふ極小さい局面では、平凡人の津田が、日本の大教育家福澤先生より一歩先んじ得たことになる。

實は斯樣に不遜な憎まれ口を申上げるわけは、私の之から話す身の上話しに、偉大な道德家でも尙難んずるかに見へることを私が爲し遂げたと書かねばならぬかも知れず、



日本全國の大學專門學校を統制する文部省に大きな誤算があつたと言はねばならぬから平凡人でも極めて小さい局面では、大家、名家、偉人、豪傑をも凌ぎ得ること、換言せば平凡人の中に偉人の部分を見出し得ることを念頭に置いて頂かねば、此駄法螺吹き奴と一笑に付せらるゝかも知れない。

又偉い人の正直は美德として讃へられるが、平凡人が正直過ぎると直ちに馬鹿の二字を冠して馬鹿正直といふ。讀者の中からこんな批評が出るかも知れぬ。本文を讀んだ處では頭も相當に働く男に見へるが、それにしてはちと正直過ぎる。言ひ換へれば馬鹿が足らぬと仰せになるかも知れない。併し之れは甚だ御互ひ平凡人を侮辱した評言である。平凡人と雖も圓滿な常識、俊敏な頭の働きと同時に、正々堂々の正直を兼ね得ない道理は少しもない。恰も偉人である「ルソー」が同時に盜癖を兼ね、高潔な人格者「フランクリン」が兄弟喧嘩をなし得ると同じ組み合はせの可能を以て——。此點シカと用心棒をつゝかへて置く。

自傳など大袈裟なものを書くのではない。就職口を探す人の履歴書に似たものを書いて見る。

明治三十五年　京都府立醫學校卒業（明治一二生）
明治三十七年――大正二年　陸軍奉職（現在退役陸軍軍醫大尉）
大正二年――現在　廣島縣可部町四九六にて內科專門醫開業

三行で濟んだ。外には何もない。只一つ學生時代から、始終何物かを考案せずには居られぬ性分で、陸軍に十年居た關係から、體格を計る計算器を作ることを思ひ立ち、約十二年後の大正八年に漸く津田式體格計なる一新計器が出來上つた。此計器には日本政府から三二八九一、三七六一三、三七八一七號の三つの專賣特許、後ちに米國特許一、五二五、五九八號をも得た。

此の特許の計算器が平凡人の生活に小さい波瀾を起した。之れしきの發明でも生れた時には一寸輝かしい日が續いた。始めて此計器を大日本醫學會で發表した時には、私の講演が終ると直ぐに東大のI教授が私の席まで來て、宿を訪ねてゆつくり話しが聽き度いと申込まれる。同教授から文部省へ紹介せられて種々の便宜を與へられた。何が成功だか、誰れが通知したか知らないが、鄕里の師團軍醫部長から祝電が來た。其翌年は陸軍省の醫務局長から過分の褒辭を頂き、軍醫學校で講演を命ぜられた。東大のN教授は數ヶ所の講演に私の發明した體格計を供覽紹介せられ、雜誌「大日本學校衞生」は力瘤を入れて紹介を始めるといふ樣に、前途洋々の觀があつた。

此の發明の完成に近づく頃、兄弟で同一の學校に奉職せられる廣島縣立工業學敎校師石本光三郎（木工科）同和吉（金工科）の兩氏から多大の援助を得た。それが因緣となり兩氏は學校を辭職して私の發明品を作る專門の工場を經營さるゝことゝなり、工場の名も津田と石本の姓を一字づゝ取つた「津石製作所」と名付けて、極めて順調の發達をし始めた、製品は飛ぶ樣に賣れる。

此時に文部省が學生、生徒、兒童の身体檢査規則を改正發布し、訓令として全國一樣

に檢査の方法形式を一定した。此の訓令は

**「身長を以て体重を除した商の大小を比較して發育の眞否を定める」**

といふのが骨子となつてゐたが、それが私の体格計の主張である。

**「人間は立体であるから体重は身長の三乘に比例して增減せねばならぬ」**

といふ信條と相容れない。私は文部省の訓令が未だ發布にならない前、其の草案を見た時、之れは如何にも大きな誤謬に陷つて居るから……と、條理を盡して指摘忠告したけれど、文部省は忠告に耳を藉さず、横車を押して右の訓令を發布した。そこで私は文部省と正面衝突をすることになつた。

諸君の内に苦笑する人があるかも知れぬ。相手が一國の文部省と、田舍の町醫者とが正面衝突をしたとは用語が一寸おかしい。恰も地球が橙と正面衝突したといふに等しいから。

更に衝突の結果橙の方に勝ち目があつたといはゞ尙更滑稽になり、覺へず吹き出す人



もあらふ……併しドドの詰り橙が殺された、默殺された。殺されても幸いに此の地球と橙の勝負は、諸君の常識で判斷が付くから面白い。

イヤ面白い位では相濟まぬ。話は今少こし深刻に讀者諸君の身邊に迫つてゐる。失禮乍ら今此の本をお讀みになる諸君の中、三十五歳以下の方ならば、御自分に此法で發育の甲乙を付けられた覺へがある筈。若し又三十五歳以上の方ならば御自分の愛兒を此法で測られたに相違ない。若し檢査が入學試驗であつたなら、一生の運命を支配したかも知れぬ。何としても法令の壽命が足かけ十八年、大正十年四月から昭和十一年の四月迄、十六回も全國學生、生徒、兒童の身体檢査が此の方法で行はれたのだから、日本の全國民に關係を持つた一問題である。

此の全國民に關係を持つた法令に、廣島の片田舍に住む眇たる一個の町醫者が「法令に誤算がある」と抗議したのだから、少々釣合ひが取れ兼ねて滑稽に見へる。ソコで私が文部省に對する抗議の荒筋なりとも見て頂かなければ、カチ〳〵山のお伽噺しと同樣

に、津田の作り話しと聞き流されるだらふ。之に反し若し此一件を眞實理解して頂くならば、此の解り易い誤謬が、二十年近くも學問の元〆めである日本の學校全体を支配し得たことに一大反省が起る筈だ。

惟へば人間といふもの、隨分大きな人數で大きな思ひ違ひをなし得るものだ。之迄感情的の保險ギラヒ、無條件の貯金萬能主義で押し通した自分も、保險と貯金の前後位は研究して見なければ、「身長で体重を除る樣な大きな誤算」に陷りはしないかと考へ直して見る人もあらふ。

たゞ併し乍ら、此の問題の戰鬪經過を始めから詳述することは紙面がゆるさない。此本の第一版には、大正十年九月此法令發布當時の責任者文部省學校衞生官北豊吉博士に對する公開狀を掲げて、私の論旨と論戰の經過を觀て頂いたが、今となつては之も古い。依て此本には今から五年前、全國聯合學校衞生會が廣島で開催された時、私が會員中の一自由人として、文部當局、並に參列の全國會員に訴へた「リーフレット」(宣傳ビラ)の



大略を左に掲げて諸君の一讀を仰ぐことにする。

幸なことに此「リーフレット」の扱ふ問題が、醫學の問題といふよりも數學の問題、數學の問題といふよりも寧ろ常識の問題である故に、私の記述はワザと醫學的記載を避け中小學校の先生にも批判の人數に加はつて頂く樣に、「通俗讀物式」に書いてある。そんな譯で讀者諸君に難解の處は全然ない積りだ。ソコで此「リーフレット」の讀後感として、恐らく諸君に……ウン「地球と橙の勝負はハッキリ判つた」と言つて頂くことを信ずる。

コヽで誤解のない樣一寸御斷りして置く。今日本は國を擧げて千古未曾有の大戰を戰ひつゝある。此時に當つて假令些細のことでも、上司の命令を批評する如き態度は愼まねばならぬ。言論の府である貴衆兩院でさへ、あの程度に自重、自制して御座る處はよい模範だ。私も此點はよく承知してゐる。

併し事苟も過去に屬するもの、換言せば歴史に屬することはコンな遠慮の要る筈がない。遠い昔に道鏡が淸麿を流刑にしても、足利が楠公父子を殺しても、ソレが日本帝

國の威信を上下させない事は勿論、づつと近く明治二十年代に選擧干渉が行はれたとて、昭和△年に大官の贖職があつたとて、之は歴史である。コンなことを削つて行けば世は暗だ。

私の之から言ふ文部省の誤算も、約二十年に近ひ昔に出た法令に誤謬があつたといふ話しで、一昨年一月にはキレイ、サッパリと改正、清算され、今では過去の歴史に屬するものであることを、豫め御了解の上で見て頂く。隨つて私も遠慮なく當年の抗辯を其儘左に轉載する。

昭和九年五月五日、六日の兩日に亘り、廣島市で全國學校衞生會の大會が開かれ、全國各府縣の代議員及會員の集まる者約七百名（大部分は醫師）、文部省からも山川体育課長、大西學校衞生官等の臨席あり、頗る盛會であつた。私は前以て文部省要路の人々と、學校衞生會の有力者、並に新聞、雜誌社等へ此「リーフレット」を送り、更に當日參會の會員、傍聽者全部に之を配布した。（左は「リーフレット」の抄錄）

現行文部省調令

# 發育概評決定標準の誤算と不合理を難ず

昭和九年五月五日

津田署名

〔論旨摘要〕

▽此の鷄は彼の牛より發育がよいと言へないのは、兩者の間に立体相似形的比の關係がないからだ。

▽又人體發育の良否を比較するのに、先づ男女の性と年齢を區分するのも同樣相似形的比の關係を統一する爲だ。

▽之を要するに立体相似形の比を離れて、發育良否の比較が成立たないといふことは、極めて明瞭な事實である。

▽次に立体相似形の質量は、相對應する高さの三乘に比例することは、小學校の教

科書にさへ載つてゐる程著明な幾何學上の定理である。

▽然るに文部省の現行規定では、標準身長を以て標準体重を除した商を係數とし一定身長以上の者は凡て此係數にさへ達すれば發育甲となり得る。

▽即ち、等差級數(一、二、三、四、五)で増減する身長と、此等差級數各項の立方の級數(一、八、二七、六四、一二五)で増減する体重を丈け比べさせることになる。

▽斯かる亂暴な丈け比べである故に、身長さへ延びればドンなヒョロ〳〵の萱の様な、竹の様な体格でも、必ず「發育甲」に合格すること疑ひなく、切言すれば前述の立体相似形の比を全然踏み外してゐる。

▽此の大切な比を誤つた現行文部省訓令の發育概評決定標準に、斷じて標準の資格はない。速に廢するがよい。之が本論の主張である。

×



大正昭和の一怪談として後世から笑はれる筈の奇怪極まる省令が、大正九年七月大日本帝國の文部省から發布せられ、爾後十五年の久しき今日迄、全國三萬六千の學校に於て年々實施され來つたといふ、嘘の様な眞の事實を前にして之が改革を諸君に訴へる。

申す迄もなく右の省令は、昭和二年の三月に一度改正せられたけれど、ソレは尺貫式をメートル、キログラム式に改めたといふ迄で法令の骨子には影響のない變革だから、私は便宜上此度も依然尺貫式で話す場合が多い。就ては私の論を反駁するに當つて、現行法はメートル、キログラム式だなどと、數理の根本に關係のない揚足取りをなさらぬ様願ひたい。

（中　略）

今コ、に掲げる寫眞の主は身長五尺二寸四分(一五六、八糎)體重十一貫五百匁(四三瓩)胸圍二尺四寸七分(七四、八糎)筋骨薄弱で徴兵檢査に丙種となつたヒョロ〳〵の男、又身長を以て体重を除した商が二、一四(米瓩式では二六、四)で文部省訓令でも矢張り「發育丙」に該當する。

只不思議なことには、此寫眞の主の身長を五尺八寸七分迄延ばせば……中略……其儘で省令(訓令も同斷)の「發育甲」に合格する。

此身長引延ばしの計算は私の考案した津田式体格計(日本特許三ヶ、米國特許一ヶ、但し大正十一年以後作らず賣らず)で數秒間に行つたもので絶對に誤算なきことを保證する。サテ此寫眞の主などは未だ良い方の部類で、若し極限の場合を示さば——

明日墓場に送られる、極度に痩削した肺病患者でも、身長さへ延ばさば必ず省令「發育甲」に合格すること

を斷言する。反對にドンな頑丈なヘラクレス型の体格でも、右の算法で身長を縮めて行けば……中略……失格する。

（中　略）

話が少々堅くなり過ぎる故一寸活動映畫の一幕を借りて理解を助けることゝする。

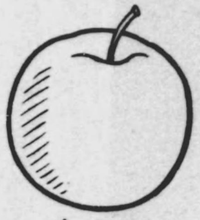
コヽに現はれたるは粗忽者の八百屋兼看屋の店頭、千客萬來で店が繁盛すればする程損が立つ、何故コヽなに損が行くかは解らないが毎日次の如き問題が此看屋を試みる……字幕

（一）、直徑一寸五分の林檎の價一錢五厘の時直徑三寸の林檎の價如何

（二）、長さ五寸の鯛の價二十錢の時、一尺の鯛は幾何を價すべきか

粗忽看屋と文部省の計算法　一錢五厘

直徑一寸五分



直徑三寸

三　錢

數學の先生と津田の計算法　一錢五厘

十二錢

長五寸

二十錢

二十錢

長一尺

四十錢

一圓六十錢



粗忽看屋と文部省の計算法　三貫匁

三尺

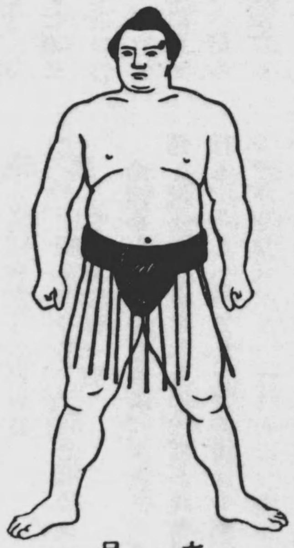
三貫匁

數學の先生と津田の計算法　三貫匁

此問題に對し——

粗忽な看屋の計算が奇拔だ。第一問は一錢五厘を一寸五分で除れば、一寸當り一錢だから、三寸の林檎の價三錢。同樣の算法で第二問一尺の鯛の價は四十錢。

餘りに損が嵩むので數學の先生に聽きに行く。先生腹をかゝへて大笑ひ、ソレは損、損、大損をしましたねと黑の鉛筆を握る。忽ち變る白幕へ次の文字が順々に現はれる。



六尺

六貫匁

二十四貫匁

直徑といふも、長さといふも、立體相似形の相對應する高さと解すればよいのだから

第一問は高さが二倍する故

$(30/15)^3 \times 1.5 = 12$

第二問は同樣二十錢の八倍、

一圓六十錢

次に現れるのが大日本帝國文部省の役人で（發聲）之から新しい標準で全國學生々徒兒童の身體檢査を致さ

せるが、其前に標準の原則を理解して置け。

幕の中央に先づ三尺の兒童が出る。之が見る間にムク〳〵成長して六尺の力士に變る……直ぐに字幕

**三尺の兒童が三貫匁の時、其儘の體型で生長した六尺の力士は幾貫匁あるべきか。**

前の役人が現はれる。(發聲)小兒の身長三尺を以て體重三貫匁を除した商一、〇は一尺當り一貫を意味するから、六尺の力士は六貫匁でよい。解つたか……

學校醫の津田が現はれる。(發聲)ソレは御計算が違ふ六尺六貫匁は人間でなく化け者になります。小兒の體型其儘の力士なら、頭は大き過ぎ、胴は長過ぎ、脚は短か過ぎるけれども、矢張り人間は人間で化け者にはならぬ筈です。私の計算法を申上げます……

字幕

立體相似形の質量は、相對應する高さの三乘に比例するから、身長が二倍したら體重は23倍卽ち八倍の二十四貫(「參考」文部省標準二十一歲男子の體型ならば二十一貫弱)でなければならぬ。

再び文部の役人と津田が現はれる。



津田(發聲)文部省は幾何學の定理を無視しても六尺六貫匁の標準を天下に强いますか、御返答を承ります。

文部の役人(發聲)無禮者下がれ、汝等如きに返答の要はない、默殺の刑に處するゾッ!……

津田の影が舞臺から消へると

大日本帝國文部省身體檢査場と大書した舞臺の上を、五尺五貫匁の學生やら六尺六貫匁の力士が亂舞する……字幕

此間 に十五年の歲月が流れる

時 は昭和九年五月五日

處 は廣島市の第十三回全國聯合學校衞生會總會々場

全國から集まつた脊廣、モーニング、フロック、羽織袴と樣々の服裝をした學校醫が此會場へ吸ひ込まれて行く、そこへ殺された筈の津田の幽靈が出て此リーフレットを撒く。

×

(第一卷の終り)

映畫は以上で打切り以下問答で近頃流行の座談式に話頭を進めることにする。……文部省の爲に辯ずる人(以下此人を假に「文辯」と呼ぶ)は言ふ。

【文辯】君の言ふ通り三尺を六尺迄延ばせば誤算がハッキリするが、世の中に五尺の小兒もなく、三尺の大人も居ない、比較されるのは所謂ドングリの背競べで、三尺七八寸と四尺、五尺と五尺二三寸の間の優劣だから訓令の「身長を以て體重を除したる商」とて必ずしも排斥すべきではない。相當役に立つ筈だ。

【津田】ソレは日本人の天才的働きの一つである目分量とか、目八分とかいふ長所を無視した僻論である。後に實數を擧げるが、吾人の目算は斷じて訓令標準よりも鋭敏だ。只此標準の役に立つのは、官僚式劃一の効果のみである。全國の學生、生徒、兒童を誤謬で統一した處で、ソレが何の役に立つか僕には解らない。

【文辯】若し假に多數學校醫の目算能力が訓令標準より鈍感であつたとしたらドーだ。

【津田】百歩を讓つて訓令標準が吾人の目算より精細なと假定するも、最初から此標準に誤謬のあることを承知の上で、大切な身體檢査を尙之に任さねばならぬ理由がドコにある。吾人の感覺を超越する樣な誤謬を正すことこそ、此種標準の最重要任務ではないか。

【文辯】ソレは君の御意見、コンな標準でも無いよりはましだと思ふね。

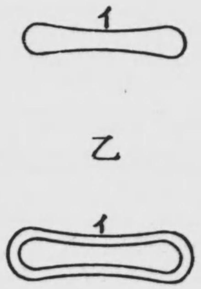
【津田】グレシャムの方則と同じく、コンな標準があるからこそ、當然生るべき正確の標準が驅逐せられるのだ。省(訓)令標準は全國學校醫の敏感を痲痺させる阿片である故、斷然廢止せねばならぬと僕は思ふ。

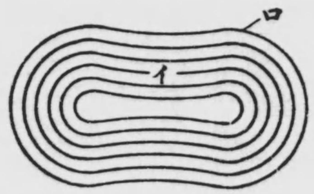
【文辯】ソンなに神經質にヤキモキしなくとも、有限の距離から來る光線を無限と見たり、實際曲つてる弧の一部を直線と見るなどは、君も日常やつてるではないか。

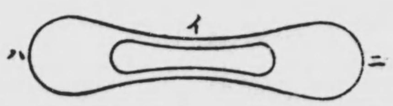
【津田】眼に見へない樣な誤謬なら寬假しろといふ御意見らしいが、ソレは使ひ場が違ふ。體格標準など

は、兎角陥り易い眼に見へぬ誤謬を特に擴大し强化して明るみへ出し、其誤謬から免れる樣にせねばならぬ側だ。丁度君の御意見と對蹠的反對の性質だよ、好い例がある。

或る中學校で教師が生徒の圖形に關する觀念の程度を試みる積りで、左圖甲の如き胡瓜(オウリ)形を畫き之に「イ」の一點を通して相似形を畫かせた處十人が九人迄殆んど乙の如き平行線を甲の周圍に畫いた。ソコで教師が更に三四度乙の周圍に平行線を畫いて見せたら、生徒は皆アッと叫んで首を縮めた。御覽の通り最後に丙圖「ロ」の樣に、甲とは似ても似つかぬ圓形のものになつてしまふ。然らば正しき相似形は如何といふに、「イ」の部分の幅が甲圖の二倍になるなら丁圖の如く「ハ」「ニ」の長さも元の二倍にならねばならぬ。省令標準は要するに此乙の誤謬に陷つたもので、而も誤算の程度が此圖例以下でないことも後の說明で合點行く筈だ。





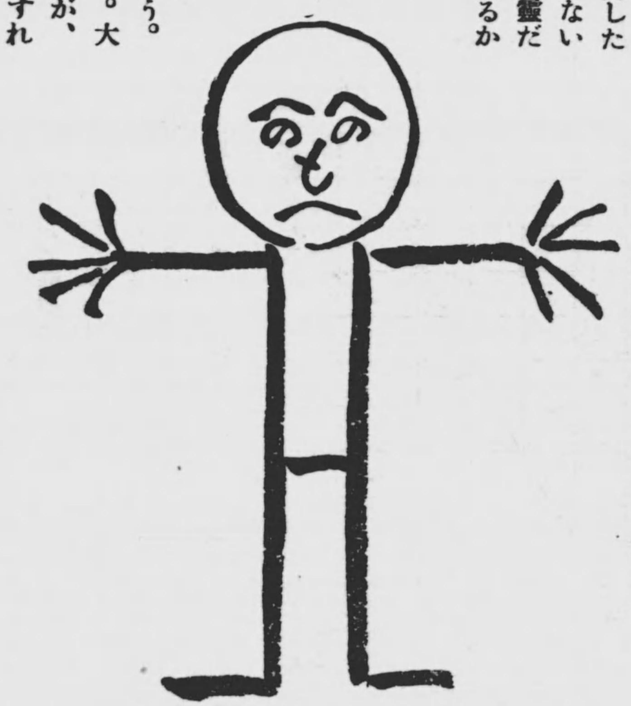

【文辯】 君はよくツベコベと理窟を言ふが「身長を以て體重を除した商」を比較の標準にするのは、獨り文部省計りではない。一步を誤れば千圓萬圓の損得になる生命保險さへ、矢張り此標準で契約の諾否を決定してるよ。

【津田】 君の主張はよく解つた。理論では及ばないから人數で押し通そうといふのだね。之が昔から新しい說を吐くものゝ最大の苦手(ニガテ)だ。今でこそ小學二三年生でも、地球が太陽の周圍を廻る位は知つてるが、昔は全歐洲の人が地球の周圍を太陽が廻ると信じて居り、初めて地球が太陽の周圍を廻ると言ひ出したものは火炙りになつた筈だよ。僕も火炙りではないが十五年前文部省から默殺の刑に處せられた幽靈だ今度全國學校醫の大法要に、此の幽靈が浮び出るか出ないかゞ見ものだね。

【文辯】 要するに發育とか體格とかいふのは幽靈見たいな抽象論だよ

だから餘りキチンとした標準はあり得ないだらう。

【津田】 文部省のは幽靈を通り超して化け者だね。大抵の幽靈は西洋のでも日本のでも人間に似てるが、文部省の標準は少し身長を延ばすか、縮めるかすれば人間にも似なくなつて來るからね。君方は發育標準を幽靈か化物の樣に思つてるか知らないが、之は科學の中でも最も嚴肅な誤算を許さない「數學の比」だよ。「比」がわからねば一寸說明しよう。



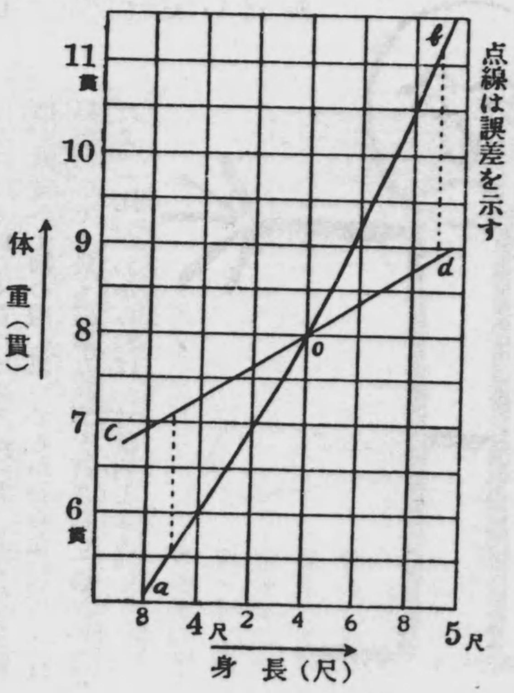
此の例は立體ではなく平面だが、君達も屢々活動映畫で五尺の小兒、七尺の令孃に涙をしぼられる筈だ。比の妙味は實にコヽにある、微細な一點に至る迄比の關係を失はない限り赤ん坊の顏を一尺、二尺の大寫しにしても、反對の一寸か五分かに縮めても矢張り愛くるしい赤ちやんだ。「比」の關係は斯く迄デリケートなものを、文部省は態々兒童の自由畫に見る樣な、「へのもへ」式に書き換へて、之は君の顏に似てる、其證據には、眼が横に、鼻が縱に向いてるからと、粗雜、誤謬の比に類するものを、無理强いに天下の學生々徒兒童に押し付けるのだ。

【文辯】 ソレ君も又抽象論の活動寫眞を引出したではないか。

【津田】 よろしい最後だ、尺(ものさし)とコンパスを用意したまへ、ソして下の圖から幾通りでも具體的數字を御引出しになるがよい。之なら抽象論とか幽靈話しとかは言へまい。

下圖方眼の縱線は身長(尺)を示し、横線は體重(貫)を示す、圖中abは幾何學的に計出(性と年齢の同一なる男女は立體相似形をなすといふ假定の下に)した、文部省統計十七年間平均十三歳男子の身長に對する體重增減を示す三次曲線(三次とは三乘の謂なり)であ

**十三歳男子体重(身長に對する)の三次曲線と文部省令標準の誤差圖例**






る。cdは大正九年文部省標準(現行訓令は同一法方のメートル、キログラム式)に規定せる十三歳男子の身長を以て體重を除した商の一尺當り一貫八百十匁(又は係數一、八一)になる點を連結して自然に生ずる一線(換言せばcd線上の任意の一點に應ずる身長を以て、同一點に應ずる體重を除したる商は常に一、八一となるの意)である。

此の圖は最も雄辯に省令標準の骨子たる「身長を以て體重を除したる商」の缺點を物語るもので、此の商一、八一は只特別に合はせたoの一點(本圖では四尺四寸一分と七貫九百七十匁の交叉する一點)―― 然り只實に此一點のみ統計上の體格に一致する丈けで、其他は全部比の計算上誤りであることが明瞭に解る。尙其誤算の程度が驚くべく大きいことを特に御注意あり度い。例べば本例の點線で示す平均身長から僅かに五寸上の四尺九寸一分の處では、二貫匁强相似形の實數に不足し、反對に五寸下の三尺九寸一分では一貫五百匁强實數より過剩である。即ち之で

**省令(訓令)の發育標評決定標準は、長身者には頗る實に過ぎ短尺者には甚だ酷に失する**

といふ缺陷を確實に圖示することが出來る。之でもまだ、目算よりは訓令標準が精密だと言ひ得るか。

【文辯】 イヤ理窟ではとても君にかなはない。只君をカラカツたり又皮肉なイヤミを言ふわけでもないが君のソレ程の御名論に係はらず、十五年前に比較的共鳴者が少なかつたと見へるね。

【津田】 御尤もの御話だ。併し新しい說といふものは何に係はらず、出た當座は概ね世間から繼子扱ひを受けるものだよ。僕の愚說と比べては勿體ないが、アノ世界、古今を通じての大發見であるメンデルの遺傳說でさへ、當人の存命中は學界から遂に一顧だも與へられず、死後幾年の後、澳國圖書館の古雜誌の中から、漸く同じ道の研究者に堀り出されたといふではないか。

ソレに比べれば僕の愚說など寧ろ豫想外の反響を呼んだと思ふね。此のリーフレットと稍似寄りのものを大正十年に千部刷つて頒つたが、當時學界に其人ありと知られた某醫大學長から、同情に充ちた激

勵の手紙を頂き、又多數の名士、無名士から贊辭褒辭激勵を受けて居る。現に十五年後の今日迄、當時のパンフレットが因緣で引續き文通を頂いて居る知名の大家が三四名もある次第で、君の想像する程無反應でもなかつた樣だ。僕は今回のリーフレットにも相當の反響を期待してる、只先回は鐵瓶の湯を沸かす樣なセッカチで大釜に火の廻らないのにムカッ腹を立てたのが僕の誤り。今度は急がず、休まずユックリと宣傳効果を待つことにする積りだ。

## 結語

書き易いから矢張り文辯と津田の問答にする。

【文辯】 ソレなら結局どうすればよいといふのか。

【津田】 簡單明瞭、文部省が誤つた訓令を廢止すればよいのだ。

【文辯】 併し何か標準がないと困るだらう。

【津田】 標準はある。文部省には三十餘年間もかゝつて集めた、男女幾十百萬人の身長、胸圍、體重の平均數がある。

【文辯】 丁度其平均數の身長の者はよいが、其外は君のいふ三乘の比を出さなくてはなるまい。

【津田】 實用的の計算なら、グラフで結構だ。今でも實際には男女二十四枚のカードを用ひて、省令標準に適用させてるが、其代りに一寸工夫を用ひて、前の圖に掲げた三次曲線$ar^3$を基準とするグラフを作らば、今の訓令標準の幾倍も正確、便利なものが得られる筈だ。

【文辯】 ソレも君の改革可能說を信ずるとしよう。只僕の常識が承知しない。何といつても大正九年以來十五年間も、君以外に餘り異論を言ふものがなく、今日迄用ひ來つた省令(訓令)標準が、君の言ふ如くボロクソのヤクザなものとは思へないがね——。

【津田】 君のは常識ではなく見たまゝの感じだらう。假令今日でも吾人の見たまゝの感じを辿らば、太陽が地球を廻るといつた方が餘程滑りがよい。直感では我等と對蹠關係の英國民どもは、倒に歩むから腦に充血するだろといつた樣な氣持ちがするね。但し



常識では地球が太陽を廻るに相違なく、省令(訓令)標準には大なる誤算があるに相違はないよ。

(中略)

萬に一つ、此後五年も十年も、今の儘に欺き得たとしたならば、ソレコソ殘念乍ら日本人は數に關する低能だといふことになるね。

【文辯】 日本國民を數に關する低能呼ばはりは怪しからぬ。

【津田】 怪しからんでも致方はない。マコトニ恥かしい話しだが歐米人が聞いたら嗤ふよ。「日本でも中學校で數學教へるありますか」位の奇問は屹度出る筈日本の軍事商工業に驚嘆畏懼の念を抱く歐米人も、ホントに此文部省の發育標準を知つた日には、日本人與し易しと輕蔑するに定まつてる。大にしては實に國辱の問題だ。

大にしては國辱の問題だが、小にしても御互學校醫の恥辱だよ。今日の學校醫が猛然立つて此誤謬を是正せねば、他日中學高等學校の數學、理學の先生から侮蔑の眼を以て吾人の行ふ身體檢査標準の不合理を責め付けられる筈だ。此時御互は何と返答するか、孔があらば入りたい心地がするよ。

【文辯】 ソレは學校醫よりも文部省が當の責任者で…

【津田】 ソコだ！此誤つた省令を出した當の責任者北博士はモー隱退して、文部省體育課は現在山川課長以下吉田、岩原、大西、などの俊敏揃ひだ。之等の諸君が今日學校醫の津田から「失禮乍ら貴下の御顏に墨が付いて居りますよ」と注意したに對し、左樣か有難うで一寸拭へばソレ迄のもの、卽ち今改むれば一寸氣の付き方が遲かつたといふ丈けで濟む。頑張れば北君の不明に卷き添へを喰つて、天下の笑ひとならぬとも限らぬ。謹んで御警告申上げる。

次は御互學校醫の問題だが、十五年もコンな誤れる標準を使つたことは餘り利巧とも言へず、名譽でもないが、氣の付いた今日から御互が結束して文部省に當らば、理義明白だから文部省も拒まない筈、又拒めない筈。依然として遲疑逡巡して居れば、前にも言つた樣に一般人士の科學と常識の兩方面よりする攻擊に、學校醫は勿論醫師全體が面目を失ふ恐

れがある。だから此際切に學校醫諸賢の反省奮起を望む次第。文辯君、君も恐らく異論はあるまい。

（終り）

## 〔餘　錄〕

**其一**、多少御聞及び下さつた方があるかも知れないが本論の主唱者津田が津田式體格計の發明者である關係上、省令（訓令）標準を廢し、拙案體格計を以て之に代らんとする利害の打算から、此論をなすものではないかの疑ひを招く恐れがある故、一言釋明して置く。

津田は現行省令發布後間もなく、省令に適合する體格計の一種を發明し、津田式發育計と名づけた。此發育計は現下一般の學校に用ひらるゝ二十四枚のカードよりは遙かに能率的である。體格計の工場で之を作つて賣りさへすれば、今より十五年前に相當の利益を得るチャンスがあつた。にも拘はらず文部省を助けて惡令の壽命を長くする樣なものを賣ることは、學問的良心が許さないとの理由で片意地に頑張り通し、大正十年北博士が廣島縣學校醫會へ來た當時には

賣れば無限に賣れる發育計の能率を、貴下と縣下學校醫の面前に試して御覽に入れよう。コンな有利な獨占的商品を犧牲にして文部省の誤謬を彈劾する津田の公明な質問に對し、なぜ返答しないかとの公開狀を突き付けて、同氏默殺の戰法に對抗したものだ。十五年前無限の需要を眼前に見つゝ、片意地で發育計を暗から暗に葬り去つた津田が、特許の壽命の盡きた十五年後の今日、物質的利害の爲にコンな攻擊の鋒先を文部省に向ける筈はない。御安心下さい。

**其二**、此問題を此度縣學校衞生醫會から本總會へ提出する議案となす如く努力すべき樣、友人から忠告を受けたけれども、本年は特に廣島縣で開く全國の總會に、正賓の文部省をボロクソにコキ卸す此議題は遠慮した。私の議題の爲に議場が白けては、有司、會員、半歲の努力に對して相濟まぬ。依て今回は此リーフレットで私の言ひ度い丈けのことを申上げ全國學校醫諸賢の公平な批評を仰ぐ丈けに止める。

若し來年も私に壽命があつて、懸軍長驅全國總會に臨み、自由人として活殺を來會諸賢の手に任せつつ、四面楚歌の中に奮鬪する樣なことでもあらば、其際は津田の所說に理ありと思召す限り、武士の情けで御援助が願ひたい。今から厚く御願して置く。

**其三**、以上私は相當無遠慮に、文部省の失態を責めたが、省みて私も惡い。大正十年の半ば以後は文部省の默殺（ミツダツ）戰法に嫌氣を催し、捲土重來を夢みつゝも或る道草を喰ひ、十餘年の久しき沈默を以て省令（訓令）の誤算を寬假した。此の道草（道草は或る著述の眞似事（マネゴト）で、今其第三版補訂に從事中）（註）とても別に一己の私利を計る仕事ではなかつたが、兎に角私に課せられた天命、天職とも覺へる學校衞生上の大問題に、努力を怠つて沈默を續け、所謂消極的の罪を犯したことは、自責の念に堪へない。謹んで大方に陳謝する。

（註）道草とは此物語の事第三版補訂は五年も前から手を着けてみた。

私の陳謝と共に文部の當局もアッサリと折れて頂き度い。大西鄕と大村益次郎が軍議に火花を散らした後で、西鄕の「おいどんの思ひ違ひでごわした。降參、降參」でケリの付くこともあつたとか、之が少しも西鄕の大を傷けなかつたと人はいふ。令名ある文部の諸公、大西鄕の襟度を以て、蕞爾たる一小學校醫津田の說に聽き、潔く現行の訓令を廢して、學校衞生界多年の妖雲を一掃する御英斷はないか、敢て問ふ。

（附　記）

此の「リーフレット」に對しても、文部省の釋明（しやくめい）は聽くべくして遂に聽くことを得なかつた。但し從前と異なり默殺（もくさつ）ではない。此の會へ臨席（りんせき）の大西學校衞生官から津田に對

し、此の法令は近く改正されると言明せられた。ソコで私も此の一篇を以て訓令に對する抗議の最後とした。

× × ×

以上が私の文部省發育概評決定標準に對する抗議の概略である。地球と橙の衝突で、世間の人が橙が勝つたと言はうが敗けたと言はうが、私は私の力で法令が改正されたなど、ソンな大ソレた考へを持つたことはない。法令は世の進運と共に改正されたので、私の抗議など問題ではない。只併し官吏が公人であり、公人が釋明せねばならぬ事件に釋明しない時、釋明し得ないのだと言はれても、之れ丈けは致し方があるまい。

勝敗は何れにしても、一切が歴史の流れである。間違ひだと申出る者のある法令が改正されたなら、目出度し〳〵で「ケリ」が付いた譯だ。私の話しも之で打切るべきだが、只私に合點の行かぬ謎が一つ殘つてゐる。

謎といふのは外でもないが、今回改正された文部省令身体檢査規定に「比体重」の一項があり、其「比体重」が今度こそは、無論「身長の三乘を以て体重を除したる商」とあるべきだと豫期してゐたのに、不思議にも改正省令の一節に、

**比体重の欄には身長を以て体重を除したる商**

とあつて、之は依然私の前に掲げた「リーフレット」の非難を全面的に受けねばならぬ計算法だが、文部省の大を以てするも數理を晦ますことは斷じて出來ない筈だ。然らば今度こそ五尺五貫匁の學生、六尺六貫匁の力士を標準となし得る數理が發見されたのか、ソレとも考へ様では未練のある十八年來の畸型兒を、非難攻撃の來る規格の表面からヒツコメて、目に立たない法文の端にコツソリと生かして置くといふ、甚だ男らしくない小刀細工とも受取れる。

たゞ併し前にも言つた様に私は今の時、上司の命令を批評することは遠慮する。只一事憂國の至情默視するに忍びない意見を一つ言はせてもらふ。曰く

文部省が若し右の法令中「身長」の下に「の三乘」の三字を挿入して下さつたら、今の國家安危に係る一大懸案とも言ふべき國民体位（一般國民と壯丁、學生の全部を含む）低下の問題に、突然一大光明が射すことになる。御承知の如く新聞、雜誌で國民体位が低下した、學生、壯丁がヒョロ〳〵高くなつたと喧ましく書いたとて、病人の數が增減したといふ以外には、ソレこそ暗中摸索といはふか、雲を摑むといはふか、全くの無標準である。而も体位低下の傾向を、革新、改良せんとするに當つて、第一に緊要の事は先づ適切な規格、標準を定めることにある位ゐは、今更私が說明する迄もない。

サテ假に私の右の希望「三字挿入」が容れられたなら、之れ迄全然暗であつた例へば或る一地の壯丁平均身長が十年前に比し一五八糎から一六〇糎へ二糎延びて、同樣体重が五〇瓩から五一瓩へ一瓩增した時、「**体位の比率は進歩か退歩か**」といふ問題が直ちに信賴の出來る「**具体的係數**」になつて現はれて來る。

| | 身長三乘ノ比体重 | 現行文部省比体重 |
|---|---|---|
| 一五八糎 | 五〇瓩 | 一二、六八 |
| 一六〇糎 | 五一瓩 | 一二、四五 |

右の例で現行文部省比体重では三一、六五對三一、八八の增加を示してるが、實際に幾何學定理の立体相似形質量から見た眞の比率では、一二、六八對一二、四五の減少を示すことになる。即ち**此壯丁の平均体位は低下してゐる。**此比率にアッと叫ばない樣な賴み甲斐のない方には私も賴む積りはないけれど、本書讀者の內貴下が如何なる御職業であらせられよふとも、此の比率に驚異の眼を瞠り、之は國民保健上の一大事であると直感さるゝ程の方々は、何卒貴下のお手に叶ふ丈けの御援助をして下さい。文部當局の說明を求めて頂くもよし、新聞、雜誌宣傳よし、意見上申よし、單にストーブ會議、食堂會議の話題にして頂く丈けでもよい。どの手を以てしても此の國民保健上の重要問題を、改良の道程に導いて頂き度いものだ。切に御助力を禱る。至囑々々。

三乘比の問題も案外の處に解決の曙光が見へてゐる。ソレは改正文部省標準に役立て

保險醫學上にも恐らく相當利用の道あらん

る爲め、抜目のない書店は「比体重、比胸圍、比坐高早見表」といふ三圓前後の本を賣出し、之が大多數の學校に實用せられてゐる。ソコで私の意見通り文部省の比体重が「身長の三乘を以て体重を除す」と改正せられても、「早見表」を刷りかへる丈けの犧牲で、運算の手數など既に問題でなくなつてゐる。更に新しき「早見表」が、文部省の實物である同省三四十年間の統計を取り入れて、前三十年間比率以上を黑字、以下を赤字とせば、全國の學生、生徒、兒童は一度に平均体位以上、以下の黑、赤二類に大別することが出來、同様の筆法で壯丁も一瞬に黑赤に二大別し得るといふ痛快な結果が待ち受けてゐる譯だ。

……　……　……

ファブルの昆蟲記で諸君の興味をソヽつた筈の或る昆蟲が、或る他の昆蟲の体内に卵を生み付けて孵化を待つといつた様な眞似をして、私が此の方角違ひの「保險物語」の中



へ私の國民体位向上に就ての切なる意見を生み付け、大方の哺育を俟つ憐れな心中を御推察、馬鹿氣た脫線との御叱りを勘辨して頂き度い。

×　×　×

話は再び大正十年の昔に返る。文部省の体格標準が出て私の体格計賣行は急に鈍くなつた。併し私は其時既に都合のよい發明を完成してゐた。ソレは文部省の新法令草案が出ると直ぐに、此法令の標準も私の体格計を改造すれば必ず計測出來る筈だと直感した。直ちに案を立てゝ石本君兄弟に見本の製作を賴んだ處、豫想以上に完全な成功で、イツでも新法令適合の計算器として賣出し得る自信を得た。

前の發明が体格計だから、今度は「發育計」と名を付けた。（見本は現に保存してある）此見本に優秀な能率のあることは、大正十年九月文部省の北博士へ、會衆の面前で試演を申込んだ位確信があつた。併し愈々体格計の製造を發育計に代へねばならぬ間際、言

はば「スイッチ」を切りかへる段になつて、急に煩悶が起り始めた。

天に聲あり。汝は折角の發明を改惡して文部省の誤謬を助け、惡令の壽命を長くする様なことをして、學問的良心に恥ぢないかよ。……直ぐに又惡魔の聲がする。全國に三萬六千の學校があるだらふ。体格計發賣の經驗から言へば、此内二萬以上はお前の發育計を買ふよ。モー何十と纏まつた注文が澤山來てるではないか。一個五圓で賣つても第一期の賣上げが十萬圓、十萬圓を棒にふつて片意地を通す氣かよ。工場は既に出來てるから企業の危險は全くないだらう。それを今中止したらお前は醫者で立ち行けても、御前の爲に二人迄安定した教師の職を擲つた石本君兄弟に濟まぬだらう。……幾夜か不眠の煩悶をした。話しは長いが結局体格計も發育計も賣らぬことに決心した。此決心を持つて屠所の羊の如く石本君兄弟を訪問した。若し此の時石本君からイヤミの一つも聞かされたら、僕の決心は鈍つたかも知れぬ。「三越で矢張り妾になると決め」といふ弱點は誰れも皆持つて居るもの。幸ひに發育計の見本迄作つて呉れた石本君兄弟からは、泣き言一つ聞かなんだ。萬一工場が立ち行かねば醫者の收入でどうにかする、それ迄は文房具の内職で奮闘して見るとの申分れ。石本君の事は後にまだ話す。

それから弔ひ合戰の積りでウンと文部省へぶつかつた。……一寸待つた。少々初の約束と違ふ。君は簡單率直に平凡人の身の上話しをするといふから、ツイウカ〳〵と讀んで行けば際限がない。保險と全然方角違ひの体格問題を開かされて、少々アテられ氣味だとのお小言が出た様だ。

まことに御尤も千萬。實は斯くも長々と方角違ひの話しを聞いて頂いたのには二つの目的があつたのだ。其一つは無論前に申上げた「或る昆蟲が他の昆蟲の体内へ卵を生み付けて……」であるが、更に今一つの重要な目的は私の正直——前にも言つた様に持主が平凡人であるならば、馬鹿の二字を冠して馬鹿正直と呼ばれるのが普通の様だが——を證明するのが目的だ。

ハテサテお手數のかゝる正直の證明法だ。如何にも十萬圓を棒にふつて片意地を通す

など、馬鹿か狂人でなくては滅多にやらぬ生き方に相違ないが、其馬鹿正直が何の役に立つ？。

ソコだ。まことに氣障な證明だと叱られるかは知らないが、實はアメリカあたりでは古くから保險を勸誘すると言はず、「保險を賣る」と言ひ習はしてゐることは前にも書いた筈。日本でも此語が段々普通用語に變りつゝある樣だ。既に賣物と言へば商品、而も大きな商品だ。昨十三年度一ケ年丈けの現金取引きがザット七億圓、其商品の「物語り」を今私が書いてゐる。之が如何にして提灯になり、廣告用の「パンフレット」にならずに濟むかは、直ぐに此本の死活問題である。若し諸君が私を、決して嘘の言へない正直者、どんな誘惑があつても動かない變り種と安心して此本を讀まるゝならば、最初の一二章丈けでも諸君を動かすに充分と思ふ。イヤな自家宣傳と思はずに、平凡人の變つた述懷として今少し身の上話しやら、此本を出す迄の行きがかりを聞いて頂き度い。

保險は今から三十餘年前私が學校を出た計りの時某生命保險へ千五百圓加入したのを始めとし、其後は千、二千づゝ境遇の許す限り增して行き、始めて此の書物を書いた頃には家族の分を合せて漸く一萬圓に達して居た。初めの頃は單に興味を持つ。好きだ位の程度で保險の書物を時々窺くが關の山、未だ熱を持つ迄には至らなんだが、或る時私と同年のK某が五人の兒女を殘し無保險で死んだのと、同僚の町醫Sが私の勸めで五千圓の保險に入る筈を、一寸逡巡して二ケ月後れた爲に入り得ずして死んだことが動機となり、人助けの一端にならばとの老婆心から、大正七年の春醫業を休み三四ケ月東京に滯在して、圖書館に通ひ乍ら第一次の生命保險物語りを書き上げた。

出來上ると直ぐに某保險會社のアクチュアリー（保險技師）某氏に校閲を賴んだ處、素人に此の著作とは……と大變に褒められ、丹念にテニヲハ迄直してもらつた。狂人扱ひは受けなんだ樣である。此の原稿を鄕里に持ち歸り、友人知己親戚の甲乙に回覽させた處、不思議によく人を動かす。一冊の寫本が擦り切れない內に約二十萬圓餘の新契約が出來た。自分乍ら結果の意想外に驚くと共に、兼ねて抱いた保險の文書勸誘といふこと

が立派に出來るとの確信を得た。愈々出版の決心で序文を德富蘆花先生に御願ひした。

こゝ迄はすら〳〵と運んだが體格計と同樣の一頓挫が來た。それは前から氣に掛つて居た露西亞のルーブルが釣瓶落しに下つて行く。各國共に貨幣價値は下る一方。サテ貨幣價値の下落が世界の大勢とすれば日本も早晩免れまい。現に物價は年々騰貴する計りだ。然らば今保險を人々に勸めて高い金を掛けさせ、他日貨幣價値が下つて安い金（購買力の減じた金）を受取らせては一種の罪惡である……と斯かる考へから急に出版を思ひ止ることになり、それなら德富先生に無益の御手數を懸けては相濟まぬと、東京の糟谷へ電報を發したが間に合はず、既に先生は歐洲へ出發（例の日本から日本への旅）の後であつたから、トウ〳〵折角持ち出して頂いた原稿を長崎の船の中から返してもらつた樣な始末。

斯かる次第で、折角の思ひ立ちも水に流し、爾後十年間保險物語りの原稿は深く筐底に藏めて他へ見せぬことにした。元來貨幣價値の下落といふことは生命保險には相當の大問題で、今でも一部は未解決の宿題となつてをる。

此の冊子が單なる勸誘書であるならば貨幣價値の下落など夢にも書くべきではない。それは嫁に遣る娘の缺點を數へ上げて、之れでも取つて下さるかと問ふ樣なもの。正直ではあるが折角の緣談は破れるかも知れぬ只此の物語りは保險を有りの儘に話せばよいのだから娘の缺點で破れる緣なら破れてよい。後の喧嘩を初めにしよふと濟まして居られる。

併し話しの序に此の問題の結論を申上げて置く。貨幣價値の下落を恐れて保險を中止するのは愚だ。貨幣の價が下つて打擊を被るのは貯金も全く保險と同斷だ。株は貨幣が下れば上るけれど素人が手出しをすれば危くて仕方がない。其危險は貨幣價値の下落より十層倍も危い。土地は大いによいが少い金では致し方なく、少々の金を之れに固定すれば直ぐに質草にするか、投賣りせねばならなくなる。

ソレに保險は五年、十年掛けてもまだ保險金の六分の一乃至三分の一迄しか掛けては

ゐないが、貴下に保險の最も必要なのは、此五年、十年の内とも言へる。又現今の樣に現金配當が盛に行はるれば、之も立派な一つの對抗策になつてゐるし、更に保險會社の資產が被保險者の共有物と言ひ得るならば、會社が物に對して行つてる分の大掛りの投資(株式、土地の如き)は、實に立派な貨幣價値下落の保險になつてゐる。

貨幣價値の下落に遇つて、最大の勝利者は借金を負ふた人であることは、普通の經濟常識を持つた人なら皆知つてるが、多くの保險會社は先づ五年掛けたら五年、十年掛けたら最後迄の掛金を貸してくれる。生命保險の被保險者は、御希望とあらば最も無造作に且つ有利に、イツでも此最大勝利者になる機會が掴まれるとも言へる。

甚だ失禮な申分だが、諸君の内に生まかじりの半可通で、貨幣價値下落を理由に保險を忌避する方があるならソレは實に危險だ。著者の知人であつた一實業家は、相當名のある婦人雜誌で生命保險と貨幣價値下落といふ出たらめの記事を讀み、折角五六年も掛け續けた一萬圓の契約を解約して間もなく病死、丁度家運の傾くと此災危が一時に來た爲、ヒドク遺族を窮境に陷れたことがある。私も雜誌の無責任を憤り且つ悲んだ。

長い話しをするよりも最も具體的な例を諸君に申上げる。私が保險物語りの出版を中止した時にはまだ私一家の保險契約は一萬圓であつたのが、九年前此本の第一版發行の時は三萬五千圓、現今では更に其倍の七萬圓迄增して居る。損をするなら私も諸君と一緒に損をするから安心して御這入りなさい。

自分で保險へ入る位なら此の物語りも直ぐに世に出すべき筈であつたのだが、時勢の變化で殆んど全部を書き換へねばならなくなつたのと、それに此の十年の間故障百出で遂に其意を果さなかつた。まことに世間へ相濟まぬことゝ心の中で詫びながらも、ただ一日一日と延びて居た。

昭和五年の四月は京都の郊外一燈園の西田天香師に隨從して前後約一ヶ月計りを過した。訣れて歸る時に今度こそ萬難を排して保險物語りを出版せんものと思ひ、近い内に私の托鉢(奉仕のこと)振りを御目に懸けるかも知れませんと、約束ならぬ約束迄して歸

つたが又一年の歳月が流れた。翌六年の四月先生が布哇行きをなさる前二旬愈々出版しますと申上げて題字を書いて頂いた。

話しが一寸前へ戻るが、私が體格計でサン〳〵迷惑を懸けた石本君兄弟の工場は、豫て兩君の發明した器械鉋と溝堀鋸（何れも專賣特許）の二種の器械を製作することになり、工場は面目を一新して日の出の勢ひで繁昌し初めた。爾來十七八年の間世の景氣不景氣に係はらず廣告を控へねば製品が間に會はぬ位製作に追はれて居る。先年其筋から模範工場の折紙を付けられ、昨今は盛に各種精巧な鋼鐵製木工用機械を作つてゐる。

工場の名は今も津石製作所と呼ぶが私は全然關係がない。只私の片意地から一旦窮地に陷れた兩君が、自力で斯く發展し得たことを此の上なく喜んでゐる。ソレは一面私の責任解除になるから。

昭和六年の始め突然石本兩君の訪問を受けた。藪から棒に一束の紙幣を出して、之を返却するとの話。……實は其の前頃兩君に遇つた時、相變らず物を考へてゐるとの話が



出、昔から發明、發見は家族に喜ばれないものだとの話やら、私の橙合戰の如き第三者からは痛快がられても、近親からは馬鹿か狂人の仕事と見らるゝ外はないとか、体格計完成前後は家の經濟を七年も冬眠狀態にして、結局私の發明考案著作の經濟は、家計と別個獨立のものにしてるなど話したから、此の金は多分私を助ける積りだろふと察した。

只兩君は私の自尊心を傷けない樣に、体格計製作當時借り越した金に、利を付ければ此位になるから返すのだといふ。假令それにしてもサン〳〵御迷惑を懸けた揚句の殘金だ。返す金と言はるれば辭退するが法だが、當時私は前記家計と獨立の創案資金を不覺に友人に貸して、取り敢へずの出版に差支へてゐたから、兩君の好意を有難く頂いて置いた。私は良い友達を持つてゐる。

序に話して置き度いことは、私が舊版へ發明、發見は家族に喜ばれないと書いた爲、時時君は家庭的に不仕合せかと問はれるが、私は家庭的にも不仕合せどころか惠まれ過ぎてゐる。但し發明、發見の歴史を讀んで、エヂソンやキューリー夫人の如き特別小數事

情の人以外、發明、發見が家庭で歡迎された例しもなく、歡迎され度いと求めるのが無理だ。否私自身でさへ、中學時代の長男から、父に見習つたものか發明家になり度いとの希望を持ち出されて、覺へず戰慄した事がある。斯樣に觀念した上で自分の既往を顧みれば私は實に仕合はせであつた。町醫の本業に時間を費す以外は、家政、家計の全部を妻に任せて毫も後顧の憂ひなく、三十年來常にお金に緣の遠い創案に耽ることが出來た。此點私の良き妻に感謝する。

コンな事情で本書の第一、第二版は少しも吝しみのかゝらぬ淨財で出版され、而もソレが意外に賣れて出版費全部を回收したから、翌年直ちに第三版を出す積りであつたが、之も又私の故障で一年々々と延びて行き、今度第八年目に漸く補訂した第三版を出し得ることになつた。此間に私の創案資金も段々積み立てられたから、賣れる、賣れぬの心配など更になく、金儲けを度外に置いた一燈園の托鉢の氣持ちで、更に此本の第三版以下を江湖に送ることが出來る。今度は時勢に連れて廣告費迄見込んであるから一層心强い。

以上長々とだらしなく書き並べた身の上ばなしは、只此の小冊子を讀まるゝ諸君が、商人の廣告、宣傳と混同せず、讀んで行かるゝ內に心が動いたら、不思議な因緣で救ひの手が自分の上に降りたものとスナヲに受取つて、ドウか一人でも多くの人が保險の救ひに入られんことを希ふ老婆心に外ならぬ。

## 本書の反響と保險人の本書利用に就て

或る和尚さんの處へ、嫁さんが姑の無情を訴へに來た。最後の頼みが此姑を、人知れず病氣の樣にして殺したいから毒藥を與れとの事。和尚よしよしと一包みの藥を渡す、之を少しづゝ餅か饅頭の餡に混ぜて、毎日缺かさず食はすなら、屹度遠からず衰弱して死ぬに違ひないと。…其後一ヶ月經て以前の嫁が再び和尚を訪ねて曰く、此間頂いた毒藥を消す藥を下さい。姑が急に優しくなつて、生みの母親も及ばぬ位、こんなよい母さんに死なれてはたまらぬと泣き伏す。此の時和尚緩々と毒藥の種を明かし、心配するな、あれは只の砂糖であつた。姑を鬼にするも佛にするも御身の心懸け一つ。以後必ず此戒めを忘るでないぞ、と。……殺す積りで喰はせた毒饅頭でも、中實が旨くて毒さへなくば、嫁も姑も同時に救はれる。此册子も、假令保險賣る人の職業意識で讀者の眼に觸れたとて、私の筆執る心に邪念がない限り、必ず讀者を動かし得る筈だ。町醫生活二十餘年、十の八九が毒饅頭でも喰はされた樣な顏付で、イヤイヤ乍ら私の保險診査を受けた人々も、さて死んでみればコレは〳〵宏大無邊な保險の恩を、無心な遺族は涙で感謝する。ドーあつても此本は多くの人々に讀ませたい。——千思萬考——、ヨシ學問的肩書のない私は、保險賣る人の手を借りて、此本を日本國中へ擴めて頂かう。……

私の友人は私の此方針に反對して、「折角の好著を商品の廣告化して總崩しだ」と止めてくれたが、此の忠告ばかりは從ふことが出來なかつた。曰く、米屋さん、八百屋さんは布教師でも傳導師でもなく、無論衆生濟度、社會救濟の目的でもなくて、彼等自身の商業意識で動いゝるのだが、事實吾々は命の糧を此の兩者に仰いでゐる。之と同じく本書が保險賣る人の商業意識で讀者の前に運ばれたとて、斷じて書物の價値を上下するものではない。米は農民から買つても商人から買つても、榮養分に變りがないと同樣に——。

私に斯く決心の付いた以上、第三版以後の本書は專

情の許す限り、保險關係の新聞、雜誌廣告をする積りだ。更に此考へ方から發足した私が、保險人に向つて本書を見込客の前に運ぶことの有利を說いたのが、此本の廣告文である。其手始めが左に揭げる「保險銀行時報統計號」の廣告文で、ソレが丁度本章の

「本書の反響と保險人の本書利用に就て」

の內容と全然一致する故、左に轉載する。一般讀者には直接の必要もあるまいが、保險人諸君には見遁がすべからざる好き參考の文字と思ふ。左の一篇は「保險銀行時報一昭和十四年度統計號廣告文の書名と目次丈けを省いた全文ソックリである。—(以下廣告の全文)

× × ×

◎小部數乍ら此本は旣に試運轉濟みの第三版(著者の都合で最近數年間絕版)である。第一第二版に對する各方面の批評と、本書の用途を摘錄して見れば

**△學者と操觚界はドー見たか**

ドーして御眼に觸れたか、或る日私は透徹、深刻な本書の批評をして下さつた大學の先生の手紙を手にした。ソレは結論として最も適切な「國民的保險讀本である」との過分な褒辭、ソレが因緣となり御覽の通り未見の知己、園先生から此第三版へ序文を頂いた。

又本時報社を始め各保險雜誌や、會社社報の論說欄批評欄で快著だ、良書だと手離しに褒め立てられ、中には十餘段幾千字の細評もあつた。餘り子供扱ひ、素人扱ひは受けなんだ樣である。

**△會社はドー見たか**

人間財布から金を出すのが一等眞劍で正直だといふのが眞實ならば……本書出版後の見本配布に答へて、A會社から五十圓B會社から百圓の送金、外務員の指導書(敎科書)にするから勉强して部數を多く送れとの註文あり。「番町で、眼明き盲に、道をきゝ」の古い川柳を思ひ出してほゝ笑まれた。

**△第一線の外野人はドー見たか**

本書一册を命にして、私は立派に職責を果たしてゐますといつた樣な文意の禮狀を數々手にした。又本書絕版後著者祕藏の殘本を一寸外野人に貸したら斷じて返さない。曰く、金はイクラでも出すから本を返す丈けは許してくれ。之一つが保險ギライを征服したり、大



物を拾ふ私の命の武器になつてゐる云々。無論早くから五部、十部を求めて、自分の地盤へ廻覽を企てゝゐた向も數々あつた。

**△保險を買ふお客はドー見たか**

著者の學友K某醫博に此本を讀ませたら、先づ自らと二萬圓加入し、更に友人に讀ませて十萬圓這入らせたといふ手柄で、K君は某社の金鵄勳章に當る有功章を頂いた。其他本書で心動き千、二千、五千、一萬、二萬、五萬程度の保險を買つた實例は無數にあるが、或時大阪と神戶の中間の別莊地帶から、コンなハガキが舞ひ込んだ。「御著を讀んでツク〳〵感心し、本日大阪へ出て△△生命の△△君に遇つて少々保險を付けて置く云々」…。後日之を見た外野人が目を丸くし、福の神を逃がしましたねー此本の使が私であつたら……と嘆聲を放つた。更に今一つ此本は保險キラヒを治す妙藥の樣だ。著者の地方で名高かかつた保險キラヒの某銀行頭取が、此本の出版前の稿本を讀んでスツカリ改宗、現に十七八萬圓の契約を持ち、某社の社員代表をして御座るなど顯著な一例。

第一線外野陣の諸君、本書を讀まずしてクサルのは未だ早い。本書を一讀せば從來保險知識の足らざりしことを痛感し、希望も勇氣も一時に湧く筈である。否單なる希望と勇氣に止まらず、此本はチヤント具體的に諸君の進むべき明日の行程見取り圖を畫いてくれる筈だ。

大會社の樞機を握る幹部各位、一地方の重任を背負つて立つ支店支部長諸賢、部下の鞭撻、督勵はモー行き過ぎる程行き渡つてゐる。此先き此方面の改革には何程の餘地も期待もない筈だ。

ソコで百尺竿頭更に一步を進め、筆は劍よりも鋭しの諺通り、文書の持つ魅力を利用する考へで外野陣へ豐富に本書を配給し、プロパビリチーから來る効果率に俟つ傍ら、組織統制の能率を百パーセント利用する人力運用を以て、生保の海へトロール船を曳くの快擧を、誰れが眞先きに試みるであらふか。乞ふ、一本を手にして此書の示唆に眼を開け。

△何故に此本は人を動かす力が強いか

外野人の立場から見れば實の處著者自身が丁度手頃な客筋の一人で、先づ著者の保險契約が三萬圓、長男（醫學士）二萬圓次男（中學生）一萬圓、妻と娘三人で一萬圓、合計七萬圓の保險を買ひ溜めてゐる。顧みれば三十年前自分が這入る利害得失の爲に研究して興味を覺へたのが保險へ深入りをする抑々の始め、更に職業上無保險の悲劇を毎日の樣に見せ付けられたのが第一發願の動機。西田天香師から人間一生に何か捨身の御率公をと敎へられたのが第二の動機となり、畑違ひの保險の本を書く迄に至つた道行きのあらまし、ソコで此本の成立ちからいつても、「一の谷、押すな〳〵と、初手は言ひ」の一句で笑はせられる樣に、すゝめる人が後に立つて押すのではなく、先づ保險の海水浴へ飛び込んだ著者が、此イー氣持ちを味はつて御覽と招くのが一風變つた本書の持つ强味だ。

△如何にして本書を實戰に利用するか

之が最重要の問題だが、此利用には「自ら賢くなる」のと、お客を賢くする」の二道ある。



「自ら賢くなる」方に最近ヨッな例がある。毎月四千五千の責任額に泣いた外野人T君が、著者の或人へ說く「生命價値資本化」の說（本第三版へ增補せるもの）を側から傾聽して頗る感動、自ら此日を「吾が更生の日」と稱し、其日限り此說の一本槍で說き廻つた結果、奇妙にも其月から休みなく一萬以上の成績を擧げ初め次の決算期には破格の入賞（責任額四倍とかの成績）を喜んでゐた。次に

「お客さんを賢くする」方の例は本書の幾册かを見込客に回覽させるのだが、外野人は冗談に之を「ッヶ鉤式」といふ。時に腕大の鰻、鯰が漁れた話も聞く、更に此法には見遁しのならぬ（1）「訪問率增加」と（2）「地盤へ肥料」の二大利益が隨伴する。

（1）「生保販賣率は訪問率に比例する」の鐵則を知らぬ外野人は一人もないに拘はらず、十中の九人迄實行難に終る樣だ。然るに此本を持參して「珍らしい本が手に入りました、御覽置き下さい」が第一訪問……「御讀みになりましたか——今少しで」が第二訪問……「面白い本でした」と返して頂くのが第三訪問で、「讀後感は？」と問ふのが話のキッかけ、其中の幾％は善は急げの好結末が期待出來る。之なら何の無理もなく大切な訪問率增加が實行出來る。次の

（2）「地盤へ肥料」は著者の新熟語かも知らぬが失禮乍ら外野人諸君は多少でも貴下の地盤を肥やす肥料代を拂つた御記憶があるか。尺寸の土地も持たぬ小作農でも、年々肥料代の三、五十圓は支拂ふものを、君も△△△圓の月給の內から、たまに五分や一割の肥料代を奮發する熱意はあつてもよい筈。併し、本社と支店支部の幹部諸君も猛省一番の必要がある。諸君もマサカ現在の外野第一線を臺灣、北海道の山奥に見る如き農耕處女地とは思召すまい。否、隨分と殘酷に草の迄根掘り盡されてゐる筈だ。併し嘆息するには當らない、之れは保險思想普及の肥料さへ施すなら、無限の沃野であることは外國の例に見ても疑ふ餘地がない。

況んや此耕作は「速成栽培」がきく。數日の培養で五千一萬の收穫を得られるのは勿論、面白いのは前揭K醫博の樣に立派な芋蔓も育つ。兎に角之からの保險人は上下の各員擧つて自分の地盤を培ひ肥やしつつ、次次と收穫して行く心掛けがなくてはウソだ。其點に於て本書は絕好無二の肥料である。鋤鍬である。